

第三十三條 法人ハ本法其他ノ法律ノ規定ニ依ルニ非サレハ成立スルコトヲ得ス

法人ハ既ニ説キシ如ク自然人若クハ無主財産ノ集合体ニ權利ノ主格即チ人格ヲ付與スルモノナレハ自然ニ存在スルモノニ非スシテ法律ノ創制ニ係ルモノタルハ古來ノ法制ト學說トノ共ニ一致スル所ナリ、尤モ或ハ法人ノ自然存在説ヲ唱フル者ナキニ非ス、蓋シ法人タル資格ヲ受クヘキ團體其モノハ固ヨリ法律ノ力ヲ藉ラスシテ自然ニ存在スルモノナリ、然レモ此團體ニ法人タル資格ヲ與ヘテ之ヲ法律上權利ノ一主格タラシムルハ實ニ法律ノ威力ニ頼ル、故ニ夫ノ法人ノ自然存在説ナルモノハ要スルニ法人タル資格ヲ受クヘキ團體ノ存在ト其團體ノ受クヘキ法人タル資格トヲ混同シタルモノニシテ其誤見タルヤ明瞭ナリトス、是レ本法モ亦自然存在ノ説ヲ排シ本條ヲ以テ法人ハ法律ノ規定ニ依ルニ非サレハ成立スルコトヲ得スト明示シタル所以ナリ

蓋シ唯法ヲ立ツルノ主權者ノミ法人ヲ創制スルヲ得ヘシトハ羅馬法以來ノ法律ニシテポードリー氏モ亦其著書ニ於テ云ヘルアリ、曰ク「法人ナルモノハ法律或ハ命令等ノ形狀ニ於テ發現スル所ノ政權ノ干涉ニ因リテノミ存在スルコトヲ

總 則 編

得テ、而シテ社會ノ公權ハ法人ニ成立ヲ與フルノ權力ヲ有スルト同時ニ之ヲ剝奪スルノ權力ヲ有スルモノナリ、ポルトリスモ主權ノ行爲ハ其法律上ノ成立ヲ與ヘ又之ヲ廢罷スト云ヘルニ非スヤ」ト、元來法人ナルモノハ屢次反覆スルカ如ク自然人ノ如ク体形ヲ具備スルモノニ非スシテ法律ノ擬制ニ依リ假想的ニ其權利義務上一般ノ自然人ト同等ノ地位ニ立ツコトヲ得ルモノナリ、故ニ之ヲ假想的ニ人タル有様ニ於テ存在スト規定スルハ公益ヲ企畫スルニ付キ万能力ヲ有スル國家ノ主權者ノ外決シテ之アル可キニ非ス、即チ國家ハ其公益ヲ増進スル爲ニハ如何ナル事ナリモ爲シ得ヘキ威力ヲ有スルヲ以テ其公益ト信スル點ニ於テハ公私ノ法人ヲ設定シ之ニ權利ヲ有シ義務ヲ負ハシムルコトヲ得ルコト甚タ緊要ナリ、然ルニ若シ一個人ヲシテ隨意ニ之ヲ設定シ得セシムルモノトセン歟、公益ニ反スル團體ニモ一個人カ一旦之ヲ法人ト爲シタル以上ハ法人トシテ權利ヲ與ヘサル可カラサル結果ヲ生スルニ至ラン、是レ獨リ法人設立ノ原理ニ反スルノミナラス其弊害ノ底止スル所ナキハ固ヨリ言フ俟タズ、即チ法人ナルモノハ其本質上ヨリスルモ又社會ノ利害上ヨリスルモ法律ヲ以テ其成立ノ基礎ト

爲サ、ル可カラサルナリ
 本條ニ付キ注意スヘキハ所謂法律ノ規定ニ依ルニ非サレハ成立スルヲ得ス
 トハ一法人ノ設立毎ニ一法律ノ制定ヲ要スト云フニ非ス、又一法人ノ設立毎ニ
 必シモ國家ノ認許ヲ要スト云フニ非ス(少クモ第三十四條ニ規定スル以外ノ法
 人ニ付テハ)唯本法其他商法等特別法ノ規定ニ遵依シ其規定セル條件法式及ヒ
 手續等ヲ踐行スルニ非サレハ設立ス可カラサルヲ謂フナリ

第三十四條 祭祀、宗教、慈善、學術、技藝其他公益ニ關スル社團又ハ財團ニシテ營利ヲ目的

トセサルモノハ主務官廳ノ許可ヲ得テ之ヲ法人ト爲スコトヲ得

本條ハ公益的法人ノ設立條件ヲ定メタルモノナリ
 法人ハ法律ノ規定ニ依ルニ非サレハ成立スルヲ得サルヲハ前條ノ既ニ明示セ
 シ所ナリ、故ニ法律ノ規定ニ依ラサル法人ハ固ヨリ成立スルヲ得サルモ之ニ反
 シテ法律ノ規定ニ依ル法人ハ其單ニ法律ノ規定ニ依ルノ一事ヲ以テ自由ニ之
 ヲ設立スルヲ得ルヤ、即チ苟モ法律ノ規定ニ依ルキハ他ニ何等ノ條件ヲモ要
 セスシテ法人ト爲スコトヲ得ルヤ、本法ハ此問題ニ付テ法人ヲ其目的上ヨリ二種

總 則 編

總 則 編

ニ區別シ、營利ヲ目的トセサルモノト之ヲ目的トスルモノトニ關シ各其設立ノ
 條件ヲ定メタリ、本條ハ即チ前者ニ關シ而シテ後者ハ次條ニ於テ之ヲ定ム
 「營利ヲ目的トセサルモノ」トハ一個人ノ私利ヲ直接ノ目的ト爲サ、ルモノ即チ
 公益ヲ直接ノ目的ト爲スモノヲ謂フ、本條ノ法文ハ「公益ニ關スル社團又ハ財團
 ニシテ營利ヲ目的トセサルモノ」トアルニ因リ公益ニ關スル社團又ハ財團ニシ
 テ營利ヲ目的トスルモノハ如何トノ疑ヲ生セシムレ、本條ノ意ハ決シテ然ラ
 ス、公益ニ關スルモノハ即チ營利ヲ目的トセサルモノニシテ營利ヲ目的トセサ
 ルモノハ即チ公益ニ關スルモノト謂フ可ク、二者全ク同一ニシテ本條ハ唯反覆
 丁寧ニ之ヲ詳示シタルノミ、蓋シ公益ト私利トハ必シモ相反セス、否公益ハ必ス
 私利ヲ爲シ、私利モ亦多クハ公益ヲ爲スヲ以テ本條ト次條トノ間即チ營利ヲ目
 的トスルト否トノ間ニハ必シモ的確ナル區別差異ノ存スルモノニ非ス、唯公益
 ヲ直接ノ目的ト爲セハ間接ニ私利ヲ爲シ私利ヲ直接ノ目的ト爲セハ間接ニ公
 益ヲ爲スヘク、本法ハ即チ其直接ナルト間接ナルトニ依リテ之ヲ區別シタルモ
 ノナリ

總 則 編

然ラハ則チ本條ハ社團又ハ財團ニシテ營利ヲ直接ノ目的ト爲サ、ルモノ即チ公益ニ關スルモノハ云々ト謂フノ意ニシテ祭祀、宗教、慈善、學術、技藝等ハ其所謂公益上ノ目的ヲ例示シタルモノナリ、故ニ社寺、學校又ハ此等ノ目的ヲ有スル協會其他ノ團體ハ皆本條ニ適合シ本條ノ規定ニ遵依シテ法人ト爲スヲ得ヘシ」社團財團ノ何モノタルコトハ前ニ一言セシカ茲ニ更ニ其區別ヲ說示センニ、社團ハ自然人ノ聚合体ニシテ財團ハ無主財產ノ聚合体ナリ、故ニ前者ハ民事商事ノ會社等ノ如ク公私ノ利益ヲ目的トシテ結合シタル數人ノ團體ニシテ後者ハ諸種ノ學校又ハ協會ノ如ク公益ヲ目的トシテ義捐セラレタル財產ノ集合ナリ、二者其組織ノ實質上ニ於テ相異ナルコト此ノ如シ、隨テ法律上ニ於テハ此相異ヨリ生スル種々ノ區別アリ、例ヘハ社團ニハ社員アルヲ以テ社員ノ總會アリ、又其定款ニ社員タル資格ノ得喪ヲ規定スルコトヲ要スルモ財團ニハ社員ナルモノナキヲ以テ其總會ナク、又寄附行爲ニ於テ社員ノ事ヲ云々スルノ要ナシ、其他法人ニ關スル解散ノ事由ノ如キ遺產ノ處分ノ如キ法律上ノ取扱ヲ異ニスルコト尠カラズ、其詳細ハ後ノ各條ニ於テ自ラ明ナリ、唯茲ニ注意スヘキハ本法ノ規定上、法人

總 則 編

ノ目的ニ關シ二者ノ大異アルコト是ナリ、本法ハ社團ニ付テハ營利ヲ目的トスルモノト否ラサルモノトヲ併セ認ムルモ、財團ニ付テハ單ニ本條ニ於テ營利ヲ目的トセサルモノヲ認ムルニ止マリ營利ヲ目的トスルモノハ之ヲ認メズ、是レ必シモ二者ノ實質上ヨリ此相異アルニ非サルモ立法上、特ニ此ノ如ク規定セシモノニテ其詳細ハ之ヲ次條ノ下ニ述ヘン

抑、此公益ヲ目的トスル社團又ハ財團ハ其團體ヲ組成スルコトハ固ヨリ各自ノ自由ナルモ之ヲ法人ト爲スニ付テハ本條ハ主務官廳ノ許可ヲ要スルコト爲セリ、是レ如何ナル理由ニ依ルヤ

中世以降各國ノ法制ニ於テ法人ノ設立ニ關シテハ所謂特許主義ヲ採リシモノ尠カラス、特許主義ニ二種アリテ一ハ國家ノ主長ノ特許ヲ要シ一ハ特ニ制定シタル法律ノ認許ヲ要ス、此主義ハ許否ノ權、其特許者ニ在ルヲ以テ或ハ偏頗ノ虞アルノミナラス輒近經濟上ノ進歩ト公共心ノ發達トニ因リ法人ノ設立、利益ヲ繁キニ一々特許ヲ要スルハ其不便タル甚タ大ナリ、而シテ特許主義ノ此弊アルヤ一方ニ於テハ恰モ政治上ニ於テ人民ノ自主自由ヲ主張スルノ議論熾シニ起リ

總 則 編

其思想ハ大ニ立法上ノ主義ヲ更新スルニ至リ遂ニ法人設立ノ事ニ波及シテ特許主義ヲ排忌シ自由設立主義ヲ執ル者アルニ至レリ此主義ハ當事者ノ意思ニ因リ自由ニ法人ヲ設立スルヲ得セシムルモノニシテ干涉偏頗等ノ弊害アルヲ無シト雖モ此ト同時ニ放任ニ失スルノ弊害ハ亦之ヲ免レサルナリ公益上重大ノ關係アル法人ニ對シ國家ノ監督ヲ疎ニスルモノニシテ決シテ長制ト謂フヲ得ス於是乎所謂準則主義ナルモノヲ生シ法律ヲ以テ準格ヲ定メ之ニ適合スルモノハ法人ト爲スヲ得ルヲトセリ是レ二者ヲ折衷シタルモノニシテ比較的ニ長制ナリト謂フ可シ

是故ニ本法ニ於テハ營利ヲ目的トスル法人ニ付テハ次條ニ於テ略シ此準則主義ヲ採レリ然レモ營利ヲ目的トセサル社團又ハ財團ニ至リテハ公益ニ直接ノ關係アリテ一方ニ於テハ公益ニ至大ノ裨補ヲ與フルト同時ニ他ノ一方ニ於テ往々社會ノ秩序公安ヲ妨ケ又ハ風俗ヲ亂ル等公益ヲ害スルヲ亦抄小ナラサルヲ以テ夫ノ專ラ營利ヲ目的トスル法人ニ比シテハ多少國家ノ監督ヲ加ヘサル可カラス是ヲ以テ本法ハ準則主義ト特許主義トヲ折衷シテ二者ノ長所ヲ并收セ

總 則 編

ント欲シ主務官廳ノ許可アルニ非サレハ之ヲ法人ト爲スヲ得サルヲトシタリ蓋シ保護ト取締トニ於テ各其宜シキヲ得タルモノト謂フ可キ歟

人或ハ曰ク「營利ヲ目的トスル組合又ハ會社ノ如キ專ラ一個人ノ私益ヲ目的トシ汲々以テ巨利ヲ博セントスルノ團體タルモノニハ立法者ハ之ニ與フルニ法律ノ準則ニ依リ自由ニ法人ト爲スヲ得ルノ權利ヲ以テシ而シテ祭祀宗教慈善學術等公益ニ關スル一層高尚ナル目的ヲ有スル團體ニハ自由ニ法人ト爲スノ權利ヲ與ヘスシテ必ス特ニ主務官廳ノ許可ヲ得ヘキモノト爲セシハ頗ル事理ノ輕重ヲ誤マルモノニ非スヤ」ト

其レ然リ豈夫レ然ランヤ深ク之ヲ顧慮スレハ本法ノ規定ハ能ク立法ノ正旨ヲ得タルヲ首肯スルニ難カラサルナリ前ニ一言セシ如ク營利的團體ハ概テ社員等カ依リテ以テ私利ヲ謀ルモノニシテ其利害ノ及フ所ハ專ラ社員及ヒ之ニ關係セル者ノ私益ニ在リテ純然タル公益ニハ其關係ヲ及ホスヲ甚タ大ナラス故ニ國家ハ一々之ニ關涉シ特ニ其設立ヲ許否スルノ必要ナク唯其社員及ヒ其關係者ヲシテ其長否盛衰ニ配慮セシムレハ則チ足レリトシ隨テ唯或設立條件ヲ

總 則 編

豫定シ之ニ依リテ一個人ヲシテ自由ニ法人タル資格ヲ設クルコトヲ得セシムル所謂準則主義ヲ得策トスルモ、之ニ反シテ専ラ公益ヲ目的トスル團體ハ其企畫スル所モ亦専ラ公益ニ關スルモノニシテ祭祀、宗教、慈善、學術等ニ付テ企畫スレハ其影響スル所モ亦直接ニ公益ニ關シ、國家全般ノ風俗、秩序、治安、進歩等ニ在ルヲ以テ國家ハ直接ニ其設立ニ于涉シ必ス公益ヲ害セサルモノト思惟スルモノニ限リ特ニ之ヲ法人ト爲スコトヲ許可スルヲ得策トス、是レ此ノ如ク二者ノ待遇ヲ異ニスル所以ナリ、其他更ニ第二ノ理由トシテ之ニ附加スヘキモノアリ、即チ營利ヲ目的トスルモノハ性質上自然ニ有期ノモノタル可ク、其財產ヲ一躰トシ不動ノモノト爲シ置クモ無窮ニ財產ノ流通ヲ滯塞スルモノニ非サルヲ以テ經濟上ノ進歩ヲ獎勵スルカ爲メ百利アリテ一害ナシ、之ニ反シテ他ノ公益的團體ニ至リテハ性質上通例永久ノモノタルヲ以テ財產ノ流通ヲ滯塞シ社會ノ經濟ニ妨害ヲ與フルコト尠カラズ、此點ヨリスルモ亦彼レニ放任シテ此レニ干渉スルノ必要アリト謂フ可キナリ

第三十五條 營利ヲ目的トスル社團ハ商事會社設立ノ條件ニ從ヒ之ヲ法人ト爲スコトヲ

得

前項ノ社團法人ニハ總テ商事會社ニ關スル規定ヲ準用ス

本條ハ營利的法人ノ設立條件ヲ定メ併セテ此法人ニ準用スル規定ヲ示シタルモノナリ

總 則 編

一個人ノ利益ヲ直接ノ目的トスル社團ハ公益ニ關スル團體ト其目的已ニ異ナルヤ其實質其行動相同シカラス、隨テ其規定ヲ異ニシ就中其設立條件ヲ異ニスルヲ要ス、故ニ公益的團體ヲ法人ト爲スニハ主務官廳ノ許可ヲ要スルモ營利的團體ニ付テハ之ヲ要セス、單ニ準則主義ヲ採リテ法律ニ定メタル準則ニ依リ自由ニ法人ト爲スコトヲ得セシムヘキハ前條既ニ說述シタル所ノ如シ然ルニ此營利的團體ヲ法人ト爲スノ準則即チ營利的法人ノ設立條件ハ之ヲ如何ニスヘキヤト云フニ、營利的團體中、十ノ八九ヲ占ムルモノハ商事會社ニシテ其規模ノ最モ大ナルモノモ亦商事會社ナルヲ以テ商事會社ノ設立ニ必要ニシテ適當ナル條件ヲ規定セル準則ヲ設ケ、其目的ノ民事タルト商事タルトヲ問ハス總テ營利ヲ目的トスル團體ニ之ヲ適用スルコト爲スハ立法上最モ簡便ナル

手段トス、是レ本條第一項ノ規定アル所以ナリ、而シテ商事會社ノ設立條件ハ商法ニ其規定アルヲ以テ總テノ營利的團體ハ皆其規定ニ遵依シ以テ法人ト爲スヲ得ルモノトス

然リ而シテ商事會社ノ設立條件ニ關スル規定ニ遵依シテ法人ト爲リタル營利的團體ニ付テハ又其民事ヲ爲スモノト商事ヲ爲スモノトヲ問ハス總テ商事會社ニ關スル一切ノ規定ヲ適用スルモノトス、即チ此等法人ノ管理、解散、清算其他社員間ノ權利義務及ヒ第三者トノ法律關係等總テノ取締及ヒ保護ノ規定亦皆之ヲ商事會社ノ規定ニ依ラシムルコト爲スモ別ニ不良ノ結果ヲ生スルコトナキヲ以テ本條ハ更ニ第二項ヲ設ケテ此事ヲ規定シタリ

然レモ農業漁業其他ノ非商事團體ニ關スル特別法令アルハ決シテ本條ト相妨クス、即チ本條ノ例外トシテ其設立條件ヲ初メ其他一切ノ事皆共ニ其特別法令ノ規定ニ遵依スヘキモノタルヤ多言ヲ須非サルナリ
終リニ注意スヘキハ本條カ財團ヲ除斥セシコト是ナリ、既ニ前條ニ其端緒ヲ示シタル如ク公益的團體ニ付テハ社團ト財團トヲ併セテ之ヲ認メシモ營利的團體

總 則 編

總 則 編

ニ付テハ單ニ社團ト記シテ財團ノ語ナキハ必竟之ヲ認許セサルノ主旨ニ出ツ、蓋シ實際ニ於テハ營利ヲ目的トスル團體ハ皆ニ社團ノミナラス財團モ亦之アルヘシト雖モ本法ハ之ヲ認メス、即チ營利的財團法人ハ之ヲ認許セサルナリ、其之ヲ認許セサルノ理由果シテ如何

抑、法律カ自然人以外ニ種々ノ人格ノ存在ヲ認ムルハ其結果タル徒ニ法律關係ノ錯雜ヲ招クニ過サルヲ以テ法人ノ擬制ハ適用ノ範圍ヲ其必要ノ程度ニ限制セサル可カラズ、而シテ各個人カ公益事業ノ爲ニ財產ヲ義捐スルハ最モ嘉賞シ且獎勵スヘキ美事ニシテ此ノ如キ財產ヲ適當ニ保存シ使用シテ其公益上ノ目的ヲ達セシムルハ法律ノ大ニ勉ム可キ所ニシテ隨テ其財產ノ獨立存在ヲ認メ之ニ人格ヲ得セシメ以テ其行動ヲ簡便敏活ナラシムルハ立法上緊要ノ事項トス、是レ公益的財團ハ之ニ法人タル資格ヲ得セシムル所以ナリ、然ルニ或財產ニシテ單ニ私益ノ爲ニ存在スルモノナルハ其所有者ヲ離レ別ニ其獨立存在ヲ認メ以テ之ヲ法人ト爲スノ必要アルコト無シ、既ニ其必要アラサルニ之ヲ法人ト爲スコトヲ認許セハ是レ徒ニ法律關係ノ錯雜ヲ招クモノニシテ所謂有害無益

ノモノタルヲ免レス、本條ガ前條ト異ナリ營利的團體ヲ法人ト爲スニ付テ特ニ財團ヲ認許セザリシハ即チ此レカ爲メニ外ナラサルナリ

第三十六條 外國法人ハ國ノ行政區畫及ヒ商會社ヲ除ク外其成立ヲ認許セス但法律又ハ條約ニ依リテ認許セラレタルモノハ此限ニ在ラス

前項ノ規定ニ依リテ認許セラレタル外國法人ハ日本ニ成立スル同種ノ者ト同一ノ私權ヲ有ス但外國人カ享有スルコトヲ得サル權利及ヒ法律又ハ條約中ニ特別ノ規定アルモノハ此限ニ在ラス

總 則 編

本條ハ外國法人ノ認許及ヒ其享有ス可キ權利ヲ定メタルモノナリ
前三條ノ規定ハ皆內國法人ノ事ニ係リシカ本條ハ更ニ進シテ外國法人カ日本法律ノ下ニ於テ有スル地位ヲ規定シタルモノナリ
蓋シ日本法律ハ日本國民ニ下セル主權者ノ強行的命令ナリ其效力ノ及フ所固ヨリ宜シク之ヲ日本國家ノ主權ノ下ニ屬セル者ニ限ラサルヘカラス又限ラサラント欲スルモ得ヘカラス是ヲ以テ前三條カ我主權ニ從屬スル內國法人ノ成立ニ關スル事項ヲ規定セシハ固ヨリ其當ヲ得タリト雖モ元來我主權威力ノ及

總 則 編

フ所ニ非サル外國法人ノ事ヲ茲ニ規定シタルハ譬ニ蛇足ヲ添フルノ嫌アルノミナラス實際毫モ必要ヲ見サルノ感ナキニ非スト雖モ然レモ退テ之ヲ熟察スレハ特ニ本條規定ノ洵ニ我國ノ公益ニ適シ立法ノ正ヲ得タルモノナルヲ悟了スヘシ夫レ閉國鎖港ノ舊夢ヲ破テ宇內列國ノ群ニ入り商利ヲ爭ヒ實力ヲ競ヒ以テ國是ト爲スノ今代ニ在リテハ通商貿易ノ日ヲ追フテ益頻繁ニ卦ク可キハ獨リ事物進化ノ順序ニ於テ避ク可カラサルノミナラス我國ノ公益上ヨリスルモ亦極メテ望ヲ屬ス可キ事項タルハ論ヲ竣タス然リ而シテ通商貿易ノ既ニ頻繁ナルニ及ヒテヤ我國ノ一私人又ハ法人タル商人其他ノ者カ外國ノ一私人タル商人其他ノ者ト取引シ交通スルハ勿論外國ノ法人タル商人其他ノ者ト取引シ交通スル場合モ亦極メテ多カル可キハ亦言フ俟タス而シテ此等ノ場合ニ雙方事情ノ行違等ヨリシテ權利義務ノ關係ニ付キ爭訟ノ紛起ス可キハ亦避ク可カラサルノ事實タリ且外國ノ公ノ法人ト我國公私ノ者ト契約ヲ取結ビタル等ヨリ起ル所ノ爭訟モ亦少カラサルヘシ故ニ外國法人タル者カ日本ノ法律ノ下ニ於ケル地位ヲ確定シ以テ異日ノ紛議ヲ裁斷スルノ資料ト爲スハ實ニ至要必須

總 則 編

ノ事ニ屬ス、是レ特ニ本條ノ設アル所以ナリ
 佛國ニ於テ其民法ヲ公布スルヤ事、倉卒ニ出テ、此等ノ事ヲ豫想シテ特ニ明文ヲ
 設クルニ至ラザリシカ、其後時世ノ必要ニ迫ラレ特別法、又ハ條約ニ依リ外國商
 事會社ニ付テハ其佛國法律ニ於ケル地位ヲ定メタリト雖モ其他ノ法人ニ關シ
 テハ法文全ク闕如スルヲ以テ學者及ヒ實際家ノ議論區々トシテ一定スル所ナ
 シ、本法ノ如ク明確ニ之ヲ規定スルノ優レルニ若カサルナリ
 我民法ハ本條ヲ以テ二三ノ除外例ノ外外國法人ノ成立ヲ認許セサルヲ原則ト
 爲シタリ、其立法ノ理由ヲ攷究スルニ蓋シ二個アルモノ、如シ
 其一、法理上ノ理由 凡ソ一國ノ主權ハ其境土内ニ於テノミ行ハル、而シテ外國
 ノ國家ハ其主權ヲ以テ彼レ自國境土内ニ於ケル公私ノ法人ヲ創制シ得ヘキモ
 日本國內ニ於テ之ヲ存立セシムルヲ得ヘキニ非ス
 其二、公益上ノ理由 凡ソ法人ノ成立ハ大ニ公共ノ利害ニ關係スルモノナル
 ヲ以テ内國ノ法人スラ尙ホ法律ノ規定ニ依ルニ非サレハ總テ成立スルヲ得ス、
 然ルニ若シ我法律ニシテ妄リニ外國法人ノ成立ヲ認ムルニ於テハ獨リ前第三

總 則 編

十三條ノ精神ヲ傷害スルノミナラス内國ニ於テハ公益ヲ害スルモノト認メラ
 レ法人タル成立ノ認許ヲ得ル能ハサル團體ト同一ノ外國ノ團體カ其法律ニ依
 リ法人タル成立ヲ得テ我國ニ侵入スルアラハ實ニ言フ可カラサルノ危害ヲ惹
 起ス可キハ至明ノ事タリ
 右二個ノ理由ニ因リ本條ハ原則トシテハ外國法人ノ成立ヲ認許セサルナリ、然
 リト雖モ絶對的ニ此原則ヲ固執シテ如何ナル法人モ之ヲ認許セザランニハ亦
 我邦公共ノ利益ニ反スヘシ、何トナレハ近世外國貿易ノ重要ナル部分ハ主トシ
 テ法人ノ事業ニ屬シ、隨テ外國法人ハ一切之ヲ認許セストセハ外國貿易ハ此レ
 カ爲ニ非常ノ障害ヲ生ス可ケレハナリ、是故ニ歐米諸國ニ於テハ漸ク法律、條約
 又ハ裁判例ヲ以テ此原則ノ除外例ヲ設ケ、國際上又ハ經濟上ノ必要アルモノハ
 外國法人ト雖モ亦之ヲ認許スルヲト爲レリ
 今ヤ除外例ニ屬スル外國法人ヲ見ルニ左ノ三種アリ
 第一、國及ヒ國ノ行政區畫 國トハ我國既ニ條約ヲ締結セル諸國ハ勿論、未タ
 之ヲ締結セサル諸國ト雖モ亦之ニ包含スルヤ疑ヲ容レサルナリ、又國ノ行政區

書トハ府縣市町村ノ類ヲ云フモ其國法律ニ依リテ制度ヲ異ニシ且或行政區畫ヲ法人ト爲スヤ否ヲ異ニスルモノナレハ茲ニ之ヲ指定シ難ク唯各國ノ法律ニ就テ之ヲ知ルヘキノミ而シテ其行政區畫(其國ニテ法人ト爲セル)ハ各國相互ニ之ヲ法人トシテ認許スルヲ國際關係上ノ慣例タルノミナラス相互ニ之ヲ認許スルモ決シテ危害ヲ醸スノ憂ナシ是レ輓近各國カ相互ニ之ヲ認許スル所以ニシテ而シテ本法ノ之ヲ認許シタルモ亦此レカ爲タルナリ

第二、商業會社 既ニ述ヘタル如ク今時ノ外國貿易ハ會社事業ニ屬スルモノ最モ多シ然ルニ若シ外國ノ商事會社ハ我國ニ於テ其法人タルヲ認許セス又ハ之ヲ認許スルモ一々法律若クハ條約ニ依ルモノト爲サハ取引上極メテ不便ヲ感スヘシ況ヤ商事會社ノ如キハ固ヨリ私益ニ關スルヲ以テ我國ニ於テ其法人タルヲ認許スルモ敢テ我國ノ公益ヲ害スルノ虞ナキニ於テヲヤ是レ亦之ヲ認許スルヲ以テ今時國際上ノ實狀ニ適スルモノト爲ス所以ナリ

第三、法律又ハ條約ニ依リテ認許セラレタルモノ 右國ノ行政區畫及ヒ商事會社ハ本條ニ依リ一般ニ認許セシモノナルカ其他特ニ我國ノ法律又ハ彼我

總 則 編

ノ條約ニ依リ法人ノ成立ヲ認許スルモノアリ是レ亦除外例ノ一トシテ我國ニ於テ法人タルモノ、資格アルモノトス

抑、本法カ右三種ノ除外例ヲ設ケテ外國法人ノ成立ヲ認許スルハ實ニ我國自己ノ利益ニ基クモノニシテ決シテ外國法人カ我國ニ於テ其權利ヲ行フヲ必要トスルヨリ我主權者カ已ヲ得ス其成立ヲ認許シタルニ非サルナリ元來一國ノ法律ハ一國ノ利益ヲ保持シ増進スルノ要具タリ豈外國法人ノ利益ヲ保護スルノ機關ナランヤ然ルニ或民法解釋家ハ之ヲ論シテ曰ク「私ノ法人タル商事會社例ヘハ郵船會社又ハ爲替銀行ノ如キハ外國ニ於テ其權利ヲ行使スルノ必要最モ多シ即チ其支店トシテ不動産ヲ所有シ常ニ外國人ト取引シテ訴訟ヲ爲ス等ノ權利ヲ行使セサル可カラス既ニ此ノ如ク我國ニ於テ設定シタル商事會社カ外國ニ於テ其權利ヲ行使スルノ必要アリトセハ外國ノ商事會社モ亦我國ニ來リテ其權利ヲ行使スルノ必要アルモノト想像セサル可カラス故ニ外國ニ於テ設定シタル商事會社ノ法人タル資格ハ我國ニ於テ之ヲ認許スルノ必要アリ其他ノ法人モ亦然リ」ト蓋シ此論ハ主客ノ地位ヲ顛倒シタルモノナリ此論ニ從ヘハ

總 則 編

總 則 編

外國ノ商事會社ハ我國ニ來リテ某法人タル權利ヲ行使スルノ必要アルカ故ニ我國家ハ其必要ニ應シテ其成立ヲ認許セサル可カラスト云フニ至ラン、豈此ノ如キノ旨趣ナランヤ、抑、我國家カ外國法人ノ成立ヲ認許スルハ畢竟此ヲ以テ我國ノ公益ニ適合スルモノト信スルニ因ルモノニシテ右ノ論ノ如キハ内外主客ノ關係ヲ辨セサルノ說、決シテ從フ可カラス、尤モ我國カ我公益ノ爲メナリト信シ或外國法人ノ成立ヲ認許シタルカ爲ニ其外國法人ノ利益ヲ受クルコトハ事實茲之アルヘシト雖モ是レ唯立法偶然ノ結果ニ過サルナリ、立法ノ目的ハ斷シテ上ニ存セサルコトハ特ニ意ヲ致サ、ル可カラス

以上説明セル如ク我國ニ於テ成立ヲ認許セラレタル三種ノ外國法人ハ我國ノ法律上如何ナル範圍ニ於テ私權ヲ享有シ得ヘキモノナル歟、是レ接踵直チニ生スヘキ問題ナリ、若シ此問題ニ付テ法律ノ明文ナカラン歟、各自其本國ノ法律ニ依リテ享有スル私權ヲ我國ニ於テモ享有スルノ解釋ヲ生シ、其結果トシテ或ハ右外國法人ハ之ト同種類ナル我國法人ノ享有スルコトヲ得サル私權ヲモ享有シ、或ハ反對ニ我國法人カ享有スルコトヲ得ル私權モ其同種類ノ外國法人カ之ヲ享

總 則 編

有セサル等ノ不權衡ヲ生シ、徒ラニ取引ノ不便ヲ感スルノミナラス甚シキハ我國ノ公益ヲ害スルコトアルニ至ラン、於是乎本條ハ直チニ第二項ヲ以テ此問題ヲ決定シ、我國ニ於テ認許セラレタル外國法人ハ我國ニ成立スル同種類ノ法人ト同一ノ私權ヲ有スルコト爲シタリ、故ニ彼我ノ間ニ厚薄過不及ナク能ク權衡ヲ保チ便宜ヲ得ルヤ知ル可キナリ

然レモ此事ニ付テモ亦二個ノ除外例アリ、其一ハ外國人カ享有スルヲ得サル權利、即チ法律又ハ條約ニ別段ノ規定ナキモ唯外國人タルノ故ヲ以テ或權利ヲ享有シ得サルモノアリ、而シテ外國法人モ亦外國人ノ一種ニ外ナラサルノ點ヨリシテ此ノ如キ權利ハ當然之ヲ享有スルコトヲ得ス、其二ハ法律又ハ條約中ニ特別ノ規定アルモノ、例ヘハ同種ノ我國法人ト同一ノ私權ヲ有セシムルニ於テハ我國ニ不利益ヲ醸ス可キ特別ノ事情アルキハ法律又ハ條約ニ於テ特ニ其權利ヲ制限スル等ノ事アリ、此場合ニ於テハ亦固ヨリ其規定ニ從ハシメサル可カラサルナリ

第三十七條 社團法人ノ設立者ハ定款ヲ作り之ニ左ノ事項ヲ記載スルコトヲ要ス

總

則

編

- 一 目的
- 二 名稱
- 三 事務所
- 四 資産ニ關スル規定
- 五 理事ノ任免ニ關スル規定
- 六 社員タル資格ノ得喪ニ關スル規定

本條ハ社團法人ノ基本的規程即チ定款作成ノ事ヲ定メタルモノナリ
 本法ノ所謂法人ナルモノハ自然ノ組織ヲ備具スルモノニ非サレハ必ス一ノ基
 本的規程ヲ定メ此ニ依テ其組織ヲ爲シ法律上ノ成立ヲ得且其意思ヲ明ニシ以
 テ活動ヲ爲スノ基礎ト爲スコヲ要ス於是乎本條ヲ以テ社團法人ニハ定款ヲ作
 ルコヲ命シ第三十九條ヲ以テ財團法人ニハ寄附行爲ニ因リ其規程ヲ定ムルコ
 ヲ命セリ

右ノ基本的規程ハ本條之ヲ定款ト稱スルモ實際ハ或ハ規則ト云ヒ會則ト云ヒ
 或ハ申合規約トモ云フ固ヨリ其隨意ニシテ而シテ此定款ハ通例社員全体ノ意思

總 則 編

ニ依リテ決定スルモノナリ

此定款ニハ本條列記ノ六事ヲ義務トシテ記載セサル可カラズ

第一、目的 即チ法人カ爲サント欲スル所ノ事業ニシテ此目的ノ如何ニ因リ
 其法人ノ適法タルト否トヲ分チ隨テ主務官廳ノ認許ヲ得ルト否トノ事アリ蓋
 シ目的ハ其法人ヲ設立スル所以ノ眼目ニシテ其事業ノミナラス其性質即チ公
 益的團體ナルト營利的團體ナルトノ區別モ亦之ニ依テ知ルヲ得ヘケレハナリ
 第二、名稱 即チ法人ノ氏名ニシテ此ニ依テ權利義務ノ獨立主格タルコトヲ明
 ニシ且其唱呼ニ便ナラシム蓋シ法人ハ自然人ト同一ノ資格ヲ有スルト同時ニ
 自然人ト同一ノ取扱ヲ受ケ自然人ニ氏名アルト同シク法人ニモ亦名稱アルヲ
 要スルナリ

第三、事務所 即チ團體カ業務ヲ行フ本據ニシテ團體ノ既ニ人格ヲ有スル以
 上ハ其諸般ノ法律關係ニ於テ一定ノ本據タル場所アルヲ要スルハ理論上實際
 上共ニ然ルヘキ所ナリトス蓋シ法人ノ事務所ハ即チ自然人ノ住所ニシテ法人
 ノ性質上ニ於テ許ス限リハ民法上ノ住所ニ關スル規定本編第一章第三節ヲ法人ニモ準

用スルヲ得ヘシ、第五十條ノ規定ハ即チ此意ニ出ツルモノニシテ其詳細ハ該條ノ下ニ讓ル

總 則 編

第四、資産ニ關スル規定 資産ハ法人カ其目的ヲ達スルニ缺ク可カラサルモノニシテ之ニ關スル規定ヲ定欸ニ明記スヘキハ當然ナリ、蓋シ自然人ニ在リテハ其資産ノ事ヲ公示セシムルハ寧ロ避ク可キ所タルモ法人ニ在リテハ特ニ之ヲ公示スルノ必要アリ、即チ定欸ニハ各社員ノ出資額、資本ノ總額及ヒ其使用ノ方法並ニ概算等ヲ規定セサル可カラサルナリ

總 則 編

第五、理事ノ任免ニ關スル規定 理事トハ法人ノ代表機關ニシテ法人ノ業務ヲ執行スル者ナリ、即チ法人ハ人格ヲ有シテ權利能力ヲ有スルモ行為能力ヲ有スルノ理ナク、隨テ其權利能力ヲ行使スルニハ必キ相當ノ代表機關ナカル可カラス、是レ理事ノ必要ナル所以ニシテ業務擔當社員ト云ヒ取締役ト云ヒ社長、會長又ハ會頭、頭取ト云フカ、如キ皆此理事者タルモノナリ、而シテ理事ハ此ノ如ク重要ノ地位タルヲ以テ其選任及ヒ解任ノ事ハ豫メ之ヲ定欸ニ規定スルヲ要ス

次節
參著

總 則 編

第六、社員タル資格ノ得喪ニ關スル規定 社員ハ社團法人ノ依テ以テ成立スル要素ナレハ其社員タルニハ一定ノ資格ヲ備ヘサル可カラス、而シテ其資格ヲ取得シ又ハ喪失スルハ必キ一定ノ標準ニ依ラサル可カラス、是レ此規定ヲ豫メ記載スルノ必要アル所以ナリ

以上六種ノ事項ハ單ニ法人ノ設立ニ關シ義務トシテ必キ定欸ニ記載ス可キ最モ重要ノ事項ヲ示セシニ止マリ、定欸ニ記載スル事項ハ此六種ニ限ルト云フニ非ス、否ナ寧ロ其他ノ重要ナル諸件殊ニ將來紛議ヲ生スヘキ恐アル事項ノ如キハ勉メテ網羅記載シテ遺漏ナキヲ可トス、而シテ茲ニ注意スヘキハ定欸ノ規定テ法令ノ範圍内ニ於テス可キト是ナリ、元來定欸ハ其法人自体ノ規程ナルヲ以テハ其法人ノ隨意ニ規定シ得ヘシト雖モ法律命令ニ於ケル強行的法規即チ禁止法又ハ命令法ハ必キ之ヲ遵守セサル可カラスシテ此レカ反對ノ規定ヲ設クルモ其效ナシ、唯法律命令中ノ任意的法規ハ反對若クハ之ニ異ナル規定ヲ設クルモ固ヨリ妨ナキヤ言ヲ俟タサルナリ

本條ニ關シ或者曰ク、次條ニ依レハ定欸ハ主務官廳ノ認可ヲ受クルニ非サレハ

總 則 編

之ヲ變更スルモ其效力ヲ生セス、變更ニ付テ既ニ主務官廳ノ認可ヲ要スル此ノ如シ、然ルニ本條ハ新ニ定款ヲ制定スルニ付テ主務官廳ノ認可ヲ要スルノ規定ヲ欠ク、是レ事理ヲ顛倒スルモノニ非スヤト、是レ一ノ惑ノミ、固ヨリ本條ニハ定款ノ制定ニ主務官廳ノ認可ヲ要スルノ明文ナシ、然レモ凡テ法人ノ設立ニ付キ少クモ公益的團體ハ前第三十四條ニ因リ主務官廳ノ許可ヲ受クルコトヲ要ス、既ニ法人設立ノ許可ヲ要スルキハ其許可ヲ請フニ付キ其制定セシ定款ヲ添ヘ以テ之ヲ請フハ必然ノ事項タリ、本條ニ明文ナキモ右諸條ノ規定ヨリシテ定款ノ制定ニ付キ主務官廳ノ認可ヲ受クルモノタルハ瞭トシテ疑ヲ容レサルナリ

第三十八條 社團法人ノ定款ハ總社員ノ四分ノ三以上ノ同意アルトキニ限り之ヲ變更スルコトヲ得但定款ニ別段ノ定アルトキハ此限ニ在ラス

定款ノ變更ハ主務官廳ノ認可ヲ受クルニ非サレハ其效力ヲ生セス

社團法人ノ定款ハ其社團ノ憲法ニシテ社員合同ノ意思ニ成リ、而シテ定款ノ條項ハ主務官廳ヨリ法人設立ノ認可ヲ與フルノ條件ト爲リシモノナリ、由是觀之定款ナルモノハ決シテ妄リニ變更ス可キモノニ非ス、然レモ時勢ノ變遷業務ノ景

總 則 編

況等ニ因リ其變更ノ必要ヲ感スルハ屢見ル所ノ事實ナリ、然ラハ則チ如何シテ之ヲ變更スヘキヤト云フニ定款ハ社員合同ノ意思ニ成レルモノナレハ之ヲ變更スルモ亦社員合同ノ意思ヲ以テスヘク、而シテ社員合同ノ意思ヲ徵スルハ法人ノ代表機關ノ一タル總會ニ於テセサル可カラス、蓋シ總會ハ社員ノ聚合体ニシテ法人ノ業務其他一切ノ事項ヲ議決スルモノ第六十條以下參看ナルカ總會ハ此定款ニ依テ成立チ定款ノ範圍内ニ於テ其權限ヲ有スルモノナルヲ以テ若シ定款中ニ其定款變更ニ係ル議決權ヲ總會ニ與フルコトヲ規定シアラサルハ總會ト雖モ亦變更ヲ爲スヲ得ス、故ニ豫メ法律ヲ以テ總會ニ其議決權ヲ與ヘ以テ定款ニ之カ規定ヲ欲クノ場合ニ備ヘサル可カラス、本條カ「總社員四分ノ三以上同意」云々ト云ヘルハ即チ總會ニ此權利ヲ與ヘタルモノナリ

然リ而シテ總會ノ定款變更ヲ議決スルヤ社員一致シテ一人ノ不同意ナキヲ欲スルハ固ヨリ其本旨ナリト雖モ社團法人ノ社員ハ通例頗ル多數ニシテ總員ノ一、致ヲ得ルハ容易ニ期望シ得ヘキトニ非ス、然レモ若シ少數社員ノ不同意アルカ爲メ其變更ヲ得ストセハ是レ多數ヲシテ少數ニ屈從セシムルモノニシテ其非

總 則 編

理タル論ヲ俟タサルナリ、蓋シ同等ノ權利ヲ有スル多數人ノ共同團體ニ於ケル議決ノ方法ハ總テ多數決ニ依ルノ外ナシ、此定款ノ變更ノ如キモ亦然リ、而シテ不
 同意ナル少數ノ社員カ若シ其變更ニ服スルヲ肯セサルキハ容易ニ退社シ得ル
 ヲ以テ多數決ニ依ルモ必シモ多數ノ壓制タル弊ヲ生スルモノニ非サルナリ
 然レモ此事ハ頗ル重大ノモノタルヲ以テ等シク多數決ト云フモ最モ其事ヲ鄭
 重ニシ總社員四分ノ三以上ノ同意ヲ要ストセリ、故ニ管ニ總會出席者ノ四分ノ
 三以上タルヲ以テ足レリトセス社員總數ノ四分ノ三以上タルヲ要ス、是レ社團
 法人ノ社員ハ往々遠隔ノ地ニ散在シ總會ニ出席セサル者尠カラサレハナリ、尤
 モ茲ニ注意スヘキモノアリ社員ハ總テ此議決權ヲ有スルモノナレハ縱令總會
 ヲ開テ之ヲ議決スル場合ニ其會議ニ出席セサル社員ト雖モ書面ヲ以テ可否ノ
 意見ヲ表スルコトヲ得ヘク、法人ニ於テハ決シテ之ヲ棄斥スルコトヲ得サルナリ、本
 法草案ニ於テハ總會ニ出席セサル社員ハ書面ヲ以テ同意ヲ表スルコトヲ得トノ
 明文アリ、後ニ削除セラレシモ其之ヲ削除セシハ決シテ反對ノ意見ニ出ナタル
 ニ非ス、唯此明文ヲ要セスト爲セシニ過サルナリ

總 則 編

右四分ノ三以上云々ノ規定ハ定款ニ此事ノ定メナキ場合ニ供スルモノナルヲ
 以テ各法人ハ其定款ニ於テ隨意ニ之ニ異ナル規定ヲ爲スコトヲ得ヘシ、例ヘハ總
 社員ノ四分ノ三ヲ改メテ出席社員ノ四分ノ三ト爲シ、或ハ總社員ノ一致ヲ要ス
 ト爲シ、又或ハ過半数ヲ以テ足レリトスル等ノ規定アレハ各其規定ニ從フ可キ
 ナリ

然リ而シテ定款ノ變更ハ營利ヲ目的トセル社團ニ在リテハ主務官廳ノ認可ヲ受
 クルニ非サレハ其効力ナキモノトス、何トナレハ定款ハ曩ニ法人設立ノ許可條
 件ト爲リシモノナルヲ以テ若シ法人ノ任意ニ之ヲ變更シ得ヘシトセハ其許可
 條件タル全ク有名無實ニ屬シ國家ノ監督權ハ之ヲ施スニ由ナキニ至レハナリ、
 是レ法人ノ設立ニ關シテ特許主義ト準則主義トヲ折衷交用セシ所以ノ精神ヲ
 貫徹スルモノニシテ能ク立法ノ旨ヲ得タルモノト謂フ可シ

第三十九條 財團法人ノ設立者ハ其設立ヲ目的トスル寄附行爲ヲ以テ第三十七條第一號
 乃至第五號ニ掲ケタル事項ヲ定ムルコトヲ要ス

本條ハ財團法人ノ基本的規程ノ事ヲ定メタルモノナリ

總 則 編

法人ハ總テ一定ノ基本的規程ヲ要シ、就中財團法人ハ社團法人ノ如ク自然人ヨリ成ルニ非ス、單ニ財產ノ聚合体ナルヲ以テ一層此規程ノ必要ヲ感スヘシ、然ラハ則チ此規程ハ如何ニシテ之ヲ定ムルヤト云フニ他ナシ、財團法人ノ設立者カ其設立ヲ目的トスル寄附行爲ヲ以テ之ヲ定ム可キノミ、蓋シ財團法人ハ或人カ寄附行爲ヲ以テ若干ノ財產ヲ提供シ以テ之ヲ設立スルモノナレハ其行爲ニ於ケル意思表示ニ因リ其法人ノ基本的規程ヲ定ムヘキナリ。

寄附行爲トハ從來世俗ニ慣用シ來レル「寄附」ナル語ト其意義略同シキモ其範圍寄ル狹クシテ全ク新法語タルモノトス、即チ寄附行爲トハ公益ノ爲メ財團法人ヲ設立セントスル目的ヲ以テ若干ノ財產ヲ無償ニテ提供スル單獨行爲ヲ謂フ故ニ寄附行爲ハ寄附者ノ公共心ニ基ツクモノニシテ或ハ宗教ノ爲メ或ハ慈善ノ爲メ又或ハ學術、技藝等ノ爲メ社寺、病院又ハ學校等ヲ新クニ設立シ之ニ法人タル資格ヲ得セシメントシテ自己ノ財產ノ全部若クハ一分ヲ分割スルモノナリ、而シテ其特ニ之ヲ單獨行爲ナリト云フハ之ヲ贈與及ヒ遺贈ト區別センカ爲ニシテ贈與及ヒ遺贈ハ之ヲ受クル者即チ行爲ノ相手方アルモ寄附行爲ニハ其相

總 則 編

手方ナク寄附行爲ヲ爲シタルニ因リ始テ一ノ財團ヲ生シ、其財團カ主務官廳ノ許可ヲ得テ始テ一ノ法人ヲ成スモノナレハ此法人ハ寄附行爲以後ニ生シ、隨テ寄附行爲ハ決シテ相手方ナク純然タル單獨行爲タルモノナリ、若シ夫レ既ニ存立セル法人ニ對シテ財產ヲ寄贈スルノ行爲ハ世俗之ヲ「寄附」ト稱シ來レルモ其行爲タル全ク贈與又ハ隨贈ニ外ナラス、故ニ本法ニ於ケル「寄附行爲」ト世俗ノ所謂「寄附」トハ決シテ同視スルヲ得サルナリ。第四十一條參看

夫レ然リ此寄附行爲ヲ爲ス者ハ其行爲ニ於ケル意思表示ヲ以テ其設立セントスル財團法人ノ基本的規程ヲ定ム可シ、而シテ其基本的規程ニ於テ定ム可キ事項ハ前記第三十七條第一號乃至第五號ニ掲ケタル事項トス、即チ左ノ如シ。

第一、目的 財團法人ノ目的ハ必ス公益ニ關スルモノタル可キハ第三十四條乃ヒ第三十五條ニ於テ既ニ述ヘシ如ク右二條ノ規定ニ因リテ自ラ明ナリ、故ニ祭祀、宗教、慈善、學術、技藝其他公益ニ關スルモノニ非サレハ主務官廳ノ許可ヲ得サルヘク、而シテ豫メ其目的ノ何タルヲ定ムルノ必要ナルハ論ヲ竣タサルナリ。

第二、名稱

第三、事務所

第四資産 寄附シタル財産即チ法人ノ資産タルモノナリ、蓋シ財團法人ハ社
團法人ト異ナリ財産ノミヲ以テ法人ノ要素ト爲スモノナレハ特ニ之ヲ明示ス
ルニ非サレハ法人ヲ成立セシメント欲スルモ得ヘカラサルナリ

第五、理事ノ任免

財團法人モ亦行爲能力ナキ無形体ナルヲ以テ之ヲ代表シ
テ權利ヲ行使シ財産ヲ管理ス可キ機關ヲ必要トスルハ猶ホ社團法人ニ於ケル
カ如シ、且夫レ社團法人ニハ別ニ總會ト云ヘル一機關アリテ其法人ノ業務ヲ決
議スルノミナラス理事ノ選任解任ノ方法ヲモ議決シ得レト財團法人ニハ此ノ
如キ機關ナキヲ以テ寄附者カ豫メ之ヲ定ムルハ一層其必要ヲ見ルナリ

寄附者ハ必ス右五事ヲ定ムルヲ要ス、若シ寄附者カ右五事ノ若干ヲ定メサリ
シハ其寄附行爲ハ無効ニ歸シ固ヨリ法人ヲ成立スルヲ得ス、隨テ主務官廳
ノ許可ヲ得サルヘキモ其寄附者ハ更ニ之ヲ定メテ再ヒ寄附行爲ヲ爲シ以テ其
事ヲ全フスルヲ得ヘシ、但寄附者再ヒ之ヲ定ムルニ至ラスシテ死亡シタル場合
ハ次條ニ之ヲ定ム

總 則 編

第四十條 財團法人ノ設立者カ其名稱、事務所又ハ理事任免ノ方法ヲ定メスシテ死亡シタ

ルトキハ裁判所ハ利害關係人又ハ檢事ノ請求ニ因リ之ヲ定ムルコトヲ要ス

本條ハ前條ノ例外ヲ定メタルモノナリ

財團法人ノ設立者寄附者ハ寄附行爲ヲ以テ五個ノ事項ヲ定ム可シ若シ其一ヲ
缺クヤ寄附行爲ハ全ク無効ニ歸シ再ヒ之ヲ定メテ寄附行爲ヲ爲サ、ルヘカラ
サルヲハ前條ニ論述セシ原則ナリ、故ニ寄附者カ遺言ヲ以テ寄附行爲ヲ爲シタ
ルハ又ハ生前處分ヲ以テ寄附行爲ヲ爲セシモ其定メサリシ事項ヲ再ヒ定ムル
ニ至ラスシテ死亡シタルハ右ノ原則ニ從ヒ其寄附行爲ハ全ク無効ニ歸シ去
リ再ヒ有效ニ之ヲ爲スヲ得サルハ多言ヲ要セサルナリ

然ルニ此事タル寄附者カ既ニ其公義心ニ依リ寄附行爲ヲ爲シテ財團法人ヲ設
立シ以テ公益ノ爲ニセントシタリシニ寄附行爲カ只其要件ヲ缺キシ一事ニ因
リテ成立セス爲ニ寄附者ノ公義心ヲ空シフスルノミナラス社會カ將ニ得ント
セシ公益モ亦之ヲ失フニ至ルモノナルヲ以テ妄リニ右ノ原則ヲ固執スルハ立
法ノ本旨ニ非ス、即チ立法者ハ若シ救ヒ得ヘクンハ其缺點ヲ救ヒ以テ寄附者ノ

總 則 編

總 則 編

公義心ヲ全フシ且社會ノ公益ヲ増スヲニ勉メサル可カラス然レモ右ノ五事中財團ノ目的又ハ其資産ニシテ定メアラザリシキハ寄附者ノ意思ヲ想像シテ其目的ヲ定メ又ハ資産ノ種類及ヒ其額ヲ定メントスルモ是レ到底他ノ想定シ得ヘキ所ニ非サルヲ以テ法律ハ已ヲ得ス右ノ原則ニ依リ其寄附行爲ヲ無効トシテ之ヲ水泡ニ歸セシムルノ外ナシ之ニ反シテ右ノ五事中財團ノ名稱事務所又ハ理事任免ノ方法ヲ定メアラザリシキノ如キハ此缺點ハ後日ニ至リ他ヨリ適當ニ之ヲ補足シ得ヘク之ヲ補足スルモ別ニ寄附者ノ意思ニ反スルノ恐ナキヲ以テ此場合ハ其行爲ヲ無効トスルヲ無ク利害關係人又ハ檢事ノ請求ニ因リ裁判所自ラ其事ヲ定ムヘキノ除外例ヲ設ケ以テ立法ノ本旨ヲ貫徹セントス是レ本條ノ規定アル所以ナリ

本條ハ名稱事務所及ヒ理事任免方法ノ三者中其一ヲ缺キシ場合ヲ指スヤ將タ三者共ニ缺ケシ場合ヲモ包含スルヤ曰ク三者共ニ缺クルモ亦本條ニ依ルヘキヤ疑ヲ容レス要ハ深ク寄附者ノ意思ニ關スル事項即チ目的及ヒ資産ノ二事ニシテ定メアレハ則チ其行爲ヲ有效トスルノ趣旨ニ外ナラス

總 則 編

裁判所カ右三者ヲ定ムルヲ即チ法人ノ名稱ヲ選ヒ又ハ其事務所ノ場所ヲ相スルカ如キハ裁判所ノ本質上頗ル奇異ノ看ナキニ非ス然レモ實際ニ於テハ之ヲ請求スル利害關係人又ハ檢事カ自ラ之ヲ定メテ以テ裁判所ノ決定ヲ乞フニ過サレハ深ク論スルニ足ラサルナリ

第四十一條 生前處分ヲ以テ寄附行爲ヲ爲ストキハ贈與ニ關スル規定ヲ準用ス

遺言ヲ以テ寄附行爲ヲ爲ストキハ遺贈ニ關スル規定ヲ準用ス

本條ハ財團法人設立ノ爲メ爲シタル寄附行爲ニ適用スヘキ規定ヲ示シタルモノナリ

寄附行爲ハ實際ニ於テハ遺言ヲ以テ之ヲ爲スモノ其多キニ居ルヘキモ生前處分即チ其生存間ニ於テ之ヲ爲ス者亦無シトセス而シテ其生前處分ヲ以テスルモノト遺言ヲ以テスルモノトノ間ニハ行爲ノ性質ニ差異アリ隨テ法律ノ規定ヲ異ニセサル可カラス是レ即チ本條ガ一ハ贈與ノ規定ハ一遺贈ノ規定ヲ準用スルモノト爲シタル所以ナリ

蓋シ寄附行爲ハ前ニ略説シタル如ク或公益上ノ目的ノ爲ニ自己ノ財産ヲ分割

總

則

編

シテ之ニ人格ヲ與ヘントスル單獨行爲ナレハ之ヲ受ク可キ相手方タル者ナキヲ以テ贈與又ハ遺贈ノ如ク他人ニ權利ヲ移轉スルモノトハ自ラ區別アリ、寄附行爲ノ贈與又ハ遺贈ニ非サルトハ明晰ナリトス、然レモ寄附行爲ハ無償ニテ其財産ヲ處分シ、贈與、遺贈モ亦無償ニテ其財産ヲ處分ス、此點ニ於テハ二者ノ性質自ラ同一ニシテ隨テ寄附行爲カ債權者又ハ相續人ニ及ホス影響ニ付テモ亦贈與、遺贈ノ場合ト全ク同一ナリ、故ニ生前處分ヲ以テ爲ス寄附行爲ニ付テハ贈與ニ關スル規定即チ第三編第二章第二節ノ規定ヲ準用シ、遺言ヲ以テ爲ス寄附行爲ニ付テハ遺贈ニ關スル規定即チ他日制定セラルヘキ相續編中ノ規定ヲ準用スルモノトス、本條法文之ヲ「準用」ト書シテ「適用」ト書セザリシハ則チ寄附行爲ノ贈與又ハ遺贈ト異別ノモノタルニ因ル、而シテ此ノ如ク之ヲ準用スルコト爲シタルハ則チ立法上ノ便宜ニ因ルモノナリ

第四十二條 生前處分ヲ以テ寄附行爲ヲ爲シタルトキハ寄附財産ハ法人設立ノ許可アリ

タル時ヨリ法人ノ財産ヲ組成ス

遺言ヲ以テ寄附行爲ヲ爲シタルトキハ寄附財産ハ遺言カ效力ヲ生シルタトキヨリ法人

ニ歸屬シタルモノト看做ス

本條ハ寄附行爲ノ效力ヲ生スル時期ヲ定メタルモノナリ、寄附行爲ハ財産ヲ寄附シテ法人ヲ設立セントスルモノナレハ寄附行爲ノ效力ハ其寄附財産ヲ以テ法人ノ財産ヲ組成スルニ在リ、然レモ此效力ハ何時ヨリ發生スルヤ、換言スレハ寄附財産ハ何時ヨリ法人ノ財産ト爲ルヤ、是レ豫メ確定ヲ要スル問題ナリ

此問題ハ寄附行爲ノ生前處分ヲ以テ爲シタルモノト遺言ヲ以テ爲シタルモノトニ因リ其決定ヲ異ニセサルヲ得ス

生前處分ヲ以テ爲シタル寄附行爲ハ贈與ニ關スル規定ヲ準用スルコト前條ノ規定セル原則ナリ、而シテ贈與ノ效力ハ相手方カ其贈與ヲ承諾シタル時ヨリ發生スルハ第五百四十九條ノ原則ナリ、然レモ寄附行爲ハ相手方ヲ有セサル純然タル單獨行爲ナルヲ以テ其效力發生ノ時期ニ付テハ右贈與ノ原則ヲ準用スルニ由ナシ、於是乎本條ハ特ニ第一項ヲ以テ之ヲ定メ法人設立ノ許可アリタル時ト爲セリ、是レ營利ヲ目的トセサル法人ハ主務官廳ノ許可ヲ待テ始テ成立スルモノ

總

則

編

ニシテ官廳ノ許可ハ則チ其成立條件ナルヲ以テ寄附行爲ヲ爲スコトヲ決意シタル當時ハ法人ナルモノ未タ決シテ成立セス、隨テ其寄附財產カ法人ノ財產ヲ組成セントスルモ亦能ハサルナリ、故ニ其法人ノ成立セシ時即チ主務官廳ノ許可アリタル時始テ其效力ヲ生シ、法人ニ歸屬シテ其財產ヲ組成スルモノナリ、遺言ヲ以テ爲シタル寄附行爲ハ亦前條ニ依リ遺贈ニ關スル規定ヲ準用スルヲ原則トス、而シテ遺贈ノ規定ハ未タ制定セラレスト雖モ遺贈ニハ其相手方アリテ寄附行爲ニハ之ナシ、寄附行爲ノ效力ニ關シ全然遺贈ノ規定ニ從フ能ハサルヘキハ想像シ難カラス、然ルニ今之ヲ泰西諸國ノ法制ニ考フルニ其胎兒ニ遺贈ヲ爲シタル場合ノ規定ハ恰モ此遺言ヲ以テ寄附行爲ヲ爲ス場合ニ準用スルヲ得ヘシ、抑胎兒ニ遺贈ヲ爲シテ其胎兒ノ未タ分娩セサルニ方リ、遺贈者ノ死亡シタルキハ遺贈ノ相手方タル胎兒ハ其未タ分娩セサルニ因リ人權ヲ有セサルヲ以テ此遺贈ハ相手方ヲ有セサルモノナレモ法律ハ胎兒ノ利益ヲ保護スルカ爲ニ遺贈ハ其遺贈者ノ死亡ノ時ヨリ效力ヲ生スルコトシ、胎兒ノ分娩ニ至リ遺贈者死亡ノ時ニ溯リテ其遺贈ヲ受クルコト爲スヲ諸國法制ノ通例トス、遺言ヲ以テ

總 則 編

總 則 編

寄附行爲ヲ爲セシ場合モ亦酷ク之ニ肖似ス、即チ寄附者ノ死亡ニ因リ始テ其附行爲ノ效力ヲ生スルモ法人ハ此際未タ成立セサルヲ以テ固ヨリ其相手方ナキモ此遺言ノ寄附行爲ニ因リ相續人カ法人設立ノ申請ヲ爲シ主務官廳ノ許可アリテ法人茲ニ成立スルヤ其法人ハ寄附者死亡ノ時ニ溯リ其寄附財產ヲ受クルモノトス、即チ遺言ヲ以テ爲シタル寄附行爲ハ遺言カ效力ヲ生シタル時ニ效力ヲ生シ此時ニ於テ其寄附財產ハ直チニ法人ニ歸屬シタルモノト看做ス、是レ此時ハ未タ法人ナルモノアラサルモ假リニ之ヲ既成ノモノト看做シテ之ニ歸屬セシメ以テ其利益ヲ保護スルナリ、若シ夫レ事茲ニ出テスシテ其寄附財產ヲハ法人ノ眞ニ成立スル時ヨリ法人ニ歸屬スルモノトセハ寄附者ノ死亡後法人ノ成立前ニ於ケル該財產ヨリ生スル果實其他ノ利益ハ盡ク相續人ニ屬スルモノト爲リ大ニ寄附者ノ意思ニ反スルノミナラス狡猾ナル相續人ハ故意ニ許可ノ申請ヲ遷延シ以テ其間ノ利益ヲ貪ルノ弊ナキヲ保セス、是レ本條第二項ノ特設セラレシ所以ニシテ法人ハ此ニ依リ以前ニ溯リテ果實其他ノ利益ヲモ收受スルコトヲ得ルナリ

遺言ヲ以テ寄附行爲ヲ爲シタル者ハ其死亡ニ至ルマテ即チ其遺言ノ效力ヲ生スルニ至ルマテ何時ニテモ遺言ヲ廢罷スルニ因リテ其行爲ヲ取消シ得ヘキハ遺言ノ本質上ヨリシテ疑ヲ容レズ、然レモ生前處分ヲ以テ寄附行爲ヲ爲シタル者ハ何時マテ其行爲ヲ取消スコトヲ得ルヤ

或人曰ク寄附行爲ヲ爲ス者カ法人設立許可ノ申請ヲ主務官廳ニ差出スニ於テハ最早之ニ羈束セラレ此時以後ハ縱令許可ノ指令以前ト雖モ復之ヲ取消スコトヲ得ス、獨逸民法草案カ其許可ヲ出願セルキヨリ始テ其權利行爲ニ羈束セラルト規定セシハ想フニ此意ニ外ナラス、又本法第五百五十條ニ依ルモ書面ニ依ラサル贈與ハ各當事者之ヲ取消スコトヲ得、但履行ノ終リタル部分ニ付テハ此限ニ在ラストアリ、寄附行爲カ書面ニ依ラサルキハ履行ヲ終ルマテ隨意ニ之ヲ取消シ得ヘク、而シテ寄附行爲カ履行ヲ終ルキトハ恰モ本條ノ法人設立ノ許可アリテ寄附財產カ法人ニ歸スルキナルヲ以テ此時マテハ取消シ得ヘキモノタルヘシ、然レモ許可ノ申請ハ書面ヲ以テスルヲ通例トシ該條ノ裏面タル書面ニ依ル贈與ト同視ス可ケレハ該條ノ反對ニ縱令未タ履行ヲ終ラサルキ即チ法人設立ノ

總 則 編

許可ナキキト雖モ之ヲ取消シ得サルモノト論決セサル可カラスト

此說一理アルニ似タレモ余ハ之ニ反對セサルヲ得ス、獨逸草案ノ規定如何ハ顧ミルニ足ラス、唯本法第五百五十條ノ準用ヲ誤マリシノ一事以テ此說ヲ排スルヲ得ヘシ、蓋シ許可ノ申請ハ必シモ書面ヲ以テスルヲ要セサルノミナラス縱令書面ヲ以テスルモ直チニ之ヲ書面ニ依ル贈與ト同視スルハ速了モ亦太甚シ、所謂書面ニ依ル贈與トハ贈與者カ其意思ヲ表示シ相手方カ承諾ヲ爲シテ其贈與ノ旨ヲ書面ニ明記スルモノニ限リ、其他ノ場合例ヘハ贈與ヲ爲サントスル者カ相手方ニ對シ其意思ヲ表示センカ爲ニ書翰ヲ作りタルキノ如キ其書翰ヲ未タ相手方ニ發送セス之ヲ發送センカ將タ廢止センカヲ考慮シツ、アルニ際シ突然其書翰ヲ把リテ是レ書面ニ依ル贈與ナリト云ハ、論者ト雖モ亦其速了タルヲ知ラン、本問ノ場合モ亦然リ、單ニ許可申請ノ書面ヲ主務官廳ニ差出スモ決シテ書面ニ依ル贈與ト爲ラス、殊ニ主務官廳ハ其相手方タルモノニ非サレハ寄附行爲ハ如何ナル場合ニ於テモ依然單獨行爲ニシテ何時之ヲ中止スルモ何人ノ權利ヲ害スルコト無シ、故ニ許可アルマテハ既ニ差出セシ申請ヲ取下ケテ其行爲

總 則 編

ヲ取消スモ其隨意タリ、唯一旦許可アリタルハ此ト同時ニ法人成立スルヲ以テ縱令其法人ハ自己ノ設立ニ係ルニモセヨ既ニ一人ノ人権ヲ有スル他人ニシテ其行爲ヲ取消スハ他人ノ權利ヲ害スルモノトス、故ニ許可アリタル瞬間ヨリ始テ之ニ羈束セラレ取消ヲ得サルモノト爲ル、本條カ「法人設立ノ許可アリタル時ヨリ法人ノ財産ヲ組成ス」ト云ヘルハ亦間接ニ本問ニ對スル右ノ論決ヲ與フルモノト謂フテ可ナルナリ

第四十三條 法人ハ法令ノ規定ニ從ヒ定款又ハ寄附行爲ニ因リテ定マリタル目的ノ範圍

内ニ於テ權利ヲ有シ義務ヲ負フ

本條ハ法人ノ權利義務ノ範圍ヲ定メタルモノナリ
法人ハ法律ノ擬制ニ因リ一人ノ人権ヲ有スルモノナレハ權利義務ノ主格トシテ獨立シテ權利ヲ有シ義務ヲ負フヲ得、之ヲ詳言スレハ社團法人ハ數多ノ自然人ノ聚合ニ依リテ成ル無形体ナレモ其自然人ヲ離レテ無形体自身ニ權利ヲ有シ義務ヲ負ヒ、又財團法人ハ財産ノ聚合ニ成ル無形体ナレモ其無形体ノ設立者又ハ其財産ヲ最終ニ取得スヘキ所謂歸屬者其他何人ニモ依ルヲ無ク同シク無

總 則 編

形体自身ニ權利ヲ有シ義務ヲ負フカ故ニ法人ハ其孰レタルニ拘ハラズ皆特立ノ財産ヲ有シ債務ヲ負ヒ訴訟ノ原告被告ト爲リ其他各種ノ法律行爲ヲ爲スヲ得ルナリ

然ラハ則チ法人ノ權利義務ハ果シテ如何、本章ノ首ニ述ヘシ如ク法人ハ自然人ト異ナリテ身体ノ實在ヲ有セス、即チ親族關係ナキニ因リ此種ノ權利義務ヲ有セスシテ單ニ財産機能ニ止マルヲ通常トス、然レモ亦全ク純然タル財産機能ニ止マラスシテ法令ノ規定ニ依リ時トシテハ財産以外ノ權利ヲ有シ義務ヲ負フト無キニ非ス、本條カ「財産上ノ權利義務」ト云ハスシテ單ニ「權利、義務」ト云ヒシハ此レカ爲ナリ

然リト雖モ法人ノ機能ハ決シテ制限ナキモノト誤解スヘカラス、中世以降往々法人ハ自然人ト同一ノ機能ヲ有スルモノト爲セシ法制ナキニ非サレモ是レ法人ノ擬制ヲ不當ニ擴張セルモノニシテ輒近ニ至リテハ各國共ニ其機能ヲ制限シ、法人ハ只限定機能ヲ有スルニ過スト云フハ殆ト定説タリ、本條モ亦此定説ヲ採用シタルモノニシテ本條ノ規定ニ依レハ法人ノ機能ハ二重ノ制限ニ從フモ

總 則 編

總 則 編

ノトス、他ナシ法人ノ權能ハ定款又ハ寄附行為ニ因リテ定マリタル目的ノ範圍内ニ制限セラレ、而シテ其定款又ハ寄附行為ハ法令ノ規定ノ範圍内ニ制限セラレ、モノナリ、是故ニ法人ハ必ス一定セル設立ノ目的ノ範圍内ニ於テ行為ス可ク、若シ其範圍外ノ行為ヲ爲セシキハ其行為ハ越權行為トシテ無効ニ歸ス可キモノトス、(範圍外ノ行為ヲ爲セシ結果ハ主務官廳ノ許可條件ニ違反スルモノトシテ其許可ヲ取消サレ又ハ或處分ヲ受クルコトアルヘキモ是レ特別法ノ規定ニ依ルモノニシテ茲ニ之ヲ論スルコトヲ得ス)故ニ例ヘハ慈惠病院タル法人カ孤兒院ノ事ヲ行ヒ孤兒院タル法人カ貧民學校ノ事ヲ行フカ如キ皆無効ノ行為タルヲ免レサル可キナリ

法人ノ權能ハ法律ニ因リテ制限セラレ、コト右ノ如シ、抑法律ハ何か故ニ之ヲ制限スルヤ、且夫レ人カ私權ヲ享有スルハ皆國法ノ保護ヲ待チ始テ其完全ヲ得ルモノナルコトハ近世進歩學派ノ均シク承認スル所ナリ、夫レ然リ既ニ國法ノ範圍内ニ於テノミ人タルノ權利ヲ享有スルモノトセハ是レ即チ法令ノ規定ニ從ヒ私權ヲ享有スルモノト謂ハサル可カラス、然ルニ本條ハ故ラニ「法人ハ法令ノ規

總 則 編

定ニ從ヒ……權利ヲ有シ義務ヲ負フト爲シタレハ却テ了解ニ困マン、人ハ皆法令ノ規定ニ從ヒ私權ヲ享有スルモノト爲ス以上ハ法人ニ限リ特ニ之ヲ明言スルノ必要ナキニ非スヤ、法人ニ限リテ特ニ此明言アルハ是レ一般ノ人ハ法令ノ規定ニ從ハサルモ任意ニ私權ヲ享有スルヲ得ヘシト云ヘル論理上ノ結果ヲ生スルニ非スヤト、是レ先ツ講明ヲ要スル所ナリ

蓋シ本條カ特ニ「法令ノ規定ニ從ヒ」ト明記セシハ夫ノ一般ノ人カ國法普通ノ規定ニ從ヒ其範圍内ニ於テ自由ニ私權ヲ享有シ得ルニ異ナリ法人ナルモノハ此普通ノ規定ニ從ヒ權能ヲ有スルコトヲ得スシテ必ス法令ノ特別ナル規定ニ從フコトヲ要ストノ意義ニ出ツルモノナリ、即チ自然人ハ國法ノ制限ニ抵觸セサル豈リハ自由ニ行為活動スルコトヲ得ヘシト雖モ法人ハ法令カ特ニ限定セル範圍内ニ於テスルニ非サレハ行為活動スルコトヲ得ス、試ミニ私權中ノ重要ナル所有權ニ付テ之ヲ觀ヨ、自然人タルモノハ國法ノ禁セサル限り自由ニ此權利ヲ行使スルコトヲ得ヘシト雖モ法人ニ至リテハ決シテ然ラス、法人所有權ノ目的物タル財產ハ普通法ニ依リ自由ニ之ヲ使用收益スルコトヲ得ルモノニ非スシテ特別ノ規

定ニ從ヒ格段ナル用法ヲ以テスルニ非サレハ之ヲ使用收益スルヲ得ス、又其財産ヲ處分スルニ至リテモ少クモ一定ノ條件ヲ備フルニ非サレハ爲シ得ヘカラス、加之或ハ法人ノ財産ヲ處分スルハ法令ヲ以テ絶對ニ之ヲ禁止スルヲモ無シトセス、又相續權ニ付テ之ヲ觀ヨ、自然人ハ隨意ニ財産ヲ相續シ得ヘシト雖モ法人ナルモノハ相續權ヲ有セサルヲ以テ其本則トシ極メテ僅少ノ場合ニ於テノミ遺產ヲ相續スルヲ得ルノ例ヲ見ルニ過ス、要スルニ法人ナルモノハ法令ノ特別ナル規定ニ從ヒテノミ權能ヲ有スルヲ得、是レ本條ノ明言アル所以ナリ

總 則 編

然リ而シテ此ノ如ク之ヲ法令ノ特別ナル規定ニ從ハシムル立法上ノ理由ハ如何ト云フニ、抑、法人ナルモノハ屢、説キシ如ク主權者カ特ニ公益ノ爲ニ慮カリテ自然又ハ財産ノ聚合体ニ對シ法律上ニ於テ思想的ニ人タル資格ヲ與ヘタルニ因リ始テ存在ス、故ニ自然人カ法律ノ禁止ナキ限リハ自由ニ私權ヲ享有シ行使シ得ルニ反シテ法人ハ唯其特別ナル或ル目的ヲ達スルニ必要ナル權能ニ非サレハ之ヲ享有行使スルヲ得ス、若シ夫レ法人ヲシテ自然人カ一般ニ有スル所

總 則 編

ノ私權ヲ享有行使スルヲ得セシム可シト爲サハ其公益ヲ害スルヤ決シテ僅少ナラサルヘシ、夫ノ親屬權ノ如キハ縱令之ヲ法人ニ與フルモ法人ハ其本質自然ノ結果トシテ之ヲ行使スルニ由ナキモ財産ニ關スル權利ニ至リテハ法人ノ代表者タル者カ法人ヲ代表シテ自由ニ之ヲ行使スルハ極メテ容易ナルヲ以テ多量ニ相續、贈與又ハ遺贈等ヲ受クルヲアラハ世上ノ富財ハ頗ル之ニ吸収セラレ、財産流通ノ途ヲ杜塞シ、其極各人ヲシテ其生計ニ困苦セシムルニ至ルモ亦絶無ニ非サルヘシ、之ヲ歐洲ノ事例ニ徵スルニ近古耶蘇舊教ノ尙ホ昌盛ノ隆運ニ在リシキ、僧徒カ其信者ヲ欺キ自己ノ屬スル寺院(法人)ヲ代表シテ信者ノ財産ヲ騙取シ以テ不正ニ自己ヲ封殖スルノ奸策盛ニ行ハレ、遂ニ其結果トシテ自然人ハ有償ト無償トヲ問ハス自由ニ財産ヲ取得スルヲ得タリシニ拘ハラス凡テ法人タルモノハ無償ニテハ自由ニ財産ヲ取得スルヲ得ストスルノ法令ヲ見ルニ至レリ、既ニ此般ノ例證アリ法人ノ權能ノ制限セサル可カラサルヲ復安ンソ争ヲ容レンヤ、是レ法人ノ設立ハ大ニ公益ヲ爲シ法律ハ寧ロ之ヲ獎勵スルニ拘ハラス其權限ハ必ス之ヲ制限スル所以ナリ

第四十四條 法人ハ理事其他ノ代理人カ其職務ヲ行フニ付キ他人ニ加ヘタル損害ヲ賠償スル責ニ任ス

法人ノ目的ノ範圍内ニ在ラサル行爲ニ因リテ他人ニ損害ヲ加ヘルトキハ其事項ノ議決ヲ贊成シタル社員、理事及ヒ之ヲ履行シタル理事其他ノ代理人連帶シテ其賠償ノ責ニ任ス

總

則

編

本條ハ法人ノ行爲ニ關スル責任ヲ定メタルモノナリ
 法人ハ權利能力ヲ有スルモ行爲能力ハ勿論如何ナル意思ヲモ有セス、故ニ其意思即チ如何ナル方法ニ依テ如何ナル事業ヲ爲サント欲スルヤハ其法人ノ設立者カ定欸又ハ寄附行爲ヲ以テ之ヲ定メ、又社團法人ニ在リテハ總會ノ決議ヲ以テモ之ヲ定メ、之ヲ其法人ノ意思ト爲ス、而シテ此意思ヲ實行スルカ爲ニハ法人ノ代表機關ヲ設ケ即チ理事其他ノ代理人ヲ撰定シ之ヲシテ其事ニ當ラシム、故ニ理事其他ノ代理人ノ意思及ヒ行爲ハ即チ其法人ノ意思及ヒ行爲ト看做シ、其行爲ニ因リテ法人ハ直接ニ權利ヲ得義務負フコトハ代理ノ通則ニ依テ明ナリ
 此ノ如ク法人ノ行爲能力ハ理事其他ノ代理人ニ依テ代行セラレ、而シテ理事其他

總

則

編

ノ代理人カ代行スル行爲能力ハ固ヨリ法令ノ規定ニ從ヒ其範圍内ニ於テセサル可カラス、而シテ法令ハ法人ニ不法行爲ヲ爲スノ能力ヲ與フルモノニ非サルハ固ヨリ説明ヲ要セス、殊ニ羅馬法ニ於テハ法人ハ意思ヲ有セサル無形体タリト云ヘル理由ヨリシテ法人ハ不法行爲ヲ爲スコト能ハストノ原則アリ、故ニ法人ノ理事等カ法人ヲ代表シテ行爲ヲ爲スニ當リ不法ナルモノアルモ其不法行爲ハ代表者一己ノ行爲ニシテ法人ノ行爲ニ非ストシ、此ニ依テ他人ニ與ヘタル損害ニ付テモ法人ハ毫モ責任ナク、其代表者自ラ責任ヲ負フニ止マルハ右原則ヨリ生スル必然ノ結果タリ、此事タル純然タル理論上ニ於テハ頗ル有力ノ説ニシテ多少反對ノ學說アルニ拘ハラズ殆ト定説タリシニ似タリ、然レモ此原則ニ從ヘハ往々種々ノ弊害ヲ生シ、殊ニ其不法行爲ノ被害者タル者ハ其被害ノ救正ヲ得サル結果ヲ見ルコト實際尠シトセス、何トナレハ法人ノ代理人カ不法ノ行爲ヲ爲セシキハ其責任ハ其代理人ノミニ止マルトセハ被害者ハ固ヨリ其代理人ニ對シテ損害賠償ヲ請求スルコトヲ得ルモ代理人ノ資力ハ通例法人ニ比シテ僅少ナルヘケレハ法人ニ其責任アルニ非サレハ代理人ハ完全ノ賠償ヲ爲ス能ハスシ

テ被害者ノ請求權ハ徒ニ空名タルニ終ルヲ多シトスヘケレハナリ、實際ノ利害
 既ニ然リ、更ニ之ヲ理論ニ徴スルモ法人カ既ニ或人ヲ自己ノ代理人ト爲シ其行
 爲ヲ爲サシムル以上ハ其行爲ヨリ他人ニ加ヘタル損害ヲモ自ラ賠償スルノ責
 ニ任ス可キトハ必シモ非理トセス、但タ此事ニ於ケル理論ノ如何ハ學說未タ一
 致セス、遽ニ是非ノ斷定ヲ下シ易カラスト雖モ法制上ニ於テハ實際ノ利害ニ顧
 ミテ法人モ亦責任ヲ負フト爲スハ近世立法上ノ大勢ニシテ獨逸民法草案ノ
 如キ、巴威里草案ノ如キ、瑞西義務法ノ如キ、其他此主義ヲ執リシモノ既ニ尠シト
 セス、且夫レ之ヲ自然人ノ代理人ニ於ケル關係ニ參スルモ受任者カ委任者ノ委
 任シタル行爲ヲ爲スニ當リ他人ニ損害ヲ加ヘタルハ委任者自ラ其損害賠償
 ノ責ニ任スルハ亦各國法制ノ共ニ然ル所ニシテ唯大同少異アルヲ見ルノミ、故
 ニ法人ヲ自然人ヨリ幸福ノ地位ニ置キ法人ノ場合ニ於ケル被害者ヲ自然人ノ
 場合ニ於ケル被害者ヨリ不幸ノ地位ニ置クノ理アラスシテ此點ヨリスルモ法
 人ニ其責任ヲ負ハシム可キハ寧ロ疑ヲ容レサルナリ
 然レモ此事タル單ニ損害賠償ノ責任即チ私法上ノ制裁ニ限り、公法上ノ制裁タ

總 則 編

總 則 編

ル刑罰ニ至リテハ其行爲ヲ爲セシ者ノミニ止マリ他人ニ及ボサ、ルヤ言ヲ竣
 タス、歐洲中世ニ於テ法人ハ不法行爲ヲ爲スノ能力ヲモ有スト爲シ、其代理人ノ
 爲シタル不法行爲ニ付テモ亦法人ニ責任アリトシテ法人ヲ組成スル團員ニ
 付テモ悉ク刑罰ヲ課シタルノ例アルモ是レ固ヨリ刑罰ノ目的及ヒ性質ヲ誤解
 セルニ出テ、其不當ナルヤ今日ニ於テハ孩提ノ童兒モ亦之ヲ知ラサル無シ
 本法モ亦以上ノ理由ニ因リ法人ノ理事其他ノ代理人カ爲シタル不法行爲ニ付
 テハ法人モ亦私法上ノ責任ヲ負ヒ其損害ヲ賠償ス可キト爲シタリ、然レモ是
 レ代理人カ其職務ヲ行フニ當リ過失又ハ懈怠ニ因リ他人ニ加ヘタル損害ニ關
 スルモノニシテ法人ノ目的ノ範圍内ニ在ラサル行爲ニ關シテハ法人ハ毫モ責
 任ヲ負フコト無シ、蓋シ委任者ハ其代理人カ代理權ヲ行フニ付テ他人ニ加ヘシ損
 害之ヲ賠償スルモ其代理權以外ノ行爲ニ關シテハ責任ヲ負ハサルコト猶ホ余
 輩カ隣人ノ行爲ニ關シテ責任ナキカ如シ、是レ本法カ他ノ諸國法制ニ共ニ一致
 スル所ニシテ而シ本條第一項ノ規定ハ之ヲ本法第七百十五條ノ或事業ノ爲ニ
 他人ヲ使用スル者ハ被用者カ其事業ノ執行ニ付キ第三者ニ加ヘタル損害ヲ賠

總 則 編

債スル責ニ任スルノ原則ト相對比シテ能ク均衡ヲ得ルモノト謂フ可キナリ。然ラバ則チ法人ノ代理人カ其權限外ノ行爲ニ因リテ他人ニ損害ヲ加ヘシキハ如何、果シテ如何ナル結果ニ歸スヘキモノナルヤ、他ナシ其行爲ハ職決者及ヒ實行者カ其責任ヲ負フシミ、是レ此場合ハ縱令法人ノ名義ヲ以テ其行爲ヲ爲シタルトスルモ法人ノ目的ノ範圍内ニ在ラサル行爲ハ前條ニ論セシ如ク法人ノ爲ニ無効タルモノニシテ極論スレバ其行爲ニ付テハ法人ハ何等ノ關係ナキモノト謂フモ亦不可大シ、而シテ其實行者及ヒ職決者カ其責任ヲ免レサルハ固ヨリ説明ヲ要セス、唯此等數人ノ責任ヲ連帶トセシメテ被害者ヲ保護シ可及的完全ニ其賠償ヲ得セシメントスルモノニシテ普通ノ原則ヲ適用セシモノニ過ス第四百三十二條以下參看

第四十五條 法人ハ其設立ノ日ヨリ二週間内ニ各事務所ノ所在地ニ於テ登記ヲ爲スコト

ヲ要ス

法人ノ設立ハ其主タル事務所ノ所在地ニ於テ登記ヲ爲スニ非サレハ之ヲ以テ他人ニ對

抗スルコトヲ得ス

總 則 編

法人設立ノ後新ニ事務所ヲ設ケタルトキハ一週間ニ登記ヲ爲スコトヲ要ス。法人ノ本質ハ自然人又ハ財產ノ聚合体タルニ過ス、然ルニ此聚合体カ其本質以外ニ人格ナルモノヲ有シテ茲ニ一ノ法人ヲ爲スハ畢竟官廳ノ許可又ハ法律ノ準則ニ遵依セシニ因ル、故ニ聚合体ハ既ニ之ニ依リテ法人ト爲ルモ公衆ハ唯其自然人又ハ財產ノ聚合体タルヲ見ルノミニシテ其法人タルヲ知リ得ルノ理ナシ、於是乎其法人タルシヨラ公衆ニ公示スルノ必要起ル、而シテ公示ノ方法ハ之ヲ登記スルノ外ナキナリ。是故ニ法人ハ先ツ其設立ニ方リテ其設立ノ事ヲ登記ス可ク、且其登記ハ成ル立ク之ヲ速ニセサル可カラス、本條第一項ハ即チ其期間ヲ限リテ二週間トシ設クノ日ヨリ起算シテ二週間内ニ登記ヲ爲スヨラ命セリ、而シテ其登記ヲ爲スハ固ヨリ法人事務所ノ所在地ニ於テス可キモノナルカ法人ノ事務所ハ必ス一個ナラス、會社ニ於ケル支店ノ如キ、其他各種ノ法人ニ於テモ數個ノ事務所ヲ設クルコトアル可キヲ以テ此場合ハ其各事務所ノ所在地ニ於テ各、登記ヲ爲サル可カラ

登記ノ方法ハ本法之ヲ規定セサルモ是レ固ヨリ手續法ナルヲ以テ當然特別法ニ屬ス可キナリ、尙ホ本條其他本法ニ於テハ總テ單ニ登記ヲ受ク可キヲ命スルニ止マリ、此ト相联接セル公告ノ事ヲ言ハス、是レ公告ハ登記官吏カ當事者ノ登記ヲ爲セシニ逢ヒ、自己ノ職務トシテ其手續ヲ爲ス可キモノニシテ當事者ハ唯登記ヲ爲スニ止マリ公告ノ事ニ與カラサルヲ以テ本法ニ之ヲ言フノ必要ナキナリ

然リ而シテ若シ此本條第一項ノ規定ニ背キ設立後二週間内ニ登記ヲ爲スコトヲ怠リ、此期間ヲ經過セシ後ニ於テ登記ヲ申請シタルモ如何、是レ即チ違法ノ申請ナルヲ以テ登記官吏ハ唯之ヲ却下ス可ク、此場合ニ於テハ當事者ハ更ニ法人設立ノ手續ヲ盡シテ再ヒ其登記ノ申請ヲ爲サ、ルヘガラサルナリ、然レモ其最初登記ノ申請ヲ却下セラレシノ故ヲ以テ當事者ハ登記ヲ怠リシ責ヲ免ル、コトヲ得スシテ本法第八十四條ノ制裁ヲ免レサル可キナリ

抑、法人ハ法律ノ擬制ニ因リテ自然人ト同視セラレ、權利ノ主格タルモノナレハ其設立ハ恰モ小兒ノ出產ニシテ之ヲ登記スルハ其出產ヲ登録スルニ異ナラス

總 則 編

總 則 編

殊ニ法人ハ其出生スルヤ直チニ成年者ノ如ク完全ノ力ヲ有シテ夥多ノ法律行為ヲ爲スモノナレハ隨テ夥多ノ法律關係ヲ生ス可ク、又之ヲ生スルニ非サレハ其法人タル目的ヲ達スル能ハス、故ニ法人ハ自己ノ爲ニ其出生ヲ公衆ニ知悉セシメントシテ之ヲ公示スルノ必要アルト共ニ他人ヲ保護シテ錯誤ニ陥ラサラシメンカ爲メ又法人ヲシテ其法人ナルコトヲ公示セシムルノ必要アリ、是レ右第一項ノ規定アル所以ニシテ隨テ法人ハ此登記ヲ爲スニ非サレハ他人ニ對シテ其法人タルコトヲ主張スルヲ得サラシムルハ自然ノ結果トス、是ヲ以テ縱令社團又ハ財團ハ既ニ成リ、官廳ノ許可ヲモ得テ法人ハ有效ニ設立セラレ、且法人タル名ヲ以テ取引ヲ爲シタルモ雖モ未タ登記ヲ爲サ、ルニ於テハ其他人ニ對シテハ法人トシテ對抗スルコトヲ得ス、即チ登記ハ法人設立ノ要件ニ非サルモ他人ニ對シテ法人タル資格ヲ得ルノ要件タルモノナリ

是故ニ設立後、登記前ニ於テ例ヘハ社團法人ノ一社員カ法人ノ爲ニ他人ト取引ヲ爲シタルモ其取引ヨリ生スル權利又ハ義務ハ法人ニ歸セスシテ其社員ニ歸ス可ク、隨テ其他人ニ對シテ其權利ヲ行用シ又ハ其義務ヲ履行スルハ其社員

總 則 編

一人ニ止マルモノトス、然レモ是レ唯他人ニ對シテ然ルノミニシテ社員相互ノ
 間ニ於テハ決シテ否ラス、其取引ノ結果タル利益又ハ損害ハ法人ニ於テ之ヲ得
 有シ又ハ負擔セサル可カラス、何トナレハ登記ハ社外人ニ對シテ必要ナルノミ
 ニシテ社員間ニ在テハ登記ヲ待タズシテ法人ハ既ニ成立セシモノタレハナリ」
 第二項ニ付テ注意ス可キハ登記ハ主タル事務所ノ所在地ニ於テ之ヲ了スレハ
 則チ他人ニ對抗スルヲ得ルコト是ナリ、例ヘハ一社團カ本社ノ外ニ數多ノ支社ヲ
 設ケンニ其本社所在地ニ於テ既ニ登記ヲ爲セハ最早何人ニ對シテモ其社團カ
 法人タルノ効力ヲ得有ス可シ、而シテ未タ登記ヲ爲サハル支社ハ其支社タルノ効
 力ヲ他人ニ對抗スルコトヲ得サルノミトス、前第一項カ各事務所ノ所在地ニ於テ
 登記ヲ命シタルハ此レカ爲ニシテ本社ト支社トノ關係即チ法人自体ト法人ノ
 一分身トノ關係ハ能ク之ヲ詳ニセンコトヲ要ス
 又右第一項ノ「各事務所」ト云ヘルハ法人設立ノ當初、同時ニ數多ノ事務所ヲ設ケ
 シ場合ヲ想像シタルモノナルカ、其設立ノ後ニ至リテ更ニ事務所ヲ新設セシ場
 合モ亦其所在地ニ於テ其登記ヲ受ケサル可カラス、是レ第一項ノ旨趣ヨリ生ス

總 則 編

ル自然ノ結果ニシテ第三項ハ寧ロ期間ヲ異ニセンカ爲ニ特記シタルモノト謂
 フ可シ、即チ此場合ハ設立ノ當初ト異ナリ設立ノ後ニシテ百事既ニ整頓セシキ
 ナルヲ以テ速ニ登記ヲ爲シ得ヘキノミナラス實際ノ利害ヨリスルモ新ニ法人
 タルコトヲ公示スル場合ト異ナリ、既ニ公示セラレシ法人ノ一分身ヲ設ケシキハ
 一層速ニ之ヲ公示セシムルノ必要アリ、是レ之ヲ一週間ト爲シタル所以ニシテ
 設立後ニ於ケル事務所ノ新設ハ登記事項ノ一種ノ變更タル理論ヨリスルモ之
 ヲ一週間ト爲セシハ次條ト權衡ヲ保ツモノト謂フ可シ
 本條法文ノ意義ハ略以上ノ解説ニ因リテ明ナルヘシ、然ルニ本條ニ付テハ多數
 ノ疑問ヲ生スルモノアリ、更ニ其論究ヲ試ミサル可カラス
 或人間ヲテ曰ク適法ニ爲シタル登記ハ其効力既往ニ溯ルヤ否ヤ詳ニ之ヲ言ヘ
 ハ本條ニ從ヒテ設立後二週間内ニ登記ヲ爲シタルキハ其法人ハ設立ノ日ヨリ
 他人ニ對シテ法ハタルノ効力アルモノト看做ス可キヤ否ヤ例ヘハ一月一日ニ
 會社ヲ設立シ十日ニ其登記ヲ爲シ、而シテ此法人ガ一月五日即チ其登記以前ニ於
 テ既ニ他人ト取引ヲ爲シタルニハ登記ノ効力其設立ノ日ニ溯ルモノトス

總 則 編

レハ此取引ハ法人其モノ、所爲ト爲リ、之ニ反シテ溯ラサルモノトスレハ單純ノ一個人ナル社員其人ノ所爲ト爲リ得ヘシ、然ラハ則チ此問題ハ甚々重大ノ關係ヲ實際ニ生スルモノニシテ敢テ忽諸ニ附テ可カラズ、或論者ハ之ヲ設立ノ日ニ溯ルモノト斷定シテ曰ク抑、本條カ其登記ノ速ナランヲ促セシ所以ノモノハ何ゾヤ、若シ其效力設立ノ日ニ溯ラストセハ設立ノ後幾日ヲ隔テ、之ヲ登記スルモ何ノ妨カ之アラン、然ルニ之ヲ二週間内ト限リシハ適法ノ登記ハ其效力既往ニ溯ル可キヲ以テ其登記ノ妄リニ遲延センコトヲ防キシモシニ非スヤ、且實際ニ就テ之ヲ見ルモ法人ノ既ニ設立セシ片ハ縱令未タ登記ヲ爲サ、ルモ固ヨリ儼然法人タルノ狀ヲ備ヘ他人モ亦法人トシテ取引セシニ外ナラサルヘシ、故ニ適法ノ登記アリシ片ハ其登記以前ノ所爲モ亦之ヲ法人ノ所爲トシテ取扱ハサル可カラズ、又登記ノ性質ヨリ之ヲ言フモ登記ナルモノハ既ニ存スル事項ヲ公示スルノ方法ニ過ス、即チ法人ノ設テ登記スルハ一個ノ人格ノ成立ヲ公示スルモノニシテ生兒ノ登録ヲ爲スニ異ナラス、然ラハ則チ昨日出產ノ兒ノ爲ニ今日登録ヲ爲シタル場合ニ於テ他人ノ之ヲ知ルハ今日ニ始マルカ故ニ其兒ハ今

總 則 編

日ヨリ以前ハ人兒ニ非ト云フヲ得ヘキ歟、豈其理アラシヤ、是レ此登記モ亦溯及ノ效アリト云フ所以ナリト、其レ然リ此說亦一理ナシトセス、然レモ余ハ遂ニ反對ノ論決ヲ採ラサルヲ得ス、蓋シ營利的法人ハ商會社ノ規定ニ從フモノナルヲ以テ該規定ニ於テ或ハ特別ノ規定ヲ設ケラル、ヤ知ル可カラズト雖モ公益的法人ノ如キ單ニ本章ノ規定ニ依ルニ於テハ決シテ溯及ノ効力ヲ有ス可カラズ、凡ソ或事項カ溯及ノ効力ヲ有スルハ當然ノ事實ニ非スシテ例外的事實ナレハ必ヤ特別ノ明文ヲ要シ、否サレハ則チ將來ニ向テ効力ヲ生スルニ過ス、今登記ニ付テハ本章一モ其明文アルヲ見ス、其溯及ノ効力ナキヤ言フ俟タサルナリ、論者ハ本條カ登記ヲ二週間内ニ限リシハ溯及ノ効力アルニ因ルト云フト雖モ是レ大誤ナリ、其効力ナキカ爲ニ却テ之ヲ促スノミ、論者ノ云ヘル如ク法人既ニ設立セラル、ヤ縱令未タ登記ヲ爲サ、ルモ固ヨリ儼然法人タルノ狀ヲ備ヘ他人モ亦法人トシテ取引スルノ事實ナキニ非サルヲ以テ速ニ登記ヲ爲シ以テ法人タルノ實ヲ全フセシメサレハ之ト取引スルノ人ヲ誤マリ意外ノ損失ヲ受ケシムルカ如キコトアルヲ恐レ、之ヲ二週間ト限リタルノミ、若シ溯及スルモノトセハ

總 則 編

如何ニ之ヲ遲延スルモ他人ヲ誤ルヲ無シト雖モ其溯及セサルカ爲メ則チ之ヲ促シテ速ニ登記セシムルナリ、生兒登録ノ例ハ論者ノ言ノ如シト雖モ是レ法人登記ノ事ニ於ケル適切ノ引例トスルヲ得ス、生兒以登録ハ現ニ存スル自然的事實ヲ單ニ公簿ニ登録スルニ止マルモ、法人ハ之ニ異ナリ法定ノ條件ヲ備ヘテ始テ現存スルモノニシテ登記ハ公示ノ方法タルト同時ニ殆ト又設立ヲ全フスルノ一條件タリ、第三者ニ對シテハ登記ニ依リ始テ完全ニ設立セラレタルモノト爲ルヲ以テ登記後始テ法人タルノ效力アリ、其既往ニ溯ラサルハ當然ノミ、由是觀之登記ノ效力ハ如何ナル理由ニ因ルモ到底溯及ス可キモノニ非サルナリ、或人又曰ク適法ノ登記ト雖モ既往ニ溯及セサルハ命ヲ聽ケリ、然レモ第一項ノ期間ヲ過テ登記ヲ怠リ其申請ヲ却下セラレタル場合ニ第八十四條ノ制裁ヲ受クルノ說ハ首服スル能ハス、如何トナレハ此登記ハ他人ニ對シテ法人ノ設立ヲ有效ナラシムルノ手段ニ過スシテ之ヲ爲スト否トハ當事者ノ自由ニ屬シ毫モ他人ヲ利害スルヲ無ケレハナリ、本條第三項ノ事務所新設ノ場合及ビ次條ノ登記事項變更ノ場合ノ如キハ既ニ規存スルモノニ付キ一事實ヲ加ヘ又ハ一度變

總 則 編

更ヲ與ヘタルモノナレハ速ニ登記ヲ爲サ、ルニ於テハ他人ニ利害ヲ及ホスヲ以テ過料ニ處セラル可シト雖モ本問ノ場合ノ如キハ未タ存セサルモノヲ新ニ存セシメントスルモノニシテ其遲速緩急ハ一ニ當事者ノ意ニ任ス可ク、隨テ單ニ其申請ヲ却下スルニ止マリテ過料ノ制裁ヲ蒙ル可キニ非サルナリト、然レモ是レ亦至論ト云フヲ得ス、蓋シ本條ハ明ニ登記ヲ爲スヲ要スト命シ第八十四條ニ於テハ登記ヲ怠リシ者ハ過料ニ處スト單ニ明記シタルヨリ見レハ法律ノ趣旨甚タ明瞭ニシテ故ナク登記ヲ怠リシ者ハ其場合ノ如何ニ拘ハラス此制裁ヲ免レサルナリ、固ヨリ法人ヲ設立スルノ遲速ハ一ニ當事者ノ自由ニ任ス可シト雖モ既ニ一タヒ之ヲ設立シタル以上ハ爾後二週間内ニ登記ヲ爲ス可キハ當事者ノ義務タルモノニシテ此義務ヲ怠ルハ他人ニ害ヲ與フルト否トヲ問ハス其制裁ヲ免レサル可キハ當然ノコトタリ、況ヤ法人ハ設立後二週間内ニ當然登記ヲ爲ス可キモノナルヲ以テ其期間ヲ過クレハ他人ハ既ニ其登記アリシヲ信シテ取引スヘシ然ルニ登記ヲ怠レルカ爲メ法人タルノ效力ナシトセハ他人ノ損害少カラサルニ於テヲヤ、其法人カ登記ヲ調査セサリシハ固ヨリ過失ナリト

スルモ其過失ハ單ニ不注意ニ止マルニ法人ノ過失ハ違法ニ在リテ一層重大ノモノト謂フ可シ、第八十四條ノ制裁ヲ免レサルハ實ニ正當ニシテ且必要ノ事タルナリ

總 則 編

右登記ヲ怠リシ場合ニ付テハ更ニ一問アリ、即チ設立ノ日ヨリ二週間ヲ過テ登記ヲ申請シタルキハ登記官吏ハ其申請ヲ却下ス可ク、此場合ニ於テハ當事者ハ新ニ法人設立ノ手續ヲ爲ス可キヤ、即チ登記ノ遲延ハ法人ノ設立ヲ無効タラシムルヤノ點是ナリ、或人ハ之ニ付キ説ヲ爲シテ曰ク元來登記ハ法人設立ノ要件ニ非ス、只其設立法人ニ對シテ有效ナラシムルノ要件ニ過ス、故ニ此點ヨリ之ヲ見レハ適法ノ登記ナカリシモ此レカ爲ニ其既ニ成立シタル法人ノ設立カ無効ニ歸スルノ理アルコト無シ、而シテ此場合ニ必ス再ヒ登記ヲ爲スヲ要シ且其登記ニハ必ス設立ノ日附ヲ改ム可キヲ以テスレハ初ノ設立ハ無効ニ歸シ、再ヒ之ヲ設立スヘキモノ、如シト雖モ法人ノ設立ト其設立ノ日トハ敢テ緊切ノ關係アルニ非ス、例ヘハ公益的團體カ主務官廳ニ對シテ法人設立許可ノ申請ヲ爲スニハ必シモ某月某日ヨリ設立セント申請スルモノニ非ス、否ナ唯單純ニ其設立ヲ許

總 則 編

可セラレンコトヲ申請シ、其許可アルヲ待テ始テ其時日ヲ決定スルモノナリ、又假リニ某月某日ヨリト申請シ其許可アリタリトスルモ其月日ハ決シテ許可ノ條件ト爲リシモノニ非ス、之ヲ申請中ニ記入セシハ當事者ノ任意ニ因リ偶之ヲ記入セシニ止マリ之ヲ記入スルヲ要スルニ非ス、隨テ其記入ノ月日ヲ改ムルモ設立ノ許可ニ影響スルコト無シ、然ラハ則チ一旦設立ノ日ヲ定メテ其日ヨリ二週間ヲ經過セシ後ニ登記ヲ爲サントシテ却下セラレシキハ他ニ何等ノ手續ヲモ要セス、單ニ其日附ヲ改メテ再ヒ登記スヘキニ止マリ、再ヒ設立許可ノ申請等設立ニ關スル手續ヲ爲スノ要ナキナリト、此説亦理アリト雖モ余ハ尙ホ之ニ首肯スル能ハス、設立ノ月日ハ固ヨリ許可ノ條件タルモノニ非ス、故ニ其日附ヲ改メサルヲ得サルカ爲ニ許可ノ無効ヲ來スノ理ナキハ實ニ或人ノ言ノ如シ、然レモ適法ノ登記ヲ爲スヘキコトハ主務官廳カ許可ヲ爲スニ當リテ當然想像セシ所ニシテ登記其他一切ノ事項カ適法ニ施爲セラル、コトヲ想像シテ茲ニ始テ設立ノ許可ヲ與ヘシモノト謂フ可ク、隨テ登記其他ノ事項ニ於テ若シ不適法ノ行爲アラハ其許可アリシ所以ノ趣旨ニ背反スルモノニシテ其許可ハ此レカ爲ニ當然消

總 則 編

滅スルモノト云ハサル可カラス、故ニ本問ノ場合ハ曩キノ許可ハ既ニ消滅シ更ニ再ヒ之ヲ申請シ其許可ヲ得ルヲ待テ更ニ適法ノ登記ヲ爲ス可キモノト論決スルヲ妥當トス、殊ニ實際ノ事情ヨリ之ヲ言ヘハ其登記ノ遅延カ僅々一二日ナル場合ハ尙ホ可ナルモ荏苒數个月ニ至リシハ如キ、若クハ最初ノ登記ハ僅々ノ遅延ノ爲ニ却下セラレシナルモ第二ノ登記カ數个月ノ後ニ至リシハ如キ或人ノ説ニ依レハ設立ノ許可ハ尙ホ依然其效力ヲ存スルモノト爲リ、理論上ノ不妥ハ勿論、其間法人タルノ現狀ヲ備ヘテ而シテ法律上法人タルノ效力ナキハ此ノ如キノ久シキニ涉ラハ第三者ヲ害スルヲ亦甚タ少カラサルヘシ、故ニ此點ヨリ之ヲ觀ルモ登記ノ遅延ハ直チニ設立許可ノ無効ヲ來シ再ヒ之ヲ申請シテ其許可ヲ受ク可キモノトセサル可カラス、蓋シ主務官廳ハ前ニ既ニ許可ヲ與ヘシモノナレハ此再度ノ申請ニ對シテモ亦固ヨリ之ヲ與フヘク之ヲ申請スルハ殆ト形式的行爲ニ過スト雖モ而モ效力ノ有無之ニ繫ルヲ以テ形式モ亦決シテ輕ンスコカラス、法文「二週間内ニ……登記ヲ爲ス」ヲ要ス「トアルハ若シ之ニ反スルハ其設立ヲ無効トスル」ノ意ヲ其裏面ニ包含スルモノト謂フ可キナリ

總 則 編

第四十六條 登記スヘキ事項左ノ如シ

- 一 目的
- 二 名稱
- 三 事務所
- 四 設立許可ノ年月日
- 五 存立時期ヲ定メタルトキハ其時期
- 六 資産ノ總額
- 七 出資ノ方法ヲ定メタルトキハ其方法
- 八 理事ノ氏名住所

前項ニ掲ケタル事項中ニ變更ヲ生シタルトキハ一週間内ニ登記ヲ爲スコトヲ要ス登記前ニ在リテハ其變更ヲ以テ他人ニ對スルコトヲ得ス

本條ハ法律上義務トシテ登記ス可キ事項ヲ定メタルモノナリ、蓋シ登記ノ必要ハ法人ノ性質上ト公益上トヨリ來ル、性質上ノ必要ハ法人ハ固ヨリ有形ノ存在ヲ有セサルヲ以テ其存在ヲ明確ナラシムルノ必要ヲ謂ヒ、公益上ノ必要ハ其

性質及ヒ組織ヲ明ニシテ其信用ヲ保持シ併セテ公衆ノ利益ヲ保護スルノ必要ヲ謂フ登記ノ此二種ノ必要ヲ充タスニハ少クモ本條八種ノ事項ヲ登記スルヲ要スルナリ

故ニ本條ハ其最少限ヲ示シタルモノニシテ登記ノ事項ヲ此八種ニ限ルノ趣旨ニ非ス隨テ法律ノ範圍内ニ於テハ當事者ノ希望ニ因リ其他ノ事項ヲモ登記スルコトヲ得ヘシ例ヘハ各社員ノ出資額ノ如キ本條之ヲ命セサルモ亦之ヲ登記スルヲ妨ケス故ニ登記官吏ハ當事者ノ申請セル事項ヲ調査シ不適法ノモノト認めサル限リハ必ス登記ス可キモノトス

然リ而ノ本條列記ノ事項ハ義務トシテ必ス登記スヘキモノナレモ若シ其一ニ脱漏シタル片ハ登記ノ全体カ無効ト爲ルヤト云フニ第一號第二號ノ如キ重要ノ事項ヲ脱漏セシ片ハ固ヨリ無効ニ歸スヘシト雖モ其他ノ事項例ヘハ第五號第七號ノ如キ實際時期又ハ方法ノ定メアルニ拘ハラズ之ヲ脱漏シタリトスルモ法律上ニテハ唯其定メナキモノト爲スニ止マリ決シテ登記全体ニ其影響ヲ及ボスモノニ非ス且此二事ノ如キハ後ヨリ更ニ之ヲ登記スルコトヲ得ヘク即

總 則 編

チ初ハ定メナカリシニ後之ヲ定メシモノトシ第二項ニ依リ登記事項ノ變更ノ一種ニ屬スヘキナリ

本條各號ノ事項ハ自ラ明瞭ナルヲ以テ一々此レカ説明ヲ要セス唯其一二ニ付キ略述スヘシ

第五號ノ存立時期トハ法人カ將來存立スル期限又ハ期間ヲ謂ヒ或期限ヲ指定シテ何年何月マテトシ或ハ或期間ヲ定メテ幾年間ト云ヒ又或ハ或事件ノ發生若クハ消滅ノ時マテト爲スコトアリ最後ノモノハ例ヘハ人命即チ或人ノ終身ヲ限リ其死亡ノ時マテト爲スノ類ニシテ是レ亦期限ノ一種ナレハ登記ヲ受ケサル可カラス元來期限トハ早晚必ス到着セサル可カラサルモノニシテ人命ノ如キハ何時其期ノ來ルヤ豫知ス可カラサルモ人壽限リアリ早晚死亡ヲ免レサルヲ以テ期限タルノ性質ニ缺クルコト無シ又未必條件即チ將來ニ係リ且生否不確實ナル事件ノ生否ヲ以テ存立時期ト爲ス片ハ期限タルモノニ非サルモ而モ其條件若シ成就スレハ法人ノ存立茲ニ止息スルモノニシテ亦一ノ存立時期タルヲ妨ケス故ニ是レ亦必ス登記セサル可カラス法文「期限」又ハ「期間」ト書セスシ

總 則 編

テ單ニ「時期」ト書シタルハ其一二ニ偏スルヲ避ケ廣ク此等ノモノヲ包含セシムルノ意ナルヲ知ル可キナリ

第七號ノ出資トハ各社員ヨリ法人ノ資産トシテ差入ル、所ノ金錢、技術、勞力其他總テノ有價物ヲ云フ、而メ茲ニ所謂出資ノ法方トハ例ヘハ株式會社ニ於テ株式(出資)ヲ若干圓トシ幾回ニ分テ拂込ムヘシトスルノ類ヲ云フ、尙ホ此出資ノ事ハ本法第三編第二章第十二節組合ノ規定ニ就テ詳述ス可キヲ以テ茲ニ贅セス』本條第二項ハ登記事項中ノ一個又ハ數個ニ變更ヲ生シタルハ又速ニ其登記ヲ爲スヘキヲ命セリ、故ニ既ニ登記シタル八種ノ事項ニ變更ヲ生シタルハ其自然ニ生シタルト合意ヲ以テ故ラニ之ヲ生セシメタルト問ハス其變更アリテヨリ一週間内ニ義務トシテ之ヲ登記セサル可カラス、例ヘハ理事ノ改任ノ如キ資産總額ノ増減ノ如キ皆是ナリ、若シ之ヲ怠レハ亦第八十四條ノ制裁ヲ蒙ルヤ言ヲ俟タス

然レモ此規定ノ適用ニ付テハ頗ル注意ス可キモノアリ、前例理事ノ改任ノ如キ其死亡ニ因ル場合ニ於テハ理事ノ選任ハ社團法人ノ如キハ總會ニ於テ之ヲ選

總 則 編

舉スルヲ通例トシ、而シテ總會ヲ開キ之ヲ選任スルハ前理事ノ死亡後一週間内ニ實行シ能ハサルヲ尠カラス、故ニ此場合ハ直チニ一週間内ニ新理事ヲ登記スル能ハサルヲ以テ先ツ前理事ノ死亡ヲ一週間内ニ登記シ爾後新理事ノ選定セラレ、ヤ亦其選定ノ時ヨリ一週間内ニ其新任ヲ登記スレハ則チ可ナルモノトス、又資産總額ノ増減ノ如キ之ヲ極論スレハ法人ト自然人トニ論ナク日々ニ収支出入アルヲ以テ資産總額モ亦日々ニ増減スヘシト雖モ此レカ爲メニ日々ニ登記スル能ハサルハ論ナキニ因リ本條ノ所謂變更トハ總會ノ決議ニ因リ定款ヲ改正シテ資産總額ノ増減ヲ爲セシ等ノ場合ニ限ルモノトス

本條列記外ノ事項ヲ當事者ノ任意ニ出テ、登記シ而シテ其事項ニ變更ヲ生シタルハ亦此規定ニ準シテ一週間内ニ登記スルヲ要スルモノトス、何トナレハ初ヨリ登記セサレハ則チ可ナルモ既ニ登記シタル以上ハ他人ハ其登記ニ信用ヲ置クヲ以テ他人ニ對シテハ本條列記ノ事項ト同一ノ效力ヲ有シ其變更ノ影響ヲ及ホスヲ毫モ異ナル所ナケレハナリ、但此場合ニ變更ノ登記ヲ怠ルモ別ニ法文ノ明示セシ登記ニ非サルヲ以テ第八十四條ノ制裁ハ之ヲ蒙ルヲ無キモノト

決定スルヲ穩當ナリトス
然リ而シテ本條列記ノ事項ナルト其他ノ任意事項ナルトヲ問ハス事項ノ變更ヲ生シ而シテ未タ其登記ヲ受ケサル間ハ其變更ヲ以テ他人ニ對抗スルコトヲ得ス、即チ登記ヲ爲スニ非サレハ他人ニ對シテ法律上變更ノ效ナキヲ以テ其變更シタルコトニ付キ其權利ヲ主張スルコトヲ得サルナリ

第四十七條 第四十五條第一項及ヒ前條ノ規定ニ依リ登記スヘキ事項ニシテ官廳ノ許可ヲ要スルモノハ其許可書ノ到達シタル時ヨリ登記ノ期間ヲ起算ス

本條ハ登記期間ノ起算點ニ付テ特例ヲ設ケタルモノナリ

第四十五條第一項ニ依リ法人ノ設立ニ當リテ前條第一項ノ事項ヲ新ニ登記スルニハ其設立ノ日ヨリ起算シテ二週間内タルヘク、又前條第二項ニ依リテ登記事項ノ變更ヲ登記スルニハ其變更ノ時ヨリ起算シテ一週間内タルヘク、此期間ハ如何ナル場合ニモ之ヲ變スルヲ得スト雖モ其事項ニシテ官廳ノ許可ヲ要スルモノナルキハ期間ハ固ヨリ同一ナルモ其期間ノ起算點ハ之ヲ異ニセサル可カラス、故ニ本條ヲ以テ特例ヲ設ケ其許可書ノ到達シタル時ヨリ其期間ヲ起算

總 則 編

總 則 編

スルコト爲セリ

官廳ノ許可ヲ要スル事項トハ本法、特別法其他行政法等ノ規定アルモノニシテ例ヘハ公益的法人ノ設立ハ勿論其他ノ組合又ハ會社ニシテ火藥銃砲ノ製造又ハ販賣ヲ目的トスルキハ其目的ハ官廳ノ許可ヲ要スルモノナリ、又國家ノ特別保護アル法人ニ於テハ其理事ヲ選任スルニ監督官廳ノ認可ヲ要シ是レ亦茲ニ包含スルモノナリ其他此等ノ特別ニ許可ヲ要スルモノ、ミナラス定款ノ變更ハ主務官廳ノ認可ヲ要スルモノ 第三十八條 第三十條ニシテ前條列記ノ諸事項ハ皆定款中重要ノモノタルヲ以テ其諸事項ヲ變更スルニハ總テ官廳ノ認可ヲ要シ隨テ茲ニ包含スルモノナリ

第四十八條 法人カ其事務所ヲ移轉シタルトキハ舊所在地ニ於テハ一週間内ニ移轉ノ登記ヲ爲シ新所在地ニ於テハ同期間内ニ第四十六條第一項ニ定メタル登記ヲ爲スコトヲ要ス

同一ノ登記所ノ管轄區域内ニ於テ事務所ヲ移轉シタルトキハ其移轉ノミノ登記ヲ爲スコトヲ要ス

總 則 編

本條ハ事務所ノ移轉ニ付キ登記スヘキ事項ヲ定メタルモノナリ
 事務所ハ第四十六條第一項ニ因リ義務トシテ登記ヲ爲スヘク、而シテ之ヲ移轉ス
 ルハ該條第二項ノ所謂登記事項ノ變更ナルヲ以テ該項ニ因リ一週間内ニ登記
 スヘキハ言フ俟タサルナリ、然レモ此場合ハ他ノ登記事項ノ變更ノ如ク單ニ其
 變更ノ旨ヲ登記スルノミヲ以テ足レリトセス、何トナレハ甲登記所ノ管轄區域
 ヨリ乙登記所ノ管轄區域ニ移轉シタルハ其新所在地即チ乙登記所ノ管轄區
 域ニ於テハ一法人ノ新ニ現出シタルモノト爲レハナリ
 是故ニ右ノ場合ノ如キ其舊所在地ニ於テハ固ヨリ單ニ其事務所ヲ某地ニ移轉
 シタルヲ登記スレハ則チ可ナルモ其新所在地ニ於テハ新ニ法人ヲ設立シタ
 ル場合ト同一ノ登記即チ第四十六條第一項ニ定メタル八種ノ事項全体ノ登記
 ヲ爲サ、ル可カラス

然レモ同一登記所ノ管轄區域内ニ於ケル移轉ハ固ヨリ右ノ如キ事實ナキヲ以
 テ單ニ某所ヘ移轉シタルヲノミヲ登記スレハ則チ可ナリトス、是レ第四十六條
 第二項ノ規定ヲ全然適用セルモノニ過サルナリ

第四十九條 第四十五條第三項、第四十六條及ヒ前條ノ規定ハ外國法人カ日本ニ事務所ヲ
 設クル場合ニモ亦之ヲ適用ス但外國ニ於テ生シタル事項ニ付テハ其通知ノ到達シタル
 時ヨリ登記ノ期間ヲ起算ス

外國法人カ始メテ日本ニ事務所ヲ設ケタルトキハ其事務所ノ所在地ニ於テ登記ヲ爲ス
 マテハ他人ハ其法人ノ成立ヲ否認スルコトヲ得

總 則 編

本條ハ外國法人ニ關スル前數條ノ適用ヲ示シタルモノナリ
 本條第一項ハ意義明晰別ニ説明ヲ要セス、即チ既ニ其本國ニ於テ法人トシテ成
 立シ隨テ其主タル事務所ヲ其本國ニ有スルノミナラス既ニ日本ニ於テモ事務
 所ヲ有スル外國法人カ又新ニ日本ニ事務所ヲ設クルハ恰モ第四十五條第三
 項ニ該當シ其新設事務所ノ所在地ニ於テ第四十六條第一項ニ列記セル諸事項
 ヲ登記スヘク、又其諸事項ニ變更ヲ生シタルハ同條第二項ニ依リ其變更ノ登
 記ヲ爲スヘシ、唯主タル事務所カ本國ニ存スルモノナルヲ以テ其本國ニ於テ種
 々ノ新事項ヲ生シ又ハ既ニ右ノ規定ニ依リ日本ニ於テ登記シタル事項ニ變更
 ヲ生スルコトアルヘク、此等ノ事項ハ其本國ヨリ日本ノ事務所ヘ通知ノ到達スル

總

則

編

ハ通例多少ノ長時日ヲ要ス可キニ因リ其事項ノ生セシ時ヨリ二週間内ニ登記ヲ爲スハ不能ノ事ニ屬ス、是ヲ以テ本條ハ之ニ關スル一特例ヲ設ケ、其通知ノ到達シタル時ヲ以テ起算點ト爲シ以テ右ノ期間ヲ計算スルコトセルナリ

本條第二項モ亦第四十五條第二項ノ精神ヲ準用セシモノニシテ此場合ハ第一項ノ場合ト異ナリ日本ニ於テ始テ事務所ヲ設ケタルモノ即チ其本國ニ於テハ固ヨリ法人トシテ成立シ既ニ事務所ヲ有スルモ日本ニ於テハ未タ一ノ事務所ヲモ有セザリシニ今ヤ始テ之ヲ設ケタルモノヲ謂ヒ、日本ニ於テハ始テ現出シタル法人ナレハ該項ノ精神ニ依リ其登記ヲ受クルマテハ法人トシテ他人ニ對抗スルコトヲ得ス、即チ他人ハ其法人タルコトヲ否認スルコトヲ得ルナリ、蓋シ此外國法人ハ其主タル事務所ノ所在地タル本國ニ於テハ既ニ登記ヲ爲シタルヘキヲ以テ該項ノ文字上ヨリ云ヘハ日本ニ於テ縱令未タ登記ヲ爲サ、ルモ法人トシテ他人ニ對抗スルコトヲ得ヘキモノ、如シト雖モ決シテ然ラス、日本法律ノ眼中ニハ外國ニ於ケル事實ヲ見サルヲ以テ縱令外國ニ於テハ如何ナル登記ヲ爲シタルモ日本ニ於テ未タ一ノ登記ヲ爲サ、ルモノハ即チ曾テ登記ヲ爲サ、ルモノト看做サ、ルヲ得ス、於是乎第四十五條第二項ノ精神ハ當然此場合ニ準用ス可キモノタルヲ解ス可キナリ

第五十條 法人ノ住所ハ其主タル事務所ノ所在地ニ在ルモノトス

本條ハ法人ノ住所タル場所ヲ定メタルモノナリ

法人ハ人格ヲ有シ法令ノ規定ニ從ヒテ權利義務ヲ有スルモノナレハ諸種ノ法律關係ニ於テ自然人ト同一ニ一定ノ住所ヲ有スルハ甚タ必要ノ事ニ屬ス、蓋シ法人ハ實在ヲ有セサル無形体ナルヲ以テ自然人ノ如ク住居ノ場所ハ固ヨリ之アルヲ得ス、然レモ所謂住所トハ生活ノ本據ニ外ナラスシテ法人モ亦其生活ノ本據タルモノハ必ス之アリ、事務所即チ是ナリ、故ニ法律ハ法人ニ關シテハ其事務所ヲ以テ其住所ト想定シ、民事上住所ニ關スル規則ハ法人ノ性質ノ許ス限リ之ヲ茲ニ適用スルモノトス、民事訴訟法第二十四條ニ「公又ハ私ノ法人及ヒ其資格ニ於テ訴ヘラル、コトヲ得ル會社其他ノ社團又ハ財團等ノ普通裁判所ハ其所在地ニ依リテ定マル、此所在地ハ別段ノ定ナキハ事務所在ノ地トス」云々トアルカ如キ是ナリ

總 則 編

第一編 第二章 法人 第一節 法人ノ設立

然レモ法人ノ事務所ハ一个所ニ止マラサレハ此場合ハ其主タル事務所ニ依ル、
而シテ會社カ本店支店ヲ有スルカ如ク數個ノ事務所アルモノハ大抵本支ノ關係
タルヲ以テ其主タル事務所ノ孰レナルヤハ之ヲ知ルニ難カラサルヘキナリ

第五十一條 法人ハ設立ノ時及ヒ毎年初ノ三個月内ニ財産目錄ヲ作り之ヲ事務所ニ備ヘ
置クコトヲ要ス但特ニ事業年度ヲ設クルモノハ設立ノ時及其年度ノ終ニ於テ之ヲ作ル
コトヲ要ス

社團法人ハ社員名簿ヲ備ヘ置キ社員ノ變更アル毎ニ之ヲ訂正スルコトヲ要ス

本條ハ法人ニ特別ノ記録ヲ備フルノ義務ヲ命シタルモノナリ
法人ハ其社團法人タルト財團法人タルトヲ問ハス設立ノ時ニ財産目錄ヲ作り
テ其動産、不動産一切ノ財産ヲ記載スヘク、且財産ハ常ニ増減變動アルモノナレ
ハ毎年之ヲ更新シテ新目錄ヲ作ルヘク、而シテ此財産目錄ハ常ニ之ヲ事務所ニ備
ヘ置クヲ要ス、是レ法人ノ義務ニシテ若シ之ニ背キ此目錄ヲ備ヘサルキ又ハ之
ニ不正ノ記載ヲ爲シタルキハ第八十四條ノ制裁ヲ免レサルナリ
然リ而シテ設立後之ヲ作ルニ付テハ一定ノ時期ニ於テスヘク、即チ普通ノ場合ニ

總 則 編

於テハ曆年ニ從ヒ初ノ三個月内即チ一月ヨリ三月末日ニ至ルマテノ間ニ之ヲ
作ルヘク、又法人ニ因リテハ其目的トスル事業ノ性質其他ノ事情ニ因リ曆年ニ
依テスシテ別ニ事業年度ヲ設クルモノアリ、此法人ハ其事業年度ノ終ニ於テ之
ヲ作ルヘク、若シ此時期ヲ過クレハ則チ右ノ制裁アルナリ
又社團法人ニハ更ニ一ノ特別ナル義務アリ、他ナシ其設立ノ初ニ於テ社員名簿
ヲ作り爾後社員ノ變更即チ退社入社アル毎ニ之ヲ訂正スヘク、之ヲ怠リテ名簿
ヲ備ヘス又ハ不正ノ記載ヲ爲シタルキモ亦第八十四條ノ制裁ヲ受クルモノト
ス

總 則 編

抑本條カ法人ニ此ノ如ク財産目錄及ヒ社員名簿ヲ備ヘシメ、之ヲ警シムルニ制
裁ヲ以テスルモノハ何ソヤ、他ナシ一ハ以テ其財産ノ現況ヲ明ニシ一ハ以テ其
社團ノ組織ヲ明ニシ以テ其財産ヲ鞏固ナラシメ、且其濫用ヲ防キ傍ラ監督上ノ
便宜ト裁判上ニ於ケル證明上ノ便宜トニ供セントスルニ在ルナリ、元來商事會
社ニ付テハ商法第三十二條ノ規定アリ、殊ニ其株式會社ニ付テハ第七十四條
及ヒ第二百二十二條ノ規定アリテ當ニ本條ノ二書類ノミナラス其他數種ノ書

總

則

編

類ヲ備フルノ義務ヲ命セリ、而シテ營利ヲ目的トスル法人ハ其商事ト非商事トヲ問ハス總テ商事會社ノ規定ニ從フヘキモノ本法第三十五條ナレハ之ニ關シテハ本條ノ規定ヲ要セス、本條ハ寧ロ公益ヲ目的トスル法人ノミニ適用セラル、モノニシテ此等ノ法人ハ殊ニ其監督ヲ嚴ニシ其財産ノ濫用ヲ防遏セサル可カラス、此規定アルハ即チ此レカ爲ナリ

本條ニ付テ一ノ疑點ヲ存スルハ此財産目錄及ヒ社員名簿ハ展閱ヲ許スモノナリヤ、若シ之ヲ許ストセハ何人ノ展閱ヲ許スヤノ點是ナリ、惟フニ既ニ之ニ備フルコトヲ命シタルハ其展閱ニ供セシムルカ爲ナルコト爭ヲ容レサルヘシ、何トナレハ若シ否ラストセハ之ヲ備ヘシムルモ徒ニ畫餅ニ屬シ之ヲ備フルノ實用ナケレハナリ、然ラハ則チ何人ニ之ヲ展閱セシムルヤ、法人ヲ組成スル社員及ヒ法人ノ代理人タル理事其他ノ役員ノ之ヲ展閱シ得ルハ勿論ニシテ疑問ハ社外人即チ第三者ノ展閱ヲ許スヘキヤ否ニ在リ、余ノ信スル所ニ依レバ既ニ之ヲ備ヘシムト云ヘハ則チ當然展閱ヲ許サシムルモノトス可ク、而シテ既ニ展閱ヲ許サシムルモノトセハ則チ制限ナク何人ニモ展閱ヲ許スノ至當ナルカ如シト雖モ社團

總 則 編

ニ全ク關係ナキ者ニマテ其展閱ヲ許スニ於テハ其益甚タ少クシテ其害切テ多シ、故ニ法律上別ニ制限ナク展閱ヲ許シタル場合ハ論外ニシテ本條ノ如ク別ニ許スノ明文ナク隨テ其制限モナキ場合ニ於テハ勢ヒ理論ニ依テ之ヲ決セサル可カラズ、即チ至當ノ制限内ニ於テ許スヲ可トス、蓋シ商法第二百二十二條ヲ此ニ適用スルニハ非サルモ該條ノ如ク社團ニ對シ其書類ヲ展閱スルニ付キ利害ノ關係アル者ノミニ限り之ヲ許ストスルハ蓋シ當然ノ論決ナリト信ス

又右財産目錄ハ其記載最モ明瞭ニ最モ正確ナルヲ要ス、否サレハ則チ動モスレハ第八十四條ノ所謂不正ノ記載ト爲リテ其制裁ヲ免レサルヘシ、商法第三十二條第二項ニハ「財産目錄……ヲ作ルニハ……辨償ヲ得ルコトノ確ナラサル債權ニ付テハ其推知シ得ヘキ損失額ヲ控除シテ之ヲ記載シ又到底損失ニ歸ス可キ債權ハ全ク之ヲ記載セス」ト規定シアリ、該規定ハ本條ノ場合ニ之ヲ遵守スヘキノ效力アルニ非サルハ論ヲ竣タサレモ當事者ハ此趣旨ニ從フコト其利益タリ、否ナ事實上茲ニ出テサルヲ得サルヘシ、尤モ該規定ノ如ク必シモ控除シテ記載シ又ハ全ク之ヲ記載セサルコトハ之ヲ要セス、即チ其債權ノ全額ヲ記載シテ其辨

償ヲ得ルコトノ確ナラサルコト若干ノ損失アルヘキコト又ハ到底損失ニ歸スヘキコト等ヲ附記スルハ必要ナルヘキナリ

第二節 法人ノ管理

法人ハ屢陳述セシ如ク限定的權利能力ヲ有スルモ行為能力ヲ有セサルヲ以テ其業務ヲ施行ス可キ相當ノ機關ヲ設ケサル可カラス然レモ亦法人ノ業務ヲ擧ケテ其機關ニ一任スルハ頗ル危嶮ナルコトアルヲ以テ更ニ其業務ヲ監督ス可キ相當ノ機關ヲ設ケサル可カラス本節ハ即チ法人ノ管理ヲ爲ス機關トシテ業務施行機關ト業務監督機關トノ二種ヲ設ケ前者ヲ名ケテ理事ト曰ヒ後者ヲ名ケテ監事ト曰フ

理事ハ此如ク法人ノ目的トセル業務ヲ施行スルノ機關ニシテ法人ノ爲ニ其法定代理人タル者ナリ故ニ苟モ茲ニ法人アレハ必ス茲ニ理事ナカル可カラス然レモ監事ハ稍之ニ異ナリ業務ヲ監督スルノ機關ニ過サルヲ以テ法人ノ性質目的ノ如何又ハ當事者ノ意向如何ニ因リ其監督ヲ必要トスルモ之ヲ置クコトヲ得ルニ止マリ若シ其必要ナシトセハ則チ之ヲ置カサルモ可ナリ

總 則 編

總 則

此二機關ノ外更ニ社團法人ニ特別ナル一機關アリ總社員ノ聚合ニ成ルモノトシテ之ヲ總會ト名ク蓋シ社團法人ヲ組成スル自然人ヲ社員ト云ヒ其社員ノ合同意思ハ即チ其法人ノ意思ナリト爲サ、ル可カラス故ニ社員ノ聚合ニ因リテ總會ナルモノヲ設ケ之ニ依リテ社員ノ合同意思ヲ徵シ以テ法人ノ意思ヲ確定ス可キ最高機關ト爲シ法人ノ業務ヲ監督シ且指揮セシム

法人カ自己ノ爲ニ其業務ヲ監督スルニハ此ノ如ク監事アリ又總會アリ然レモ法人ハ其公益ヲ目的トスルモノハ固ヨリ國家ノ利害ニ至大ノ關係アリ又其營利ヲ目的トスルモノモ國家ノ利害ニ影響ヲ及ホスコト少々ナラス故ニ法人自己ノ爲ニ其業務ヲ監督スルモノ、外更ニ國家ノ利害ノ爲ニ法人其モノヲ監督スルモノ無カル可カラス本節ハ即チ主務官廳ヲ以テ法人ノ最高監督府ト爲シ各法人ヲシテ皆其監督ニ服セシメ以テ國家ノ利益ヲ保持スルコト爲シタリ
今法人ニ於ケル前三個ノ機關ノ關係ヲ明ニセンカ爲メ之ヲ國家ノ機關ニ喩ヘンニ社團法人(商法ニ於ケル合名會社、合資會社ノ類ハ特別ハ社員ノ權利皆平等ニシテ君ナク民ナシ夫レ猶ホ共和政体ノ國ノ如キ歟、而シテ總會ハ既往ノ業務ヲ

認定スルノミナラス法人前途ノ方向ヲ指定スルノ全權ヲ有ス、故ニ立法官即チ共和政体ノ國ニ於ケル國會ノ地位ヲ占ムルモノナリ、理事ハ定款寄附行爲若クハ總會ノ決議ニ從ヒテ法人ノ業務ヲ施行ス恰モ行政官ニ當リ、又監事ハ法人ノ爲ニ業務ヲ視察監査ス頗ル司法官ニ似タリト謂フ可シ、法人管理ノ要領蓋シ此ノ如キナリ

第五十二條 法人ニハ一人又ハ數人ノ理事ヲ置クコトヲ要ス

理事數人アル場合ニ於テ定款又ハ寄附行爲ニ別段ノ定ナキトキハ法人ノ事務ハ理事ノ過半數ヲ以テ之ヲ決ス

法人ニハ行爲能力ナキヲ以テ必ス代理人ナカル可カラズ、本條ハ即チ理事ト云ヘルモノヲ設ケ之ヲ法人ノ行爲機關即チ業務施行機關トシテ所謂法人ノ法定代理人ト爲スコトヲ命シタリ

而シテ理事ハ如何ナル人ヲ以テ之ニ任スヘキヤ、如何ナル方法ヲ以テ之ヲ選定スヘキヤ、其任期ハ如何、其解任ハ如何ナル場合ニ如何ナル方法ニ依ルヘキヤ等ハ法人ノ定款又ハ寄附行爲ニ因リテ定マルモノニシテ本法ノ干涉スル所ニ非

總 則 編

サルナリ 第三十九條

又理事ノ數ハ法人ノ事業ノ性質、大小等ニ因リテ或ハ數人ヲ要シ或ハ一人ニ限ルコトアルヘシ、蓋シ理事ノ地位タル樞要ニシテ其權力亦重大ナレハ其事務ノ多端ニシテ且處理シ易カラサルヨリ相互ニ輔翼注意スルヲ必要トシ以テ數人ト爲スコアリ、又或ハ業務ノ整理統一ヲ保チ所謂舵師過多ニシテ船ヲ陸ニ乗ホスノ弊ナカシメンカ爲メ却テ一人ニ限ルヘキコアリ、故ニ是レ亦之ヲ法人ノ自由ニ一任スルナリ、然リト雖モ其理事ノ數人ナル場合ニ付キ注意スヘキハ數人ノ理事ハ一体ノ代理人タルコト是ナリ、元來一人ニシテ數個ノ總理代人アルコト得サルハ明白ノ原則ニシテ法人ト雖モ亦此原則ニ遵ハサルヲ得ス、然ルニ理事ノ代理權ハ下ノ各條ニ規定セラル、如ク總括代理タルヲ通則トス、故ニ若シ數人ノ理事カ各自ニ特立シテ其總括代理權ヲ行フコトセハ甲乙互ニ相衝突シテ固ヨリ實行シ得ヘカラサルニ因リ理事ヲ數人トセシ場合ニ於テハ其數人ヲ以テ一体ノ代理人ト看做シ、各理事ハ其全体ノ議決ニ依リテ行動スルヲ要ス、而シテ其議決ハ理事ノ過半數ノ意見ニ依ルモノナリ

總 則 編

然レモ此過半数ニ依リテ決スルハ法律ノ通則ナルヲ以テ定款又ハ寄附行為ニ別段ノ定アルハ固ヨリ其定ニ從フヲ要ス、故ニ定款又ハ寄附行為ニ於テ理事總員ノ同意ヲ要スト爲シ、又ハ各理事カ業務ヲ分擔セル或業務ニ付テハ總員ノ議決ヲ要セス各自隨意ニ處分スルヲ得ト爲セシキハ固ヨリ有效ノ規定トシテ之ニ從フ可キモノナリ

第五十三條 理事ハ總テ法人ノ事務ニ付キ法人ヲ代表ス但定款ノ規定又ハ寄附行為ノ趣

旨ニ違反スルコトヲ得ス又社團法人ニ在リテハ總會ノ決議ニ從フコトヲ要ス

理事ハ法人ノ法定代理人ナルヲ以テ完全ニ法人ヲ代表シ法人ニ屬スル權利ハ總テ之ヲ行使スルヲ得、故ニ裁判上ト裁判外トヲ問ハス即チ訴訟ヲ爲シ和解又ハ仲裁ヲ爲スカ如キ其他如何ナル重大ノ事務ト雖モ皆全權ヲ以テ之ヲ爲スヲ得、隨テ其結果ハ當然法人ニ歸シ、理事ノ行為ヨリ生スル權利ハ法人之ヲ有シ義務ハ法人之ヲ負フモノナリ

理事ハ此ノ如ク全權アルヲ法律ノ通則トスレモ定款寄附行為又ハ總會ノ決議ヲ以テ加ヘタル制限ハ理事之ニ從ハサルヲ得ス、即チ定款ノ規定又ハ寄附行為

總 則 編

總 則 編

ノ趣旨ハ法人ノ基本的規程ニシテ理事モ亦畢竟之ニ依リテ選任セラレシモノナレハ其基本的規程ニ於テ加ヘタル權利ノ制限カ理事ヲ羈束スルヤ言フ俟タサルナリ、又社團法人ニハ總會ト云ヘル最高機關アリテ總會ノ決議ハ定款ヲモ變更シ得ルモノナレハ其決議セシ制限カ同シク理事ヲ羈束スルヤ亦言フ俟タサルナリ、故ニ此等ノモノニ依リテ例ヘハ理事ハ法人ノ爲メニ訴訟ヲ提起シ、和解ヲ爲シ又ハ金圓借入ヲ爲スヲ禁セシカ如キヲアラハ理事ハ之ヲ遵守シ決シテ之ヲ爲スヲ得サルナリ

抑、本條ニ但書ノ制限即チ理事ノ代理權ニ加ヘタル制限ハ理事ニ對シテ有效タルヲ示セシモノニシテ理事ハ之ニ依リ此制限ヲ遵守スヘク、若シ此制限ヲ侵シテ或行為ヲ爲シタルハ理事ハ法人ニ對シテ其責ニ任シ、損害アルハ之ヲ賠償セサル可カラズ、夫レ此ノ如ク代理權ニ加ヘタル制限カ第三者ニ對シテ效力アリヤ否ニ至リテハ次條ヲ以テ定メタリ、諸君ハ能ク此制限カ理事ニ對スル效力ト第三者ニ對スル效力トノ關係ヲ明ニセンヲ要ス

第五十四條 理事ノ代理權ニ加ヘタル制限ハ之ヲ以テ善意ノ第三者ニ對抗スルコトヲ得

本條ハ理事ノ代理權ニ加ヘタル制限ノ第三者ニ對スル效力ヲ定メタリ
 夫レ理事ノ代理權ニ加ヘタル制限ハ第三者ニ對シテモ亦有效ナリヤ否ヤ若シ
 之ヲ有效ナリトスレハ法人ハ其制限ヲ以テ第三者ニ對抗シ理事カ制限外ノ行
 爲ヲ爲シタルキハ其制限外ナルコトヲ主張シテ法人ハ自ラ責任ヲ負フコトヲ免ル
 ヲ得ヘシ若シ又之ヲ無効ナリトスレハ如何ナル制限外ノ行爲ト雖モ法人自
 ラ其責任ヲ負ハサル可カラス本條ハ即チ此問題ヲ決シテ第三者ノ善意ト惡意
 トニ依リ之ヲ區別シ善意ノ第三者ニ對シテハ制限ハ全ク無効ナルコト爲シタ
 リ

總 則 編

「善意」トハ法學上ノ術語ニシテ普通世俗ニ用ユル所ノ善意惡意ノ語トハ少シク
 其義ヲ異ニシ單ニ或事實アルヲ知ラサリシト云フ之ヲ善意ト云ヒ本條ニ於テハ理
 事ノ代理權ニ制限アル場合ニ之ヲ知ラスシテ其制限外ノ事項ニ付キ取引ヲ爲
 セル者ヲ稱シテ善意ノ第三者ト云フ故ニ其制限アルコトヲ知ラサリシ第三者ニ
 對シテハ法人ハ其制限ヲ以テ對抗スルコトヲ得ス即チ理事ノ爲シタル制限外ノ

總 則 編

行爲ニ付テモ法人自ラ其責任ヲ負フ可キモノトス元來代理ノ原則ニ依レハ代
 理人カ其權限外ノ行爲ヲ爲シタル場合ニ於テ第三者カ其權限アリト信スヘキ
 正當ノ理由ヲ有セシキハ其第三者ニ對シテハ其行爲ニ付キ本人自ラ其責任
 スヘキモノトス本法第百十條而シテ本條ノ場合ニ於テハ理事ハ前條ニ依リ代理ノ全權
 アリテ制限ナキヲ通則トスルヲ以テ第三者カ其制限アルコトヲ知ラサリシモ亦
 之ヲ其過失トセス即チ之ヲ知ラサリシニ付キ別段ノ理由ナキモ該原則ノ所謂
 「其權限アリト信スヘキ正當ノ理由ヲ有セシキ」ト同視スヘキモノナルヲ以テ本
 條ハ恰モ該原則ノ適用トシテ善意ノ第三者ニ對シテハ制限ヲ以テ對抗スルコ
 トヲ得ス即チ制限外ノ行爲ニ付テモ本人タル法人ハ自ラ其責任ニ任セサル可カラ
 サルナリ

然レモ此場合ニ於ケル理事ト法人トノ關係ハ特別ニシテ理事ハ固ヨリ其制限
 ヲ侵シ約束ニ違背セシモノナレハ法人ハ善意ノ第三者ニ對シ其理事ノ行爲ノ
 責任ニ任スルト同時ニ理事ニ對シテハ其損害ノ賠償ヲ請求スルコトヲ得ヘク理事
 ハ不法行爲ノ原則第七百九條ニ因リ其賠償ノ責任ニ任セサルヲ得サルナリ

總 則 編

又理事カ制限ヲ侵シテ或行爲ヲ爲セシニ相手方タル第三者カ理事ノ權限外ノ行爲ナルコトヲ了知シテ取引シタルキハ法人ハ此レカ制限ヲ擧ケテ第三者ニ對抗シ其行爲ヲ無効トシテ以テ其責ヲ免ル、コトヲ得ルハ本條ノ裏面ヨリシテ明瞭ナリトス、而シテ此場合ニ於ケル理事ト第三者トノ關係ハ如何ナル結果ニ歸スルヤト云フニ其行爲ヲ爲セシ理事ハ自己ノ行爲ノ責ニ任セサル可カラサルカ如シト雖モ其行爲ハ理事ト第三者トノ間ニ於テモ亦無効タリト論決スルヲ至當トス、何トナレハ理事ハ固ヨリ自己ノ權限外ノ行爲ナルコトヲ知リ第三者モ亦理事ノ權限外ノ行爲ナルコトヲ知リ居リシモノナルヲ以テ相互ニ其履行又ハ損害賠償ヲ請求スルノ權利ヲ有ス可キノ理ナケレハナリ、代理ノ原則タル第一百七條第二項ニ前項ノ規定ハ相手方カ代理權ナキコトヲ知リタルキ……ハ之ヲ適用セス、トアルハ恰モ此場合ニ準用スルコトヲ得ヘシ、尤モ彼ハ全然代理權ナキ場合ヲ主トシテ想像シ、此ハ代理權ノ制限ヲ侵セシ場合ニ過サルモ制限以外ノコトハ無權限ノモノニシテ尙ホ代理權ナキモノト云フヲ得ヘク、彼ヲ以テ此ニ準用スルモ万妨ナカルヘキナリ

總 則 編

本條規定ノ趣旨及ヒ其各場合ニ於ケル結果ハ以上所述ノ如シ、乞フ更ニ本條立法上ノ理由ヲ釋キム

抑、立法上ニ於テ法人カ自ラ其理事ノ代理權ヲ制限シ以テ之ヲ羈束スルコトヲ許サ、ル可カラサルハ學理ニ於テ異議ヲ容レズ、隨テ各國法制ノ一致スル所ナルカ其制限ハ第三者ニ對シテ效力ヲ有セシム可キヤ否ハ學說區々ニ分レ、各國ノ法制亦同シカラス、今之ヲ大別スレハ略、左ノ三種ニ歸ス

其一ハ其制限ヲ登記セシメ第三者ニ對シ總テ之ヲ有效ナリトスルモノニテ登記ハ今日最モ普通ニシテ適當ナル公示方法ナルニ因リ此方法ヲ以テ公示セシメ、然ル後之ヲ以テ第三者ニ對抗セシムルハ理論上決シテ不可ナキモノ、如シ、然レモ少シク實際ニ就テ之ヲ觀察センニ若シ此制ニ依ルキハ其制限ヲ侵シタル行爲ハ總テ無効トシ法人ハ其責ニ任セサルノ結果ニ歸スルヲ以テ法人ト取引ヲ爲サントスル第三者ハ常ニ登記ヲ檢閲セサル可カラサルノ煩アリ、又此煩ヲ厭フテ檢閲ヲ怠レハ爲ニ意外ノ損失ヲ被フル危險アリ、故ニ此制ハ法人ノ保護ニ厚クシテ第三者ノ保護ニ薄キモノト謂ハサル可カラス

總 則 編

其二ハ其制限ハ第三者ニ對シテ絶對的ニ無効ナリトスルモノニテ取引ノ安全ヲ謀リ第三者ヲ保護スルノ利アレハ此制ニ依レハ定款寄附行爲又ハ總會決議ヲ以テ理事ノ專横ヲ制遏シ適當ニ代理權ヲ行使セシメンカ爲ニ加ヘタル制限モ單ニ法人ト理事トノ間ノ内部ノ關係ニ止マリ第三者ニ對シテ決シテ對抗ヲ得サルニ於テハ其制限ハ殆ト有名無實タル結果ニ歸シ、第三者ノ保護ニ偏重シテ法人ノ保護ニ偏輕ナル憂ヲ免レサルナリ

其三ハ前二者ノ衷ヲ執リ其制限ハ惡意者ニ對シテノミ有效ニシテ善意者ニ對シテハ無効ナリトスルモノニテ法人ノ爲ニ其制限ノ實用ヲ爲サシムルト同時ニ此ニ依テ善意者ヲ害スルコト無カラシメ、法人ト第三者トノ保護ニ於テ最モ其衡平ヲ得タルモノト謂フ可シ、本法モ亦之ヲ採用セシモノニテ余ハ其宜シキヲ得タルヲ信スルナリ

蓋シ理事ハ定款寄附行爲又ハ總會ノ決議ニ因リ選任セラル、モノニシテ其地位ハ法人ノ委任ニ基クモノト謂フ可ク、其地位既ニ法人ノ委任ニ基クモノトスレハ其權限モ亦法人ノ委任ニ基クモノニシテ法人ノ委任セシ所ノ外、權限ナキ

總 則 編

ハ理ノ當然ナリ、故ニ法人ノ理事ト取引セントスル第三者ハ先ツ其理事ノ代理權ニ制限アルヤ否ヲ探知スルヲ自然ノ順序トス是ヲ以テ其制限ヲ知リシ者ニ對シテ其制限ヲ主張シ得ヘキハ論ヲ俟タスト雖モ然レハ又一方ヨリ之ヲ觀レハ理事ノ代理權ハ完全ニシテ制限ナキヲ法律ノ通則トシ、其制限ハ唯法人、自由ニ之ヲ加フルコトヲ得ト云フニ止マル、故ニ單ニ法律ノ通則ニ依リ其制限アルコトヲ知ラサルモ亦必シモ其過失トシテ深ク咎ム可キニ非サルナリ、是ヲ以テ其制限ヲ知ラサル者ニ對シテハ其制限ヲ無効トシ之ヲ以テ對抗スルヲ許サ、ルモ亦其理ナキニ非ス、即チ本條ノ規定ハ管ニ立法上、法人ト第三者トノ保護ノ衡平ヲ保ツノミナラス法理上ニ於テモ亦決シテ不當ノ點アルヲ見サルナリ

第五十五條 理事ハ定款寄附行爲又ハ總會ノ決議ニ依リテ禁止セラレサルトキニ限り特定ノ行爲ノ代理ヲ他人ニ委任スルコトヲ得

本條ハ理事ノ復代理委任ノコトヲ定メタルモノナリ

理事ノ代理ハ總括的ノモノナレハ其業務ノ多端ニシテ複雑ナル到底理事自ラ盡ク之ヲ行フ能ハサルノミナラス其業務ノ種類ニ因リテハ或ハ特別ノ智識經

驗ヲ要シ之ヲ特種ノ者ニ委任スルヲ便益トス例ヘハ法人ノ爲ニ訴訟ヲ爲スニ
 付テハ理事自ラ其事ニ當ランヨリハ辯護士ニ委任スルヲ便益トスルカ如シ是
 故ニ一二ノ立法例ニ於テハ法人ハ理事ノ外ニ特別代理人ヲ置クコトヲ得ルモノ
 トセシカ此制タル法人ノ代表權一途ニ歸セスシテ徒ニ法律關係ノ混雜ト面倒
 トヲ惹起スルノミナラス其特別代理人ノ權限タル部分ハ恰モ理事ノ代理權ヲ
 制限シタルト同一ノ結果ニ歸シ第三者ノ爲ニ不利タルモノナルヲ以テ本法ハ
 此ノ如キ制ヲ採ラス寧ロ理事ヲシテ特定ノ行爲ノ代理ヲ他人ニ委任スルコトヲ
 得セシムルモノト爲セリ

總 則 編

理事ハ元來一ノ代理人ニシテ代理人カ更ニ其代理ヲ他人ニ委任スル之ヲ復代
 理ト云フ代理ノ總則ニ依レハ委任ニ因ル代理人ハ復代理人ヲ選任スルコトヲ得
 サルヲ原則第四百條トスレモ法定代理人ハ之ニ反シテ其委任ヲ以テ復代理人ヲ選
 任スルコトヲ得ルヲ原則トス第六條而シテ理事ハ法人ノ法定代理人タル者ナレハ本
 條ノ規定ナキモ右原則ニ依リテ當然復代理人ヲ選任スルコトヲ得ヘシ然レモ普
 通ノ法定代理人ハ委任事件ノ全部又ハ一分ヲ復代理人ニ委任スルコトヲ得ルモ

總 則 編

ノナルニ理事ハ之ニ異ナリテ委任事件ノ全部ヲ復代理人ニ委任スルコトヲ得ス、
 唯特定ノ行爲ニ付テノミ其代理ヲ委任シ得ヘキノミ是レ代理ノ原則ト異ナリ
 テ本條ノ規定ヲ要スル所以ナリ夫且レ普通ノ法定代理人ハ復代理人ノ選任ヲ
 禁止セラル、コト無キモ理事ハ定款寄附行爲又ハ總會ノ決議ニ因リ禁止ヲ受ク
 ルコトアリ其禁止ヲ受ケシキハ如何ナル事情アルモ固ヨリ復代理人ヲ選任スル
 コトヲ得ス是レ亦本條ノ代理ノ原則ト異ナル所ナリ
 然リ而シテ理事ハ復代理人ノ行爲ニ付キ其責ニ任スルヲ通則トス然レモ若シ已
 ヲ得サル事由ニ因リテ復代理人ヲ選任シタルハ於テハ理事ハ單ニ復代理人
 ノ選任及ヒ監督ニ付キテノミ法人ニ對シテ其責ニ任スルモノトス第四百六條及ヒ
 第四百五條參看
 其他復代理人選任ノ場合ニ於ケル法人ト理事トノ關係理事ト復代理人トノ關
 係及ヒ復代理人ト法人トノ關係ニ付テハ總テ代理ノ總則第四百四條及
 第四百七條ニ從ヒテ決
 定ス可キモノナレハ茲ニ之ヲ略ス

第五十六條 理事ノ欲ケタル場合ニ於テ遲滯ノ爲メ損害ヲ生スル虞アルトキハ裁判所ハ利

害關係人又ハ檢事ノ請求ニ因リ假理事ヲ選任ス

總 則 編

本條ハ假理事ノ選任ノコトヲ定メタルモノナリ
理事ノ死亡、辭任又ハ解任等ノ原因ヨリシテ理事中ニ缺員ヲ生シ又ハ理事全ク
缺亡シタルハ定款又ハ寄附行為ニ因リテ定メタル方法ニ從ヒ復之ヲ選任セ
サル可カラス、然レモ之ヲ選任スルニハ多少ノ時日ヲ要シ、而シテ法人ノ活動ハ
日モ停止ス可カラス、否ラサレハ種々ノ損害ノ生スルコトアルハ勿論、甚シキハ法
律ノ制裁ヲ受クルコトアリ其例タル枚舉ニ遑アラス、然ルニ理事ニ缺亡アリテ其
業務ヲ施行スル能ハサルハ別ニ此急ニ應スルノ便法ヲ設クルニ非サレハ法
人又ハ他人ハ坐シテ其損害又ハ制裁ノ至ルヲ待タサル可カラス、是レ本條カ假
理事ト云ヘル一便法ヲ設ケシ所以ナリ

假理事ハ利害關係人又ハ檢事ヨリ之ヲ請求シテ裁判所之ヲ選任スルモノトス
而シテ名ハ假理事ト云フモ其權限及ヒ責任ハ通常ノ理事ト異ナル所ナシ、其之ヲ
假理事ト云フハ前理事ト新理事トノ空位ヲ補フ假攝ノモノタルニ因ルノミ、故
ニ法人ニ在リテハ此假理事ノ選任アリシニ拘ハラス尙ホ其定款又ハ寄附行為
ニ因リ一定ノ方法ヲ踐行シテ理事ヲ選任スルヲ要ス、而シテ理事既ニ定マリ其任

ニ上ホリシハ之ト同時ニ假理事ハ當然其任ヲ解カル、モノナリ

假理事ノ選任ハ登記ヲ要ス、其詳細ハ次條ニ之ヲ論述セム

第五十七條 法人ト理事トノ利益相反スル事項ニ付テハ理事ハ代理權ヲ有セス此場合ニ

於テハ前條ノ規定ニ依リテ特別代理人ヲ選任スルコトヲ要ス

總 則 編

本條ハ特別代理人選任ノコトヲ定メタルモノナリ

法人ト理事トノ間ニハ利益ノ相反スルコト無シトセス、即チ理事ハ法人ノ理事ト
シテ法人ヲ代表シ其利益ヲ保全スルト同時ニ理事自己ノ資格ニ於テ亦其利益
ヲ保全スルノ必要アリ、其利益ノ相抵觸シテ兩立ス可カラサルコト無シトセス、例
ヘハ法人ト理事其人トノ間ニ一ノ賣買ヲ爲サントスルハ如キ買主ハ其代價
ノ低廉ナルヲ利益トシ賣主ハ其代價ノ高貴ナルヲ利益トスルヲ以テ雙方ノ利
益ハ全ク相背馳セリ、又理事カ其權限ヲ侵シテ爲シタル行為其他故意又ハ過失
ニ因リ法人ニ與ヘタル損害ニ付キ法人ヨリ其賠償ヲ理事ニ請求スルハ如キ
雙方ノ利益ノ相反スル亦言フ俟タス、這般ノ場合ニ於テ理事タル者一方ニハ法
人ノ代表者トシテ其利益ヲ保全シ之ト同時ニ他ノ一方ニハ自己一身ノ爲ニ其

別益ヲ保全セントスルハ理事ノ能クス可キ所ニ非ス、若シ理事ニシテ廉潔至正ノ人ニ非サレハ其職權ヲ濫用シテ自己ノ利益ヲ謀リ法人ノ利益ヲ犧牲ニ供シテ顧ミサルニ至ラン、法人ノ爲メ不利タルヤ知ル可キノミ、又若シ理事ニシテ廉潔至正ノ人タリトセハ深ク其嫌疑ヲ恐レ自己ノ正當ナル利益ヲモ割キテ之ヲ法人ニ供スルニ至リ理事其人ノ爲ニモ亦極メテ不利タルヘシ、於是乎本條ハ此利益相反スル事項ニ付テハ理事ハ其代理權ヲ有セサルコトシ特別代理人ヲ選任シテ以テ其事ニ當ラシムルノ法ヲ採リ、而シテ其選任ハ前條ノ規定ニ依ルコト爲シタリ

是故ニ或事項ニ付キ法人ト理事トノ利益相反スルモノト思惟スルヤ利害關係人又ハ檢事ハ裁判所ニ請求シ裁判所ハ其事項ノミニ付キ法人ヲ代理スル特別代理人ヲ選任スヘキモノナリ

特別代理人ハ其事項ノミニ付キ普通ノ理事ト同一ノ權限及ヒ責任ヲ以テ之ヲ處理スルコトヲ得ヘシ、而シテ其事項既ニ全ク終局スレハ其特別代理人タル任ハ當然解除ニ歸ス、是レ別段ノ法文ナシト雖モ理、固ヨリ然ラサルヲ得サレハナリ

總 則 編

總 則 編

說者或ハ曰ク第五十五條ノ復代理人、前條ノ假理事及ヒ本條ノ特別代理人ニ付テハ其理事タル性質ニ屬スルノ故ヲ以テ第四十六條ノ登記ヲ要シ、之ヲ怠レハ第八十四條ノ制裁ヲ免レスト、然リ前條ノ假理事ニ付テハ實ニ登記ヲ要ス可シ、然レモ二種ノ代理人復代理人、特ニ至リテハ決シテ之ヲ要スルモノニ非ス、蓋シ此二種ノ代理人カ理事タルノ性質ヲ帶フルハ固ヨリ然ルモ此レカ爲ニ直チニ之ヲ理事ト同視シ第四十六條第一項第八號ノ「理事」ト云ヘルニ包含スト爲スハ大早計ト云ハサル可カラス、此等ノ者ハ其性質一時ノモノタルノミナラス特定ノ行爲又ハ事項ニ限ルモノニシテ其相手方モ亦特定ノ人タルヲ以テ特ニ其通知ヲ爲スコトヲ得ヘク敢テ登記ノ必要ヲ見サルナリ、獨リ理事ニ至リテハ其一時ノモノタルハ他ノ代理人ト異ナラサルモ彼等ノ如ク特定ノ行爲、又ハ事項ニ限ルニ非ス全ク理事ノ地位ニ立チ全ク理事タルノ職權ト責任トヲ有シ汎ク何人ニ對シテモ其事ヲ執ルト雖モ彼ノ復代理人ノ如キ其行爲ノ責任スラ理事ニ歸スル者トハ同視スルヲ得ス、是故ニ假理事ノミハ該號ノ所謂「理事」ニ該當スルモノトシ一週間内ニ登記ヲ爲スコトヲ要スルモ復代理人及ヒ特別代理人ハ決シテ

之ヲ要セサルヤ復疑ヲ容レサルナリ

第五十八條 法人ニハ定款、寄附行爲又ハ總會ノ決議ヲ以テ一人又ハ數人ノ監事ヲ置タ
コトヲ得

本條ハ法人ノ業務監督機關ヲ定メタルモノナリ

夫レ理事ノ權限ハ已ニ觀タル如ク完全ニ代理權ヲ有スルモノニシテ何等ノ制
限ナキヲ通則トシ縱令制限アリトスルモ其權限尙ホ廣濶ニシテ專恣ノ行爲ナ
キ能ハス、且制限ヲ侵スモ善意ノ第三者ニ對シテハ制限ノ效モ無キモノナリ、然
ルニ此理事ヲ委任セシ法人ハ固ヨリ意思ヲ有セサレハ自ラ理事ノ行爲ヲ監督
スルニ由ナシ、社團法人ニ於テハ社員ナルモノアルモ個々ノ社員ハ自ラ監督ノ
行爲ヲ爲スノ權利ナキノミナラス縱令之ニ其權利ヲ與フルモ其社員ノ多數ナ
ル或ハ互ニ相推諉シテ他ノ社員ノ實行ニ委セントシテ遂ニ監督ノ實ヲ擧ケサ
ルコトアリ、或ハ各自盡ク監督ヲ實行セントシ徒ラニ煩雜混亂ヲ來シテ監督ノ實
ヲ擧クルヲ得サルコトアリ、殊ニ營利ヲ目的トセサル社團法人ニ至リテハ社員ハ
理事ヲ信任シテ其監督ヲ怠ルヲ常トシ、又財團法人ノ如キハ其業務ノ施行ヲ監

總 則 編

總 則 編

督スル者ノ全ク無キコトモ尠カラス、果シテ然ラハ理事ノ專恣ハ制止スル所ナク
法人ハ爲ニ損害ヲ被フリ甚シキハ其存立ヲ危クシ更ニ公益ヲ害スルノ大ナル
ニ至ラントス、故ニ法人ニハ其業務監督ノ機關ヲ置キ以テ理事ト併立セシムル
コトヲ認許シ、而シテ本法ハ其機關ヲ稱シテ監事ト云フ

然レモ法人ノ組織甚タ小ナルモノ又ハ其業務ノ甚タ單純ナルモノ等ニ在リテ
ハ必シモ此等ノ機關ヲ特設スルノ要ナキヲ以テ本法ハ理事ノ如ク之ヲ置クコ
トヲ法人ニ命令セシテ之ヲ置クト否トヲ其自由ニ一任セリ、故ニ法人ハ自ラ之
ヲ必要トスレハ則チ其定款寄附行爲又ハ總會ノ決議ヲ以テ之ヲ置クヘク、隨テ
其員數ヲ一人トシ又ハ數人トスルコトハ勿論、其選任及ヒ解任ノ方法、任期等總テ
定款等ヲ以テ之ヲ定ムヘキモノトス

監事トハ法律ノ便宜上、單ニ設ケシ名稱ニシテ法人ハ必シモ其監督機關ヲ監事
ト稱スルヲ要セス、商法ニ所謂監查役ノ如キ即チ此監事ニ該當スルモノニシテ
法人カ此ニ依テ其役員ニ監查役又ハ其他ノ名稱ヲ附スルモ苟モ監事タル性質
ナルニ於テハ即チ本條以下本法ノ監事ニ於ケル規定ニ遵依スヘキナリ

本法カ此ノ如ク監事ヲ置クト否トヲ法人ノ自由ニ一任セシニ拘ハラステニ本條ヲ以テ之ヲ置クコトヲ得ト云フハ寧ロ蛇足ノ看ナキニ非ス然レモ是レ決シテ無用ノ長文ニ非ス法律上之ヲ認許シテ以テ之ヲ私設ノ役員トセス之ニ法律上ノ位置ヲ與ヘ且次條ヲ以テ其權力ヲ明示シ以テ法定代理人タル理事ト權衡ヲ得其職務ヲ監督スルニ便ナラシムルモノナリ

第五十九條 監事ノ職務左ノ如シ

- 一 法人ノ財産ノ狀況ヲ監査スルコト
 - 二 理事ノ業務執行ノ狀況ヲ監査スルコト
 - 三 財産ノ狀況又ハ業務ノ執行ニ付キ不整ノ廉アルコトヲ發見シタルトキハ之ヲ總會又ハ主務官廳ニ報告スルコト
 - 四 前號ノ報告ヲ爲ス爲メ必要アルトキハ總會ヲ招集スルコト
- 監事バ自ラ法人ノ業務ヲ施行スルモノニ非ス唯法人ノ爲メニ監督ヲ爲スノミ故ニ監事ノ職務ハ理事ノ如ク廣汎無限ナルモノニ非スシテ其監督機關タル性質ニ應スル本條列記ノ四件ニ限定セラル、モノトス、左ニ之ヲ分説セム

總 則 編

第一、財産ノ監査 即チ現在ノ貨幣ヲ首トシ有体無体ノ動産、不動産ノ有無、多少及ヒ形狀等ヲ監査スルモノニテ監査トハ監視検査ヲ爲スヲ謂ヒ、單ニ其實況ノ如何、即チ不整ノ廉アルヤ否ヲ見ルニ止マル

第二、業務ノ監査 即チ理事カ業務ヲ執行スル狀況ヲ監査スルモノニテ監査ノ意義亦前ノ如シ

第三、報告 前二號ニ依リ財産ノ狀況又ハ理事ノ業務執行ノ狀況ヲ監査シテ不整ノ廉アルコトヲ發見シタルキハ此ニ依リテ自ラ其不整ノ廉ヲ整理スルヲ得ス單ニ之ヲ總會又ハ主務官廳ニ報告スヘキモノトス、蓋シ社團法人ニ在リテハ必ス總會アリテ其法人ノ最高機關タルヲ以テ其不整ノ廉ニ付テハ之ヲ整理シ處分スルノ議決ヲ爲スヘク、又主務官廳ハ社團法人ト財團法人トヲ問ハス其最高監督府トシテ禁止又ハ命令ヲ爲スヘク、監事ハ之ニ其不整ノ廉ヲ報告スレハ則チ足ルナリ

第四、總會ノ招集 監事ハ總會ニ報告ヲ爲スノ義務アルモ總會ハ常設ノモノニ非サルヲ以テ若シ在再其開會ヲ待タサル可カラストモハ報告ハ甚シク遅延

總 則 編

總 則 編

シ遂ニ其時機ヲ失シテ法人ノ損害得テ恢復ス可カラサルニ至ラン故ニ若シ緊急報告ヲ爲スノ必要アル場合ニ於テハ監事自ラ臨事ニ總會ヲ招集スルヲ得ルコト爲シ以テ其報告ノ義務ヲ全フセシメサル可カラス

監事ノ職務ハ右四種ニ止マリ其他ニ何事ヲモ爲ス能ハス故ニ第一號第二號ニ依リテ財産又ハ業務ノ狀況ニ付キ不整ノ廉ナキヤ否ヲ監査シ若シ不整ノ廉アルコトヲ發見シタルハ第三號ニ依リ總會若クハ主務官廳ニ報告シ又ハ第四號ニ依リテ特ニ總會ヲ招集シ之ヲ報告スルニ止マル即チ監事ハ消極的ニ不整ノ廉ヲ報告スルノミニシテ積極的ニ其不整ノ廉ニ付キ自ラ進ンテ或禁止ヲ下シ又ハ或處分ヲ爲スカ如キコトヲ得ス若シ夫レ然ラスンハ監事ハ理事ノ職務ヲ侵シ職權ヲ奪フモノニシテ法人ノ組織ヲ紊亂スルニ至ラン是レ監事ノ職務ヲ限定シテ理事トノ分界ヲ明ニシ互ニ相牴觸スル無カラシムル所以ナリ

然レモ亦監事ハ右四種ノ職務ヲ行フカ爲ニ必要ナル職權ハ當然之ヲ有セサル可カラス故ニ監事ハ商法第九十三條ニ於ケルカ如ク何時ニテモ法人ノ業務ノ實況ヲ尋問シ法人ノ帳簿及ヒ其他ノ書類即チ計算書財産目錄貸借對照表事

總 則 編

業報告書等ヲ展閱シ法人ノ金匱及ヒ其全財産ノ現況ヲ検査スルノ權利アルハ本法ニ明文ナシト雖モ亦固ヨリ然ラサルヲ得サルナリ

又監事カ數人アル場合ニ於テ此報告ヲ爲スニ其意見ノ分レタルハ如何スヘキヤ我商法^{第九十四條}ニ於テハ各自ニ其意見ヲ總會ニ提出スヘシト爲セシカ本法ニハ何等ノ明文ナシ是レ之ヲ定款又ハ寄附行爲ニ一任セシモノニテ法人ハ其定款又ハ寄附行爲ヲ以テ或ハ總員一致ノ意見ノミニ依ルコトシ或ハ多數決ニ依ルコトシ又或ハ各自ノ意見ヲ提出スルコトスルヲ定ムヘシ然レモ若シ其定ナキハ如何此場合ハ毫モ準依スヘキノ規定ナケレハ事理ノ自然ニ依リ各自ノ意見ヲ提出セサル可カラス是レ多數決又ハ總員一致ノモノニ限ルト云フハ法令其他ノ規定ノ効力ニ依リテ始テ然ルモノニ過サレハナリ且夫レ實際ノ利害ヨリ之ヲ觀ルモ總員ノ一致ヲ可トスルハ言フ俟タスト雖モ是レ唯望ム可クシテ常ニ行ハルハモノニ非ス又多數決ニ依リ其決議ノミヲ提出スルコトセンカ事實ノ發顯ヲ妨クルノ弊ヲ生シ且其意見ノ正當ニシテ價值アルモノモ徒ニ消滅ニ歸シ總會又ハ主務官廳ヲシテ遂ニ之ヲ知ルノ機ヲ得セシメサルニ至ラ

ン、殊ニ最後ノ決定ヲ爲ス總會ニ於テハ固ヨリ多數決ニ從フノ已ヲ得サルアリト雖モ監事ノ意見ノ如キ單ニ官廳又ハ總會ニ示シテ其決定ノ材料ト爲スニ過サルモノハ可成多數決ノ方法ヲ避クルヲ可トス

總 則 編

其他監事ニ關スル問題甚タ尠カラズ然ルニ本法ノ規定ハ僅ニ前條ト本條トノ二條ニ止マリ事ニ臨ミテ殆ト望洋ノ嘆ナキ能ハス然レモ是レ本法カ務メテ大綱ヲ綜ヘ其細目ハ之ヲ商法其他ノ特別法令及ヒ法人ノ定款寄附行爲又ハ總會ノ決議等ニ委セシモノナレハ此等ニ依リテ其諸問題ヲ決セル可カラス唯監事ノ責任ニ關スル一問ニ至リテハ茲ニ法律上ヨリ之ヲ論斷スルコトヲ得ヘシ抑、監事カ財產又ハ業務ノ監査ヲ爲シテ其不整ノ廉アリシニ拘ハラズ故意又ハ過失ニ因リテ之ヲ報告セシテ爲ニ法人又ハ法人ノ債權者等ニ損害ヲ與フレハ之ニ付キ賠償ノ責ニ任セサルヲ得ス第七百九條然ルニ若シ監事數人アレハ其數人ハ連帶シテ此責ニ任ス可キヤ否ヤ此問題ニ付テハ商法ニ於ケル其監査役ニ關シテ正反對ノ二説アリ某氏ハ消極說ヲ執リ各自ノ責任ニシテ決シテ連帶ニ非スト云ヒ某氏ハ積極說ヲ執リテ必ス連帶ナリト云フ余ハ其孰レニモ服セス

總 則 編

唯其場合ニ因リテ或ハ一人一己ノ責任トシ或ハ連帶ノ責任トス可シト論斷シタリキ今ヤ本法ノ監事ニ付テハ余ハ益余ノ論斷ノ本法ニ付テ一層明確ナルヲ信ス蓋シ本法ニ於テ數人カ故意又ハ過失ニ因リテ他人ヲ害シタル場合ノ責任ヲ定メシハ唯第七百十九條アルノミ該條ニ依レハ其共同ノ行爲ニ因ルモノハ各自連帶シテ其賠償ノ責ニ任スルモノトシ且教唆者及ヒ幫助者モ亦之ヲ共同行爲者ト做シタリ故ニ數人ノ監事ニシテ果シテ該條ニ所謂共同行爲者タルハ當然連帶タリ否サルハ之ニ反スト云フニ止マリ理論上ニ於テハ其論斷甚タ容易ニシテ唯實際上數人ノ監事カ共同行爲者ト看做スヘキヤ否ヲ判定スルコト寧ロ困難ナルコトアルヘキノミ余カ既ニ商法ニ於テ論セシ如ク監事ノ職務ハ常ニ必シモ一人一己ニテ之ヲ施行スルモノニ非ス或ハ共同シテ之ヲ施行スルコトアレハ其場合ニハ責任モ亦連帶ナラサル可カラス例ヘハ三人共同シテ或業務ノ執行ヲ監査シタルニ三人共ニ不整ノ廉アルヲ發見シ而シテ之ヲ報告セザリシハノ如キ即チ是ナリ然レモ亦之ニ反シテ監事カ個々獨立ニテ其職務ヲ行ヒシハ其責任モ亦個々各別ナラサル可カラス例ヘハ各監事其職務ヲ分擔シタ

ル片、即チ甲ハ計算書等ヲ監査シ、乙ハ事務報告書ヲ監査シ、丙ハ何案ヲ監査シタルニ、計算書中ニ一大不整ノ廉アリシヲ發見スル能ハス、若クハ發見セシモ故ラニ報告セザリシキノ如キ、其責任ハ獨リ甲ニ歸スルノミニシテ乙、丙ノ二人ハ之ヲ負擔スルノ理アラス、乙、丙ノ場合モ亦然リ、其責任ノ連帶ナルト否トハ實際ノ情況ニ因リ第七百十九條ニ照シテ之ヲ論斷ス可キナリ

第六十條 社團法人ノ理事ハ少クトモ毎年一回社員ノ通常總會ヲ開クコトヲ要ス

總會ニハ通常總會、臨時總會ノ二種アリ、本法中單ニ總會ト稱スルモノハ此二種ヲ併稱ス、而シテ前者ニ付テハ本條之ヲ定メ、後者ハ次條之ヲ定ム

抑、總會ハ社員ノ集合ニ因リテ成立シ、其集合体ハ即チ總會トシテ無上ノ權力ヲ有スト、雖モ、其一分子タル社員個々ニ於テハ何等ノ權力ヲ有セス、蓋シ然ルノミナラス、自ラ總會ヲ組成スルノ權利ヲモ有セス、必ヤ招集ノ權アル者ヨリ適法ニ招集スルコトヲ要シ之ヲ待テ始テ成立ス、而シテ通常總會ヲ招集スルノ權アル者ハ獨リ理事ノミ、理事ハ少クモ毎年一回必ス之ヲ招集セサル可カラス、蓋シ通常總會ハ其一期間ニ於ケル業務ノ成績及ヒ計算ノ報告ヲ爲スモノニシ

總 則 編

テ定期ニ之ヲ開キ且普通ノ議事ヲ爲スモノナレハ之ヲ通常總會ト稱ス、而シテ其所謂定期トシテハ本條ニ依リ一年間ニ少クモ一回必ス開會セサル可カラス、其以上ノ回数ニ至リテハ事業ノ性質、業務ノ都合等ニ因リ定款ヲ以テ隨意ニ之ヲ定ムヘキモノナレハ法人ノ業務及ヒ其計算等ハ一事業年度毎ニ一通リ完結スルヲ通例トス、而シテ其一年一回トシタルハ最少限ヲ定メシモノナルヲ以テ定款モ決シテ之ヨリ減少スルコトヲ得ス、之ヲ増加シテ二回若クハ數回ト爲スハ固ヨリ隨意ナリ、又開會ノ時期ノ如キモ通例事業年度ノ終ニ於テスルモ之ヲ定ムルハ亦法人ノ隨意タルナリ

通常總會ノ何事ヲ爲スヤハ本法一モ之ヲ規定セス、是レ現今社會ノ實狀ニ於テ通常總會ノ性質既ニ明瞭ナルヲ以テ特ニ規定スルノ要ナシト爲シタルナリ、試ミニ之ヲ略述スレハ實際上全ク商法第二百條ニ於ケルト同シク理事先ツ計算書、財産目錄、事業報告書等必要ノ書類ヲ監事ニ回付シテ其監査ヲ受ケ、然ル後之ヲ總會ニ提出シテ社員ニ示シ其議決ヲ求ム可キナリ、監査役ノ報告書ハ理事ノ提出スル書類ト共ニ提出セラル、モノニシテ社員ハ之ヲ參照シテ認可若クハ

不認可ノ議決ヲ爲スモノナリ

二九八

第六十一條 社團法人ノ理事ハ必要アリト認ムルトキハ何時ニテモ臨時總會ヲ招集スルコトヲ得

總社員ノ五分ノ一以上ヨリ會議ノ目的タル事項ヲ示シテ請求ヲ爲シタルトキハ理事ハ臨時總會ヲ招集スルコトヲ要ス但此定數ハ定款ヲ以テ之ヲ増減スルコトヲ得

通常總會ハ定期ニ之ヲ開クモノナルニ法人ノ活動ハ一日モ止息セサルヲ以テ其開期以外ニ於テ臨時ニ議決ヲ要スヘキ事項ヲ生シ爲ニ總會ヲ開クヲ要スルコトアリ例ヘハ或事業ヲ起シ若クハ廢止シ又ハ或變更ヲ爲サントスルノ必要ニ迫リ袖手シテ次期ノ通常總會ヲ待ツニ於テハ徒ニ時機ヲ失シテ至大ノ損害ヲ受ケ又ハ利益ヲ失フヘキ場合ノ如キ理事ハ何時ニテモ隨時ニ總會ヲ招集スルコトヲ得ルナリ

又總會ハ法人ノ事務ヲ議定スル最高機關ニシテ理事ト雖モ亦其決議ニ羈束セラル、モノナレハ其招集ヲ理事ノ隨意ニ一任シテ他ニ之ヲ促カスノ手段ナクシハ總會カ最高機關トシテ理事ヲ監督スルノ實モ亦之ヲ舉クルコトヲ得サルニ

總 則 編

總 則 編

了ラン、故ニ本條ハ社員モ亦總社員ノ五分ノ一以上ノ連合ヲ以テシ且會議ノ目的タル事項ヲ示スニ於テハ臨時總會ノ開會ヲ請求スルノ權アルコトシ、此請求アレバ理事ハ其請求可トシ否トスルニ拘ハラズ義務トシテ之ニ從ヒ以テ總會ヲ招集セサル可カラス、蓋シ社員ハ法人ノ利害ニ因リテ直接ニ利害ヲ感スルモノナルニ若シ自ラ開會ヲ請求スルコトヲ得ストセハ法人ノ爲ニ臨時緊急ノ必要アリト信スルモ理事ノ同意ヲ得ルニ非サレハ總會ヲ開ク能ハスシテ遂ニ損害ヲ免レサルコトアリ、殊ニ理事ノ利益ニ反對スル場合例ヘハ理事ニ不法不當ノ行爲アル爲メ其任ヲ解キ又ハ之ニ對シテ損害賠償ヲ請求セントスルモノ如キ到底理事ノ同意ヲ得ル能ハス、益、理事ノ專横ヲ坐視シテ次期ノ通常總會ヲ待ツヲ要シ其間ニ於テ法人ノ損害ハ益、加ハリ理事ノ不法行爲ノ證據ハ日ニ湮滅スルカ如キト無シトセス、是レ社員ニ此請求ノ權ヲ與ヘ理事ニ招集ノ義務ヲ命シタル所以ナリ

然レモ若シ社員各個ニ此請求ノ權アリトセハ各社員ハ各自任意ニ此請求ヲ爲シ頻々總會ヲ開カサル可カラスシテ法人ノ業務ハ却テ爲ニ沮却セラル、ニ至

總

則

編

ラン、故ニ本條ハ之ヲ總社員五分ノ一以上ノ連合ニ限ルコト爲セリ、然リト雖モ此定數ハ唯法律ノ通則タルニ止マリ各法人ハ定款ヲ以テ之ヲ増減スルコトヲ得ヘシ、故ニ社團ノ種類、事業ノ性質又ハ社員ノ多寡等ニ依リテ或ハ之ヲ多クシ或ハ之ヲ少クスルハ其自由ニシテ而シテ定款ニ何等ノ定數ヲ定メサリシキハ則チ本條ニ從フモノナリ

又社員カ此請求ヲ爲スニ會議ノ目的タル事項ヲ示スコトヲ一要件トセシハ別ニ理由アルニ非ス、唯次條ニ依リ總會ヲ招集スルニハ豫メ其事項ヲ各社員ニ示スノ必要アリテ此レカ必要ニ供セシメントスルニ外ナラス

社員ハ此ノ如ク定數ト事項指示トノ二要件ヲ具備スレハ則チ總會請求ノ權アルモ此レカ爲メ社員ニ臨時總會招集ノ權アリト爲スハ亦速了ノ見タルヲ免レス、即チ社員ハ單ニ之ヲ理事ニ請求スルノ權アリ、理事ハ必ス之ニ應スルノ義務アリト云フニ止マリ、社員ノ權利ハ間接ニシテ直接ニ招集ノ權利アルモノハ尙ホ理事ナリトス、而シテ監事ハ第五十九條第四號ニ依リ直接ニ自ラ之ヲ招集スルノ權アリ、清算人モ亦第七十八條第二項ニ依リテ總會ヲ招集スルコトアルヤ知ル

可シ

總 則 編

爰ニ注意ス可キハ理事カ社員ノ請求アルニ拘ハラヌ招集ヲ爲サ、ル場合はナリ、蓋シ社員カ本條ノ要件ヲ具備シテ請求ヲ爲セシキハ理事ハ固ヨリ之ヲ否拒スル能ハサルモ其己レニ不利ナルニ於テハ或ハ事ニ托シ言ヲ左右ニシテ荏苒時ヲ移シ容易ニ招集ノ手續ヲ爲サス遂ニ時機ヲ失セシムルコト無シトセス、此場合ハ理事ニ對シテハ其遲延ヨリ生スル損害ヲ賠償セシムルノ外、別段ノ制裁アルコト無シ、而シテ社員ハ唯監事ヲシテ第五十九條第四號ニ依リテ招集ヲ爲サシムル歟否ラサレハ主務官廳ニ申請シ第六十七條ニ依リテ相當ノ處置ヲ求ムルノ外ナシ、此等ノ場合ト雖モ尙ホ自ラ集合シテ總會ヲ組成スルノ權ナク、隨テ又其理事ヲ更任セシムルニ由ナシ、前述損害賠償ノ請求ノ如キ亦總會成立ノ上ニ於テ第五十七條ニ依リ特別代理人ヲ選任シ以テ之ヲ實行セシム可キノミ

第六十二條 總會ノ招集ハ少クトモ五日前ニ其會議ノ目的タル事項ヲ示シ定款ニ定メタル方法ニ從ヒテ之ヲ爲スコトヲ要ス

通常總會ト臨時總會トヲ問ハス凡シ總會ヲ招集セントスルニハ其理事タリ監

事タルニ論テ本條ノ規定ニ從ヒ少クモ開會ノ日ヨリ五日以前ニ招集ノ通知ヲ爲シ且會議ノ目的タル事項ヲ示サ、ル可カラス

抑、此規定タル各國ノ法律大抵皆然ル所ニシテ此ノ如ク豫メ其期日ヲ知ラシム

ルニ於テハ各社員ハ假令自己一身ノ用務アルモ前後ノ差繰ヲ爲シテ容易ニ出

席スルヲ得ヘク、又豫メ會議ノ目的タル事項ヲ知ラシメ且其期日マテニ五日ノ

日子ヲ與フルニ於テハ其事項ヲ調査シ考慮スルノ時間アルヲ以テ議事モ亦疎

漏杜撰ニ渉ルノ弊ヲ免レ完全ノ決議ヲ得ルニ庶幾カルヘシ、而シテ此豫メ會議ノ

目的タル事項ヲ示スコトハ社員カ其事項ノ如何ニ因リテ他ノ要事ヲ措キテモ會

議ニ出席スヘキヤ否ヲ決スル爲ニモ亦甚タ必要タルモノナリ第六十四條參看

然ルニ總會ヲ招集スル者カ本條ノ規則ニ背キ、或ハ五日ノ時間ヲ置カスシテ開

會シ、或ハ通知スヘキ會議ノ目的タル事項ヲ通知セス、又或ハ定款ニ定メタル通

知方法ニ依ラスシテ通知シタル等ノ場合ニ於テハ如何ト云フニ此場合ハ各社

員ハ固ヨリ異議ヲ申立ツルコトヲ得ヘシ、然レモ若シ異議ヲ留メスレテ決議ヲ爲

シタルハ最早其決議ヲ無効ト爲スヲ得ス、何トナレハ各社員ハ本條ニ依リテ

總 則 編

得タル權利ヲ自ラ拋棄シタルモノナレハナリ

第六十三條 社團法人ノ事務ハ定款ヲ以テ理事其他ノ役員ニ委任シタルモノヲ除ク外總

テ總會ノ決議ニ依リテ之ヲ行フ

總會ハ既ニ屢述ヘシ如ク社團法人ニ於ケル最高ノ機關ニシテ社員合同ノ意思

タルモノナレハ何事モ爲シ得サル所ナク、社團法人ニ於ケル一切ノ事務ハ皆此

意思即チ總會ノ決議ニ依リテ之ヲ行フ可キヲ原則トス、然レモ亦定款ハ社團ス

人ノ依テ以テ存立スル基本的規定ニシテ總會モ亦此規定ニ依リテ始テ成立法

ルモノナレハ總會ノ權限ハ定款ノ規定ニ因リテ限局セラレ、ヤ知ル可キノミ、

或ハ日ク定款ハ總會ノ決議ニ成ルモノニシテ且總會ハ何時ニテモ其變更ヲ爲

シ得ルモノナレハ總會ハ固ヨリ定款ノ上ニ在リ、然ルニ總會カ定款ニ羈束セラ

ルト云フハ冠履顛倒ノ太甚シキモノニ非サヤト、夫レ然リ豈夫レ然ランヤ總會

ハ實ニ定款ヲ議定ス、然レモ既ニ之ヲ議定シタル以上ハ必ス之ニ服從セサルヲ

得ス、又總會ハ定款ヲ變更スルノ權カアリ、然レモ未タ之ヲ變更セサル以前ニ於

テハ之ニ異ナル議決ヲ爲スコトヲ得ス、恰モ國家カ自ラ憲法ヲ議定シ變更スルノ

總 則 編

權力アルモ既ニ之ヲ議定スレハ變更ノ手續ヲ踐行セサル間ハ必ス憲法ノ規定ニ服從セサル可カラサルカ如シ總會ノ定款ニ羈束セラルヘキハ亦甚タ明瞭ナリトス

總 則 編

本條ハ能ク此定款ト總會トノ實際上ノ關係ヲ明ニセルモノニシテ定款ヲ以テ理事其他ノ役員ニ委任シタルモノヲ除ク外總テ社團法人ノ事務ハ總會ノ決議ニ依リテ之ヲ行フヘキモノトセリ元來定款ハ一定不變ノ性質ニシテ之ヲ變更スルハ固ヨリ難カラサルモ要スルニ朝暮ニ活動スルモノニ非ス然ルニ法人ノ事務ハ其業務ノ狀況ト社會ノ形勢トニ依リ常ニ變轉移動ヲ要スルヲ以テ定款ハ到底万般ノ事務ニ關シテ豫定スル所アルヲ得ス乃チ定款ハ極メテ大綱ヲ統フルニ止マリ其事務ハ一半ハ之ヲ理事其他ノ役員ニ委任シ一半ハ之ヲ總會ニ議決セシム故ニ總會ハ法人ニ於ケル最高機關タルニ拘ハラズ定款ニ服從シテ其理事其他ノ役員ニ委任シタル事務ハ總會ノ決議ヲ以テ決シテ之ヲ變更スルコトヲ得ス若シ之ヲ變更セント欲セハ先ツ定款變更ノ決議ヲ爲シ此ニ依テ之ヲ變更スルコトヲ得ルノミ是ヲ以テ總會ハ自ラ理事其他ノ役員ヲ任免スルヲ得ル

總 則 編

モ其理事等ノ委任セラレタル事務ハ安リニ之ヲ變更スルコトヲ得ス唯其委任事項以外ノ事ニ付テノミ何等ノ羈束ヲ受ケスシテ隨意ノ議決ヲ爲スコトヲ得ルモノナリ
總會カ若シ本條ニ違背シタル決議ヲ爲シタルハ理事其他ノ役員ハ其決議ヲ施行スルノ義務ナク自己カ定款ニ依リ委任セラレタル所ヲ斷行シ以テ總會ノ自省ヲ待ツヘキノミ

第六十四條 總會ニ於テハ第六十二條ノ規定ニ依リ豫メ通知ヲ爲シタル事項ニ付テノミ決議ヲ爲スコトヲ得但定款ニ別段ノ定アルトキハ此限ニ在ラス

本條ハ第六十二條ノ規定ト相照應ス即チ該條ニ於テ既ニ總會ヲ招集スルハ豫メ其會議ノ目的タル事項ヲ通知スヘキヲ命シタルカ故其當然ノ結果トシテモ總會ニ於テハ其豫メ通知ヲ爲シタル事項ニ非サレハ決議ヲ爲スヘキニ非ス蓋シ總會ハ前條ノ規定ニ依リ定款ヲ以テ理事其他ノ役員ニ委任シタルモノヲ除ク外ハ法人ノ一切ノ事務ヲ決議スル權限アルヲ以テ右ノ一例外ヲ除ケハ總テ決議シ得サルニ非サレハ唯其決議ヲ求ムル議案ト爲スヘキモノハ第六十二

條ノ規定ニ依リ豫メ通知ヲ爲シタル事項ニ限ルナリ
 然リ而シテ本條カ決議ヲ爲スヘキ議案ヲ豫メ通知ヲ爲シタル事項ニ限リシハ會
 議ノ席上ニ於テ突然新奇ノ議案ヲ提出セラル、モ調査ト考慮トノ暇ナク到底
 完全精確ナル決議ヲ爲シ得ヘキモノニ非サルヲ以テ法人及ヒ其社員ノ爲ニ甚
 タ不利益ナルノミナラス若シ尙ホ之ヲ決議スヘキモノトセハ狡猾ナル理事ハ
 或ハ此ノ如キ手段ヲ執リ以テ社員ヲ誤マリ以テ自己ノ不正ヲ濟サントスルコ
 無キヲ保セサレハナリ

總 則 編

然レモ亦會議事項ノ事体甚タ輕小ナルモノ若クハ甚タ明白ナルモノニシテ別
 段ノ調査ト考慮トヲ要セサルモノハ必シモ豫メ通知ヲ爲スコトヲ要セス、即時ニ
 提出シテ即時ニ決議スルヲ妨ケス、又非常ニ緊急ナル事項ノ如キ此等ノ餘裕ヲ
 存セサルニ於テハ亦即時ニ決議セサルヲ得サルヘク、若シ尙ホ常則ニ拘泥シテ
 五日前ノ通知ヲ要セストセハ遂ニ其時機ヲ失シテ却テ損害ノ生スルコトアラ
 シ、故ニ若シ定款ニ於テ豫メ通知ヲ爲サ、ル事項ト雖モ亦決議スルコトヲ得ル旨
 ヲ定メアルキハ固ヨリ其定款ニ從ヒテ決議ヲ爲サシムヘク、法律カ尙ホ之ニ干

涉シテ其定款ヲモ無効トスヘキニ非ス、是レ此但書アル所以ナリ、夫ノ索遯ノ法
 如キハ法律ヲ以テ通知ヲ要セサル事項ヲ明定シタリシモ是レ徒ニ法律ノ煩雜
 ヲ加フルニ止マリ、却テ實際ノ事宜ニ適セサルコトアルヘク、之ヲ法人自己ノ任意
 ニ委シテ適宜ニ定款ニ定メシムルノ勝レルニ若カサルナリ

第六十五條 各社員ノ表決權ハ平等ナルモノトス

總會ニ出席セサル社員ハ書面ヲ以テ表決ヲ爲シ又ハ代理人ヲ出タスコトヲ得
 前二項ノ規定ハ定款ニ別段ノ定アル場合ニハ之ヲ適用セス

總 則 編

本條ハ總會ニ於ケル社員ノ表決權ヲ定メタルモノナリ
 總會ハ社員ノ集合ニ成リ其多數ニ依リテ決議ヲ爲スモノナルカ此決議ヲ爲ス
 ニ付キ各社員可否ノ表決ヲ爲スノ權利ハ皆平等ナルヲ原則トス、故ニ如何ナル
 社員ト雖モ原則ニ於テハ一人一票タルニ過サルナリ

元來法人ハ或ハ社員ノ出資ノ多寡ニ因リ或ハ社員ノ發起者ナルト贊成者ナル
 トニ因リテ表決權ニ等差ヲ設ケ、又或ハ特別ノ功勞アリシ社員ニ特權ヲ與フル
 等ノ事アリ、甚シキハ未成年者、女子、囚徒、出資滯納者等ニハ表決權ナキモノトス

ルコアリ、此等ハ固ヨリ其法人ノ自由ニシテ定款ニ豫メ其旨ヲ定ムレハ固ヨリ之ニ從フヘシト雖モ、若シ否サレハ各社員皆平等ナリト爲スヲ以テ法律上ノ原則トセサル可カラス、蓋シ社團法人ハ社員ノ聚合体ニシテ社員ハ共ニ等シク其法人ヲ組成セル一要素ナルヲ以テ此點ヨリ之ヲ觀レハ社員ノ權利ニ甲乙ヲ附スルノ理アルコト無シ且夫レ營利ヲ目的トスル法人ハ商事會社ノ規定ニ從フモノニシテ商事會社ニ付テハ別段ノ規定アリ、本條ハ即チ通例公益ヲ目的トスル法人ニノミ適用セラレヘク、其公益ヲ目的トスル法人ニ於テハ出資ノ多寡ニ因リテ權利ノ高下ヲ爲スヘキモノニ非ス、尤モ多ク出資ヲ爲セシ者ハ多ク公益ヲ爲セシモノタルヲ以テ其者ノ權利ヲ崇重スルハ必シモ不可ナルニ非ス、隨テ定款ニ其定アレハ固ヨリ之ニ從フヘキモ普通ノ事態ヨリスレハ公共的團體ニ於テハ公共心ハ皆同等ニシテ出資ノ多寡ニ因リ厚薄アルモノニ非ス、隨テ其權利モ亦高下ナシト爲スハ最モ其當ヲ得タルモノトス、況ヤ其他ノ等差ヲ立ツル事由ヲヤ、本條カ平等ヲ以テ原則トシ、而シテ定款ニ別段ノ定アル片ハ亦之ヲ許スハ即チ此レカ爲ナリ

總 則 編

然ルニ茲ニ一問アリ、所謂定款ノ別段ノ定ニ於テ表決權ニ等差ヲ設ケ、甲ハ一人一票、乙ハ一人二票、又丙ハ一人三票ト爲スカ如キハ固ヨリ可ナルモ前記未成年者等ノ例ノ如ク或社員ハ全ク表決權ナシト爲スモ亦可ナリヤ、本條第三項ノ別段ノ定トハ第一項ノ「平等」ニ對スル「別段」ニシテ即チ「不平等」ニ外ナラス、故ニ或者ト或者トニ強弱優劣アルハ即チ可ナルモ有無ノ別アルニ至リテハ不平等ノ範圍ヲ超脱シテ本條ノ精神ニ違背スルモノトス、且法理上ニ於テモ尙モ社員タルコトヲ許セハ社員タルノ義務アリ、然ルニ既ニ其社員タルコトヲ許シ又其義務ヲ負擔セシメテ而シテ權利ハ即チ之ヲ與ヘスト云フ、非理モ亦太甚シト説ク者アリ、一聞頗ル理アルニ似タレモ是レ未タ至論ト云フヲ得ス、優劣強弱ハ不平等ナルモ有無ハ不平等ニ非スト云フハ畢竟五十歩ヲ以テ百歩ヲ嗤フモノニシテ有無モ亦優劣強弱ニ外ナラス、唯不平等ノ極端タルノミ、決シテ之ヲ以テ本條ニ違背スルモノト云フ可カラス、且夫レ或社員ノ權利ヲ奪フハ則チ非ナルモ定款ニ於テ或種ノ社員ニハ表決權ナキモノト豫定シ、之ヲ知リテ入社シタルモノニ於テハ自ラ表決ニ與カラサルコトヲ甘諾セルモノニシテ決シテ之ヲ非理トセス、又彼等

入社ノ後ニ於テ彼等ノ意思ニ反シ多數決ヲ以テ表決權ナシト決議セシモノト
 セン歟彼等若シ之ニ不服ナルキハ隨意ニ退社シテ可ナリ、決シテ強ヒテ義務ヲ
 負ハシメ強ヒテ權利ヲ奪フノ結果ヲ生スルモノニ非サルナリ、夫レ此ノ如ク既
 ニ不當ニ社員ノ權利ヲ奪フモノニ非サルノミナラス更ニ法人ノ爲メ公益ノ爲
 メ之ヲ虞カルニ於テ例ヘハ未成年者ノ如キ若クハ囚徒ノ如キ其法人ヲ助ケ公
 益ヲ進メントスルヤ其意固ヨリ歡迎セサル可カラスト雖モ、彼等ノ智識經驗ノ
 不十分ナル殊ニ刑餘ノ徒ノ動モスレハ不良ノ性行アル、若シ彼等ニ表決權ヲ與
 ヘハ往々意外ノ決議ヲ生シ、法人ノ爲メ公益ノ爲メ不利ヲ來スト無シトセス、故
 ニ法人ニシテ彼等ニ表決權ナキモノト爲スモ法律上決シテ之ヲ禁止スヘキノ
 理由ヲ見ス、故ニ余ハ本條第三項ハ實ニ表決權ニ多少ヲ爲スノミナラス其有無
 ヲ爲スモノヲモ亦固ヨリ包含スルコトヲ疑ハス

第二項ハ社員カ表決權ヲ行フニハ必シモ總會ニ出席スルコトヲ要セサル旨ヲ示
 シ、疾病若クハ事故等ニ因リ總會ニ出席セサル者ノ如キ單ニ其出席セサルノ一
 事ヲ以テ表決權ヲ行使スルヲ得サルコト爲スハ過酷ナルヲ以テ或ハ書面ヲ以

總 則 編

總 則 編

テシ或ハ代理人ヲ出シ以テ可否ノ表決ヲ爲サシムルコトセリ、而シテ代理人ハ代
 理ノ原則ニ依リ必シモ能力者タルヲ要セサルヲ以テ自己ノ妻子等ヲ以テ之ヲ
 行ハシムルモ亦可ナリトス第四章第三節參照

此事ニ付テモ亦或ハ定款ニ別段ノ定ヲ爲スコトアリ、例ヘハ書面ヲ以テ表決ヲ爲
 スコトヲ許セハ詐欺其他ノ不正若クハ錯誤ヲ生スルノ弊アルヲ以テ之ヲ禁シ、又
 無能力者ノ代理ヲ許セハ其可否ノ表決ヲ他社員ノ爲ニ左右セラル、ノ弊アル
 ヲ以テ之ヲ能力者ニ限ルコトスル等固ヨリ自由ニ之ヲ定メ得ヘシ、但本條ハ成
 ル可ク表決權ノ行使ニ便宜ヲ得セシムルノ精神ニシテ定款ニ別段ノ定ヲ爲ス
 ノ已ヲ得サル場合ニ於テモ務メテ此精神ニ依リ妄リニ之ヲ困難ナラシムルカ
 如キコト無キヲ要ス

第六十六條 社團法人ト或社員トノ關係ニ付キ議決ヲ爲ス場合ニ於テハ其社員ハ表決權
 ヲ有セス

社團法人ト其社團ヲ組成スル社員中ノ一人又ハ數人トノ間ニ於ケル關係、例ヘ
 ハ其間ニ於ケル法律行爲又ハ爭論事件等ニ付キ總會ニ於テ決議ヲ爲スノ場合

ニ於テハ其一方ノ當事者タル社員ハ總會ニ出席シテ辯論討議スルノ權ハ之ヲ失フ可カラスト雖モ其議決ニ際シテ可否ノ表決ヲ爲スノ權ハ之ヲ得サルモノトス、是レ法人ト社員トノ利益相反スルカ爲ニ社員ハ自己ノ利益ニ偏スルハ人情ノ弱點ニシテ法人ノ爲ニ公平ノ判斷ヲ下シ適當ノ表決ヲ爲ス能ハサルノ恐アリ、殊ニ此當事者タル社員カ多數ナルホノ如キ其危險最モ多シ、本條カ特ニ其社員ニ表決權ヲ行使セシメサルハ此レカ爲ニシテ此事タル當ニ法人ノ場合ノミナラス總テノ會議法ニ於テ皆然ル所ナリ、殊ニ前ノ第五十七條ニ於テ法人ト理事トノ利益相反スル事項ニ付テ理事ハ代理權ヲ有セストノ規定ノ如キモ亦同一ノ精神ニ外ナラス

總 則 編

第六十七條 法人ノ業務ハ主務官廳ノ監督ニ屬ス

主務官廳ハ何時ニテモ職務ヲ以テ法人ノ業務及ヒ財産ノ狀況ヲ検査スルコトヲ得、本法ハ前ニ述ヘシ如ク法人ノ設立ニ關シテ特許主義ト準則主義トヲ折衷併取セシモノニシテ此主義ハ終始法人ニ關シテ適用セラレ、ト各所ニ散見ス、故ニ法人ノ業務ハ之ヲ其自由ニ一任セズ常ニ主務官廳ノ監督ニ屬セシム、蓋シ主務

官廳ノ監督ハ言フ迄モ無ク公益ノ爲ニスルモノニシテ法人ノ業務ノ狀況如何ハ或ハ社會ノ經濟ニ影響シ或ハ公衆ノ利害ニ關係シ且公ノ秩序風俗ニ波動ヲ及ホスト亦少ナカラサルヲ以テ終始之ヲ監督シ以テ法人解散ノホニマテ至ルモノナリ、夫レ然リ法人既ニ解散ト爲レハ最早公益ニ關係ナク專ラ個人ノ私權ニ關スルノミナルヲ以テ其時ヨリハ裁判所ノ監督ノミニ屬スルト爲ルナリ

第八十二條 參看

茲ニ主務官廳トハ法人ノ目的トセル事業ヲ管轄スル中央行政官廳ヲ云フ故ニ現行官制ニ依リテ之ヲ例示スレハ祭祀宗教ニ關スル法人ハ内務省、學術ニ關スル法人ハ文部省、又銀行ハ大藏省、鐵道會社ハ遞信省ヲ以テ主務官廳ト爲スナリ、又監督トハ單ニ視察検査スルノ謂ニ止マラス視察検査ノ結果、不良不正ノ事アレハ進シテ之ヲ禁止シ又ハ或事ヲ行フヘキヲ命令スル等ノ事ヲ爲スモノニシテ、監事ノ監査ノ如キト同日ノ談ニ非ス

然リ而シテ検査ハ固ヨリ監督ヲ盡クスカ爲メニ欲ク可カラサルノ事項ニシテ既ニ監督ノ權アレハ又検査ノ權アルヲ殆ト明文ヲ待タス、故ニ主務官廳ハ利害關

總 則 編

總 則 編

係人ノ請求ナキモ職權ヲ以テ自ラ進ンテ法人ノ業務及ヒ財産ノ狀況ヲ検査スルコトヲ得ヘシ、此検査ヲ行フカ爲ニハ法人ノ帳簿其他一切ノ書類ヲ展閱スルコトヲ得ルノミナラス其金匱財産ノ現在高等ヲモ検査スルコトヲ得、且不明若クハ嫌疑ノ點アルニ於テハ之ヲ明白ナラシメンカ爲メ理事其他ノ役員ニ就テ一々此レカ説明ヲ爲サシムルコトヲ得ヘシ、此事ハ商法第二百五條ニ其明文アリテ本法ニハ之ナシト雖モ本條第二項ノ結果トシテ當然此權アルヤ言フ埃タサルナリ、此場合ニ法人ノ理事、監事等カ其官廳ノ検査ヲ妨ク又ハ官廳ニ對シテ不實ノ申立ヲ爲シ若クハ事實ヲ隱蔽シタルモハ第八十四條第三號第四號ニ依リ五圓以上二百圓以下ノ過料ニ處セラル、ナリ

今熟、本法ノ規定ヲ見ルニ法人ニ付テハ之ヲ設立スルニ先ツ主務官廳ノ許可ヲ要シ、定款ヲ變更スルニ其認可ヲ要シ、場合ニ依リテハ設立ノ許可ヲ取消スコトアリ、又營利ヲ目的トスルモノハ總テ嚴重ナル商事會社ノ規定ヲ適用スルコトシ、其他定款ノ事項ヲ定メ登記ノ法ヲ嚴ニシ、財産目錄、社員名簿ヲ備置クコトヲ命シ、理事ヲ置クコト總會ヲ開クコトモ亦命令的ニ之ヲ定メ、更ニ本條ヲ以テ官廳ヲシテ

總 則 編

之ヲ監督セシメ、業務、財産ノ検査ヲ行ハシメ、又右諸事ニ關シテ罰則ヲ設ケ以テ之ヲ厲行セントス、蓋シ此ノ如キハ殆ント干涉其度ヲ超エ國家自ラ法人ヲ設立シテ其定款ヲ設クルモノ、如キノ看アリ、文明ノ潮流汪洋トシテ奔瀉シ自由ノ分子ハ一事一物ヲモ剩サス浸潤シ去ラントスルノ今日ニ於テ此ノ如キノ法規ヲ制定シ貴重ナル業務ノ自由ニ許多ノ制限ヲ與ヘタルヲ見レハ我立法者ハ獨リ此進歩ノ大勢ニ背カントスルノ念アルヲ疑ハサルヲ得ス、殊ニ本條ノ如キ公カヲ以テ業務ノ機密ヲ侵シ人ノ最モ嫌厭スヘキ財産ノ検査ヲ爲スニ至テハ或ハ干涉過度ノ譏ナキニ非サルヘシ、嗚呼公力ノ干涉夫レ果シテ非ナル歟、社會ノ文明圓滿ニ發達シタランニハ公力ノ干涉固ヨリ非ナリト雖モ、然レモ此ノ如キ美域ヲ距ルコトノ尙ホ遠ク、人民未タ十分ノ進歩ヲ得サル今日ニ在リテハ干涉モ亦欲ク可カラサルノ要事ナリトス、元來法律カ此ノ如ク種々ノ干涉ヲ爲スハ法人ハ一ノ無形体ニシテ固有ノ意思及ヒ行爲能力ナキノミナラス其ノ事業ハ公ノ秩序風俗ニ影響シ社會ノ經濟ニ關係シ且廣ク第三者ニ利害ヲ及ホスモノナルヲ以テ公益ト第三者ノ私益トヲ保護スルカ爲ニ法律ハ十分注意防制スル所

ナキヲ得ス、且法人自己ノ爲ニ慮ルモ亦寧ロ利益アリテ損害ナシ、何トナレハ法律ノ規定愈々細密ナレハ其細密ナルニ從ヒ法人ノ基礎ハ愈々正確ニシテ法人ノ社會ニ博スル信用ハ愈々廣大ナル可ケレハナリ、況ンヤ公益ヲ目的トスル法人ノ如キハ一私人ト異ナリ業務及ヒ財産ヲ秘密ニスル必要毫モ存セズシテ本條ノ検査ト雖モ決シテ一私人ニ於ケルカ如キ苦痛ヲ與フルモノニ非サルニ於テヲヤ

第三節 法人ノ解散

本節ハ法人解散ノ原因及ヒ解散ノ爲ニ生スル各種ノ法律關係ヲ規定シタルモノナリ

解散トハ法人カ其存立ヲ失フ事實ヲ云フ、恰モ自然人ニ於ケル死亡ニシテ法人ハ解散ニ依リテ法律上全ク消滅スルモノナリ、尤モ解散後ニ於テモ清算ノ結了マテハ尙ホ法人ノ存續スルモノト看做ス第七十條モ是レ唯實際ノ便宜上此ノ如ク看做スト云フニ止マリ解散ノ時ニ於テ全ク消滅ス、而シテ解散ノ原因ハ法人ノ設立者又ハ社員ノ意思ニ基クコアリ、又ハ法人ノ性質若クハ其事業ノ狀況ヨリ生スル自然ノ結果ニ出ツルコアリ、又ハ國家監督權ノ作用ニ出ツルコアリ、其原

總 則 編

因ノ孰レタルニ論ナク法人ノ解散シタルハ其財産ハ何人ニ歸屬スルモノナルヤ、是レ自然人ノ死亡ニ於ケル遺産ノ相續ト同種ノ事項ニシテ法人ニ在リテハ固ヨリ相續人ナル者ナキヲ以テ別段ニ其歸屬者ヲ定メサル可カラス、其財産ノ處理即チ清算ハ如何ニスヘキヤ、清算人ノ職分及ヒ清算事務ノ範圍ハ如何、法人ト法律關係ヲ有セシ者即チ債權者、債務者ハ如何ニシテ其關係ヲ終決スヘキヤ、此等ノ諸問題ハ皆法律ニ於テ豫メ之ヲ規定センコトヲ要ス、是レ本節ノ規定アル所以ナリ

第六十八條 法人ハ左ノ事由ニ因リテ解散ス

- 一 定款又ハ寄附行爲ヲ以テ定メタル解散事由ノ發生
- 二 法人ノ目的タル事業ノ成功又ハ其成功ノ不能
- 三 破産
- 四 設立許可ノ取消

社團法人ハ前項ニ掲ケタル場合ノ外左ノ事由ニ因リテ解散ス

一 總會ノ決議

法人解散ノ事由ハ社團法人タルト財團法人タルトニ因リテ異ナルモノアリ、又二者ヲ通シテ同一ナルモノアリ、本條第一項ハ其二者ニ共通ナルモノヲ列舉シ第二項ハ社團法人ノミニ特別ナルモノヲ列舉シタリ

第一、社團法人ト財團法人トニ共通ノ解散事由

一、豫定解散事由ノ發生 社團法人ハ定款ヲ以テ又財團法人ハ寄附行爲ヲ以テ豫メ其法人ヲ解散スヘキ事由ヲ定ムルコトアリ、此場合ニ於テ其事由ノ果シテ發生シタルキハ則チ其法人ノ解散ニ歸スルヤ當然トス、而シテ此所謂解散事由トハ法人存立ノ期限、期間又ハ未必條件ニシテ例ヘハ來ル何年何月マテト豫定シアルキニ其年月ノ到着シタル場合ノ如キ、幾年間ト豫定シアルキニ其期間カ滿了シタル場合ノ如キ、又馬車會社若クハ汽船會社カ其線路若クハ航路ノ沿岸ニ鐵道ノ敷設セララル、コアラハ解散セント豫定シアリシニ果シテ其敷設アリ即チ條件成就セシ場合ノ如キ、皆豫定ノ解散事由ノ發生セシモノニシテ此場合ハ法人ノ設立者又ハ其社員ノ意思ニ基ツク解散タルモノナリ

總 則 編

二、事業ノ成功又ハ其不能 法人ハ自然人ト異ナリ特ニ或一定ノ目的ヲ達セシカ爲ニ存立スルモノナレハ其目的トセシ事業カ既ニ成功シ又ハ其成功カ到底不能ノモノト爲リシキハ法人ハ茲ニ其存立ヲ失フハ法人ノ性質ヨリ生スル自然ノ結果ナリ、例ヘハ救貧院ノ如キ慈惠院ノ如キハ通例永久ノ性質ヲ有スル事業ナルヲ以テ前號ニ依リテ豫定ノ解散事由アルニ非サレハ當然解散スルコト無キモ、之ニ反シテ或道路ノ開鑿又ハ橋梁ノ建築ヲ目的トシテ設立シタル法人ノ如キハ其開鑿又ハ建築ニシテ既ニ竣工スレハ法人ノ目的既ニ貫徹セルモノニシテ當然解散ニ歸セサル可カラス、又其目的トセシ事業カ法令ヲ變更又ハ世態ノ變遷ニ因リ到底成功スル能ハサルコト爲リシ場合ニ於テモ法人ハ亦其目的ヲ失ヒシモノニテ當然解散ニ歸セサル可カラス、故ニ此事ハ定款又ハ寄附行爲ニ其豫定アルヲ要セス當然解散ノ事由タルモノトス、而シテ若シ定款又ハ寄附行爲ニ反對ノ豫定アレバ却テ其豫定ニ從フ可ク、即チ或一事業カ成功シ又ハ成功不能ト爲リシキハ更ニ或一定ノ事業ニ着手シ若クハ更ニ着手スヘキ事業ヲ選定スヘキ等ノ豫定アリシ場合ハ其豫定ニ依リ尙ホ法人ヲ解散セスシテ之

總 則 編

ヲ存續スヘキヤ論ヲ俟タス

三、破産 法人破産スレハ解散セサルヘカラス、是レ業務ノ狀況ヨリ生スル自然ノ結果ニシテ已ムヲ得サル所ナリ、此事ニ付キ注意スヘキハ現行破産法ハ商事ニ關スル支拂停止ノモノニ限リ破産ト爲スモノナルモ此破産法ハ必ス改正セラレ商事ト非商事トニ別ナク總テ破産法ノ支配ヲ受ク可キモノニシテ此新法典ハ悉ク此主義ニ依リ規定セラレタルモノナリ、故ニ法人ハ營利ヲ目的トスルモノト公益ヲ目的トスルモノトニ別ナク總テ本號ニ依リ解散ト爲ルコトアルヘキナリ第七十條參照

四、設立許可ノ取消 法人ハ當該官廳ノ許可ニ因リテ其設立ヲ得常ニ其監督ノ下ニ立ツモノナルヲ以テ監督權ノ作用ニ依リ官廳ハ其設立ノ許可ヲ取消スコトアルヘシ、既ニ之ヲ取消セバ法人ハ同時ニ解散タルヤ亦言ヲ俟タス第七十一條參照

第二、社團法人ニ特別ノ解散事由

一、總會ノ決議 社團法人ハ社員合同ノ意思ニ因リテ成立シタルモノナレバ亦其合同ノ意思ニ因リテ消滅セシムルコトヲ得ヘシ、故ニ總會ニ於テ之ヲ決議ス

總 則 編

レハ法人ハ茲ニ解散ニ歸ス而シテ其決議ニ關スル要件ノ如キハ次條ニ定ムル所ニ依ルモノトス

二、社員ノ缺亡 缺亡トハ全然存在セサルヲ云ヒ、社員カ退社、死亡等ニ因リテ一人ヲモ留メサルニ至リシ場合ナリ、蓋シ社團法人ニシテ一人ノ社員ナキニ至レハ社團法人ヲ組成スル要素ヲ全ク失ヒシモノニテ法人ヲ存續セント欲スルモ亦能ハス、故ニ是レ亦當然解散ノ事由ナリトス

此社員ノ缺亡ニ付テハ社員カ一人ノミト爲リタル場合ヲ包含スルヤ否ヤ、單ニ「缺亡」ノ字義ヨリスレハ一人モ存在セサルヲ云ヒ、隨テ一人ニテモ存在スレハ既ニ缺亡ニ非スシテ解散ノ事由タラザルヤ知ル可シ、然ルニ或ハ説ヲ爲ス者アリ曰ク社團トハ二人以上ノ集合体ヲ稱スルモノニシテ少クモ二人アルニ非サレハ社團ヲ成スヲ得ス、故ニ一旦二人以上ノ集合ニ因リテ社團ヲ成スモ後日減少シテ一人ノミト爲リタルハ既ニ社團タル性質ヲ失ヒ法人トシテ存立シ得ルノ理ナク、隨テ此場合モ亦本號ニ包含シ解散ノ事由タルモノトセサル可カラスト、是レ實ニ一理ナシトセス、然レモ我立法者ノ意ハ決シテ然ラス、立法者ハ豫

總 則 編

メ此問題アルヲ想ヒ自ラ説明シテ曰ク「社團法人ハ總テ或目的ノ爲ニ存スルモノニシテ一旦設立シタル以上ハ全ク社員各自トハ別個ナル無形人ヲ生スルモノナルヲ以テ法人ノ設立ニハ數人ノ社員アルヲ要スルモノトスルモ其在ニハ必シモ之ヲ要スルモノトスヘカラス、故ニ假令其社員ハ漸次減少シテ僅ニ一人ヲ殘スニ至ルモ尙モ其目的タル事業ノ成功ニシテ妨ナキ以上ハ之ヲ解散セシムルノ理由アルヲ見ス、故ニ本案ニ於テハ社員ノ全ク存在セサルニ至ルヲ以テ解散ノ原因トセリ」下此説明タル理論上ニ於テハ余ハ全然首肯スル能ハス、法人ト社員各自トハ固ヨリ別個ノモノナリト雖モ亦其間ニ緊密ノ關係アリテ社員ノ聚合体カ即チ法人タリ、全ク社員ナケレハ法人モ亦存セサルヲハ自明ノ理、隨テ一人ノミニテハ聚合体即チ社團タル能ハスシテ法人ノ存立ヲ持續スヘカラスアルハ爭ヲ容レサルノ事實トス、然ルニ立法者ハ既ニ「法人ノ設立ニハ數人ノ社員アルヲ要スルモノ」タルヲ認メシニ拘ハラヌ、其存在ニハ必シモ之ヲ要スルモノトスヘカラス」下云フハ寧ロ自家撞着ノ太甚シキモノニ非スヤ、立法者カ一旦設立シタル以上ハ全ク社員各自トハ別個ナル無形人ヲ生スルモノ

總 則 編

ナルヲ以テ」ト云ヘル語氣ヨリ察スレハ立法者ハ法人ハ二人以上ノ社員ナケレハ之ヲ設立スルヲ得サルモ既ニ二人以上ノ社員ニ因リテ設立セラレシ以上ハ法人ハ社員ト全ク別個ニシテ社員二人ナシト雖モ亦存立スヘシト爲シ、此事ヲ以テ恰モ子ト父母トノ關係ノ如ク子ハ父母ニ因リテ生スルモ既ニ生レハ父母ノ外ニ存立シ父母ナシト雖モ生存スルト同一ノモノト思惟スルカ如シ、然レモ若シ果シテ然ラハ父母雙方共ニ死去スルモ子ノ生存ニ關セサルカ如ク社員ハ一人モ存在セス全ク缺亡スルモ法人ハ尙ホ解散セサルヲト爲サ、ル可カラス、然ルニ全ク缺亡スレハ解散スヘク一人ヲ存スレハ解散ノ理ナシト云フハ實ニ自家撞着ノ說ニ過ス、故ニ余ハ理論上ニ於テハ立法者ノ此說ヲ以テ誤見ナルヲ斷言スルヲ憚ラスト雖モ、然レモ想フニ立法者ハ實際ノ利害ニ因リテ社員一人ト爲ルモ尙ホ法人ヲ存續セシムルヲ可トシ隨テ強ヒテ其理論ヲ設ケントシ遂ニ其說ノ牽強附會タルヲ忘レタルモノナルヘシ、蓋シ營利ヲ目的トスル法人ハ專ラ商事會社ノ規定ニ從フヲ以テ本法ハ主ニ公益ヲ目的トスル法人ニ適用スヘク、公益ノ爲ニスル法人ハ勉メテ之ヲ存續セシメ妄リニ解散スルヲ無カ

ラシムルヲ利益トスルハ論ヲ竣タサルヲ以テ社員一人ト爲ルモ其目的タル事業ノ成功ニ妨ナキ以上ハ尙ホ其法人ヲ存續シテ其事業ヲ成功セシムルヲトシ徒ラニ理論ニ拘泥シテ之ヲ解散セシムルカ如キヲ避クルハ寧ロ立法者ノ用意ナルヘシ、是レ此規定アル所以ニシテ本法ノ解釋上ニ於テハ社員一人ト爲ルモ決シテ解散ノ事由タラサルハ固ヨリ疑ヲ容レサルナリ

第六十九條 社團法人ハ總社員ノ四分ノ三以上ノ承諾アルニ非サレハ解散ノ決議ヲ爲ス

コトヲ得ス但定款ニ別段ノ定アルトキハ此限ニ在ラス

抑、解散ノ決議ノ如キハ其法人ヲ消滅セシムル最モ重大ノモノナルヲ以テ僅々ノ多數ヲ以テ之ヲ決セシムルハ妥當ナラス、乃チ本條ハ四分ノ三以上ノ承諾ヲ要スルヲト爲シタリ、但此事ハ固ヨリ法人ノ自由ニ委スヘキモノナルヲ以テ本條ハ唯定款ニ其定ナキハ爲メニ之ヲ設ケタルノミ、故ニ定款ヲ以テ之ニ異ナル定ヲ爲スモ隨意ナリ、例ヘハ過半數ノ承諾ニテ可ナリト爲シ、又ハ五分ノ四以上ノ承諾ヲ要スト爲スカ如キ固ヨリ妨ナシトス

元來解散ノ如キ大事ハ總社員一致ヲ以テ之ヲ決スルハ固ヨリ妨ナシト雖モ多

總 則 編

總 則 編

數決ニ依リ之ヲ行ヒ得ルヲトシ多數ヲ以テ少數ヲ壓セシムルハ稍、不妥ノ感ナキニ非ス、然レモ一步ヲ進ンテ之ヲ考フレハ多數決ヲ許サストスルハ却テ少數ノ不同意者ヲ以テ多數ノ同意者ヲ壓スルモノニシテ是レ亦不當タルヲ免カレズ、社員ノ多數カ解散ヲ必要トスルハ尙強ヒテ法人ノ事業ヲ繼續セントスルモ極メテ困難ニシテ且種々ノ弊害ヲ生スヘシ、是レ本條カ多數決ノ標準ヲ重クシテ其解散ヲ許ス所以ナリ

或學者ハ立法上ヨリ、本條ヲ非議シテ法人ノ解散ハ總會ノ決議ニ加フルニ主務官廳ノ許可ヲ以テスルヲ要スルヲトスヘシト説ク者アリ、曰ク「殊ニ公益ヲ目的トスル法人ハ之ヲ設立スルニ必ス主務官廳ノ許可ヲ要シ、其設立後ニ於テモ常ニ官廳ノ監督ニ屬スルモノナルニ獨リ其解散ノミ法人ノ自由ニ一任シ營利ヲ目的トスルモノト同シク社員ノ決議ヲ以テ解散セシムルハ私人ノ隨意ニ公益事業ヲ廢止スルノ嫌アルノミナラス官廳ノ設立許可權ト監督權トニ背反スルニ非サルナキヲ得ンヤ」ト、然リ解散ノ決議ニ官廳ノ許可ヲ要ストスルハ前後相貫通スルモノ、如シ、然レモ是レ實ニ皮相ノ淺見ニシテ縱令許可ヲ要ストスル

總 則 編

モ畢竟空名ニ止マルヲ如何セン、試ミニ想ヘ總社員カ一致シテ解散ノ決議ヲ爲セシ場合ニ官廳カ許可權ニ依リ之ヲ否拒シテ其許可ヲ與ヘストスルモ社員ハ更ニ退社ノ手段ヲ執ラハ總社員ノ退社ハ所謂社員ノ缺亡ト爲リテ法人ハ解散ニ歸セサルヲ得ス、又總社員ノ一致ナク其多數決ヲ以テスル場合ト雖モ社員ノ多數殊ニ四分ノ三以上ノ多數カ解散ヲ希望スルニ公ノ權力ヲ以テ解散ヲ許サス強ヒテ其事業ヲ繼續セシムルコトセハ果シテ其事業ノ圓滿ニ行ハルコトヲ得ヘキ歟、將タ何等ノ弊害ナキ歟、公益事業ハ勉メテ其廢止ヲ防キ之ヲ獎勵スルヲ要ストスルモ國家ハ私人ニ對シ其意ニ反シテ之ヲ行フヘキコトヲ強ユルノ權力アル歟、人誰レカ之ヲ然リトセンヤ、然ラハ則チ縱令許可ヲ爲スモノトスルモ實際上必ス之ヲ許可セサルヲ得サルモノニシテ許可ノ權ハ空名タルニ過ス、是レ立法者カ敢テ此ノ如キノ愚ヲ爲サ、リシ所以ナリ

第七十條 法人カ其債務ヲ完済スルコト能ハサルニ至リタルトキハ裁判所ハ理事若クハ

債權者ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ破産ノ宣告ヲ爲ス

前項ノ場合ニ於テ理事ハ直チニ破産宣告ノ請求ヲ爲スコトヲ要ス

總 則 編

現行破産法ノ主義ハ破産法ヲ以テ商事上ノ債務ニ關スル場合ニ限レ、此破産法ハ必ス改正セラレ商事ト非商事トヲ問ハス總テ債務ヲ完済スル能ハサルニ至リシ者ハ一様ニ之ヲ破産ト爲スノ主義ヲ採ルヘク、目下法典改正ノ既定方針此ニ在リテ本法ハ常ニ此方針ニ因リ規定セラレ、隨テ法人モ亦此方針ニ從ヒ其營利ヲ目的トスルモノハ勿論、其公益ヲ目的トスルモノト雖モ亦債務ヲ完済スル能ハサルニ至レハ等シク破産タルヲ免レスト爲シタリ、而シテ既ニ破産ト爲レハ復其法人ヲ維持スル能ハサルヲ以テ解散ニ歸セサル可カラサルハ亦當然ノ勢ノミ

破産トハ債務ヲ完済スルコト能ハサル狀況ニ至リシ人ノ在様ヲ云フ、然ラハ則チ「債務ヲ完済スルコト能ハサルニ至リタル」トハ如何ナル場合ヲ云フ乎、嚴正ニ之ヲ云ヘハ一切ノ財産カ一切ノ債務ニ充ツルニ足ラサルキニ限ルヘキモ一切ノ財産ト一切ノ債務トヲ精算比較スルハ十分ノ手續ヲ盡クシタル後ニ非サレハ能ハス、故ニ法律上ニ於テハ或一ノ狀況ヲ以テ債務ヲ完済スル能ハサルモノト看做スモノニシテ現行破産法ニ依レハ支拂ヲ停止セシキハ即チ然ルモノト爲

セリ、然レモ是レ不日改正セラルヘキヲ以テ其改正ノ成リシ日ヲ待テ其改正破産法ニ依ルニ非サレハ正確ニ此一句ヲ解釋スル能ハサルハ亦已ヲ得サル所ナリ

本條ノ場合ニ理事カ若シ破産宣告ノ請求ヲ爲スコトヲ意リタルハ第八十四條第五ニ依リ五圓以上二百圓以下ノ過科ニ處セラル、コトヲ免レス

第七十一條 法人カ其目的以外ノ事業ヲ爲シ又ハ設立ノ許可ヲ得タル條件ニ違反シ其他公益ヲ害スヘキ行爲ヲ爲シタルトキハ主務官廳ハ其許可ヲ取消スコトヲ得

法人設立ノ初ニ當リテ其法人ノ目的及ヒ法人設立ノ條件ハ皆適法ナルニ因リ主務官廳ハ之ニ其設立ノ許可ヲ與ヘシモ後日ニ至リ其法人カ當初ノ目的以外ノ事業ヲ爲シ又ハ設立ノ許可ヲ得タル條件ニ違反シ其他公益ヲ害ス可キ行爲ヲ爲スルハ官廳カ糞キニ其許可ヲ與ヘシ所以ノ理由全ク空シキニ至ルヲ以テ其許可ヲ取消スコトヲ得ルハ當然ノ理ナリトス

「目的以外」ノ事業ヲ爲ス「ト」ハ例ヘハ宗教、學問等ヲ目的トセルモノカ其法人ヲ利用シテ政治上ノ事業ヲ爲スカ如キ場合ヲ云ヒ「設立」ノ許可ヲ得タル條件ニ違反

總 則 編

「ト」ハ例ヘハ慈惠醫院ヲ設立スルニ其資産ノ醜集方法、入院施療ノ方法等ノ如何ニ依リテハ或ハ眞ノ慈善的の事業ト爲リ或ハ否ラサルモノト爲ルヲ以テ官廳カ之ヲ許可スルニハ其方法ノ如何ニ依ルモノナルニ初メ慈善的方法ヲ以テ許可ヲ受ケ然ル後私ニ射利的方法ヲ執ルカ如キ場合ヲ云フ「公益」ヲ害スヘキ行爲トハ要スルニ治安ヲ害シ又ハ風俗ヲ亂ル行爲ヲ云フモノナルモ元來甚ク廣漠ナル意味ヲ含ミ所謂公益トハ如何ナルモノヲ云フヤ又其公益ヲ害スヘキ行爲トハ如何ナルモノヲ云フヤ一定ノ標準若クハ範圍ヲ與フルハ到底至難ノ業ニシテ實際主務官廳ノ認定權ニ委セサルヲ得サルナリ

故ニ本條ニ依ル設立認可ノ取消ニ對シテハ其取消ヲ受ケタル法人ノ之ニ不服ナルコトアルヘク公益ヲ害スト云ヘル廣漠ナル理由ニ因ルルハ如キ其不服一層尠カラサルヘシ然レモ是レ全ク主務官廳ノ監督權ニ出ツルモノニシテ民事訴訟法ニ依ル上訴ヲ爲スヘキモノニ非サルナリ、蓋シ商事會社及ヒ之ニ准スヘキ營利的法人ハ商法第六十七條第二項ニ依リ其事業カ公安又ハ風俗ヲ害スヘキハ司法裁判所ノ命令ニ因リ之ヲ解散セシムヘキモ本法ニ依ルヘキ法人ハ主

總 則 編

トシテ公益ヲ目的トスルモノニシテ公益ヲ目的トスル事業ハ主トシテ行政官廳ノ管轄ニ屬スルヲ以テ本條ハ商法ト異ナリ之ヲ行政官廳ノ職權ニ屬セシメ、單ニ其設立ノ許可ヲ取消サシメ以テ解散ノ命令ニ換ユルコト爲シタルナリ、尙ホ本條ノ取消ヲ受クルハ法人其モノカ前述ノ不法行爲ヲ爲セシ場合ニ限ルモノニシテ理事又ハ社員カ其自己ノ意思ニ因リ此不法行爲ヲ爲スモ此レカ爲ニ累ヲ法人ニ及ホスモノニ非ス、即チ此場合ハ其行爲ヲ爲セシ者ノミノ責任、例ヘハ第四十四條ニ依ル損害賠償ノ責任等ニ止マリ法人カ設立許可ノ取消ヲ受クルコト無シ、故ニ本條ノ適用アルハ法人カ總會等ノ決議ニ依リテ此不法行爲ヲ爲シ、法人其モノノ行爲ト認ムヘキハ限ルナリ

第七十二條 解散シタル法人ノ財産ハ定款又ハ寄附行爲ヲ以テ指定シタル人ニ歸屬ス、定款又ハ寄附行爲ヲ以テ歸屬權利者ヲ指定セス又ハ之ヲ指定スル方法ヲ定メサルトキハ理事ハ主務官廳ノ許可ヲ得テ其法人ノ目的ニ類似セル目的ノ爲メニ其財産ヲ處分スルコトヲ得但社團法人ニ在リテハ總會ノ決議ヲ經ルコトヲ要ス
前二項ノ規定ニ依リテ處分セラレサル財産ハ國庫ニ歸屬ス

總 則 編

法人ノ設立ハ恰モ自然人ノ出生ノ如ク其解散ハ自然人ノ死亡ノ如シ而シテ自然人死亡シテ遺産アルハ相續人ニ相續セシムヘク、法人ハ解散スルモ其相續人ヲ有スルモノニ非ス、又遺言ヲ爲スノ能力ヲモ有スルモノニ非サルテ以テ法律ハ其解散ノ場合ニ於ケル遺産處分ノ方法ヲ規定セサル可カラズ、遺産處分ノ方法トハ他ナシ其遺産ヲ受クル者ヲ定ムルニ在リ、其遺産ヲ受クル者ヲ歸屬權利者ト云ヒ、歸屬權利者ハ恰モ自然人ノ場合ニ於ケル相續人ノ地位ニ在ルモノナリ、抑、法人カ解散シタルハ必ヤ多少ノ財産ヲ遺シ、且種々未了ノ權利義務ヲ遺スコトアルヘシ、而シテ此權利義務ハ必ス之ヲ決了スルノ處分ヲ爲サ、ルヲ得ス、此處分ヲ名ケテ清算ト云フ、法人解散ノ後總テノ權利義務ヲ決了シ、即チ清算ヲ終了シテ尙ホ財産ノ剩餘ヲ見ルハ茲ニ始テ其剩餘ハ之ヲ何人ニ歸屬セシムヘキヤノ問題ヲ生シ、乃チ本條ノ規定ヲ適用スルニ至ル、故ニ本條以下ハ總テ法人解散後ノ處分即チ清算ニ關スル規定ニシテ本條ハ其首ニ位スルモ本條ヲ適用スルハ清算事務ノ最終ニ在ルモノトス、換言スレハ本條ノ所謂財産トハ清算後尙ホ剩餘タリシ財産ニ限ルモノト知ル可シ

總

則

編

倍此剩餘財產即チ解散シタル法人ノ遺産ノ歸屬權利者ハ何人タリヤト云フニ本條ハ三段ノ順位ヲ設ケ、第一ハ定款又ハ寄附行爲ヲ以テ指定シタル人ニ歸屬スルコトシ、第二ニ其法人ノ目的ト類似セル目的ノ爲ニ處分スルコトシ、第三ニ國庫ニ歸屬スルコトセリ、是レ皆法人設立者ノ意思ヲ推測シ勉メテ其意思ニ副ハントスルモノニ外ナラス

定款又ハ寄附行爲ニ豫メ歸屬權利者ヲ指定シアリタルハ是レ法人ノ設立者カ自ラ其歸屬權利者ヲ指定シタルモノニシテ恰モ自然人カ遺言ヲ以テ相續人ヲ指定シタルト同種ノ事情タリ、此場合ニ於テハ法人ノ遺産ハ固ヨリ其人ニ歸屬セシメサル可カラズ、法學ノ舊說ニ依レハ解散シタル法人ノ財產ハ相續人ナキ遺産ノ原則ニ從ヒ當然之ヲ國庫ニ歸屬セシムルヲ動カス可カラサルノ法トトセシモ此ノ如キハ法人設立者ノ意思ヲ無視シ却テ公益事業ノ發達ヲ妨クルノ弊ナシトセス、蓋シ法人設立者カ其設立行爲ヲ以テ自己ノ財產ヲ或公益事業ニ充テ其事業ノ存續スル間ハ之ヲ其事業ニ供スルモ其事業ノ廢止シタル後ハ之ヲ自己ニ回收シ又ハ豫定ノ人ニ與ヘントノ意思ヲ表示シアルハ其意思ニ

總

則

編

從フ可カラサルノ理萬之ナキノミナラス其意思ニ從フモ毫モ公益ニ妨アルコト無ク却テ此等ノ者ノ意思ヲ尊重シテ之ヲ貫徹セシムルハ益、公益事業ノ發達ヲ促スノ利アルヲ見ル、是レ本條カ第一ニ其指定アレハ其人ニ歸屬スルコト爲シタル所以ナリ

然ラハ則チ其指定ナキハ如何

商社會社其他營利的法人ニ在リテハ初ヨリ自己ノ利益ヲ營ムカ爲ニ法人ヲ設立セシモノナレハ其法人解散ノ時ニ於ケル法人ノ財產ハ別段ニ歸屬權利者ノ指定アルヲ待タスシテ當然其設立者若クハ其子孫又ハ社員ニ復歸スルノ意思ナル社トハ疑ヲ容レス、故ニ我商法ニ於テハ解散シタル商社會社ノ財產ハ當然之ヲ其員ニ分配スルコト爲セリ、商法第百三十二條、第百三十九條、七條及ヒ第二百四十九條然リト雖モ純然タル公益ヲ目的トスル法人ノ設立者又ハ其社員ハ自己ノ財產ヲ公益ノ爲ニ義捐シタルモノナルヲ以テ特ニ或人ニ歸屬セシムヘキヲ指定シタルコト無キ以上ハ營利的法人ノ場合ノ如ク之ヲ自己若クハ或人ニ復歸スルノ意思ナク全ク之ヲ義捐シ去リタルモノト推定セサルヲ得ス、隨テ之ヲ其出資者若クハ其子孫

總 則 編

ニ還付スルハ却テ其本意ニ背クモノト謂フ可ク、且若シ之ヲ設立者又ハ社員等ニ分配スルモノトセハ或ハ私利ノ爲ニ公益事業ヲ廢止スルカ如キ弊ヲ生スルヲ無シトセス、故ニ出資者等ノ意思ヲ尊重スヘキ點ヨリスルモ公益ノ爲ヨリスルモ之ヲ出資者又ハ其子孫等ニ分配スヘキモノニ非サルナリ

然リト雖モ歸屬權利者ノ指定ナキハ直チニ國庫ニ歸屬セシムルコト爲セルハ從來屢見ル所ノ法制ナルニ拘ハラ深ク設立者ノ意思ヲ尊重スル所以ニ背ク、何トナレハ國庫ニ歸屬セシムルハ一般ノ國用ニ供スルモノニシテ公益タルニ外ナラサルモ此ノ如キハ其効用甚タ廣漠ニシテ薄弱ニ失スルノミナラス法人設立者ノ目的例ヘハ貧民若クハ孤兒ヲ教育セントスルカ如キ又ハ學問技藝ヲ獎勵セントスルカ如キ特殊ノ目的ニ付テハ毫モ直接ノ效用ヲ見サルヲ以テ事實上設立者ノ本意ヲ達スル能ハサルモノタレハナリ

於是乎本條ハ此場合ノ如キ其法人ノ目的ニ類似セル目的ノ爲ニ其財産ヲ處分スルコトヲ得ルモノトセリ、故ニ其解散セシ法人カ救貧ヲ目的トセシモノ即チ救貧院ナリシハ或ハ其遺産ヲ以テ更ニ一ノ新ナル法人ヲ設立シテ救貧院ト爲

總 則 編

シ、或ハ其遺産ヲ他ニ現存セル救貧院若クハ類似ノモノタル孤兒院ニ寄附スル等ノ事ヲ爲スヲ得ヘシ、此ノ如ク之ヲ類似ノ目的ノ爲ニ處分スルハ理事カ主務官廳ノ許可ヲ得テ之ヲ爲スヲ要シ、又其法人カ社團法人ナリシハ總會ノ決議ヲ經テ之ヲ爲スヲ要ス、其官廳ノ許可ヲ要スルハ理事ノ專恣ニ因リ不當ノ處分ヲ爲スコトヲ豫防スルモノニシテ總會ノ決議ヲ要スルハ固ヨリ社員合同ノ意思即チ法人ノ意思ニ因リ之ヲ處分セシムルモノナリ、蓋シ社團法人ニ在リテハ總會ナルモノアルヲ以テ縱令定款ニ於ケル豫定方法ナクシテ法人設立者ノ意思ヲ知ル能ハサルモ此方法ニ因リテ法人其モノ、意思ヲ定メ得ルカ故ニ最モ適正ニ其遺産ヲ處分シ得ルモノト謂フヘシ

此場合ニ果シテ此規定ニ依リ其遺産ヲ以テ一ノ新法人ヲ設立シ又ハ其遺産ヲ他ノ既成ノ法人ニ寄附セントスルハ如何ナル方式ニ依リテ之ヲ爲スヘキヤト云フニ此行爲ヲ爲ス者ハ法人ナレバ其法人ハ既ニ解散シタルモノナルヲ以テ恰モ自然人カ遺言ヲ以テ或行爲ヲ爲ス場合ト同視スヘク、而シテ其行爲ノ性質ハ新法人ヲ設立スルハ即チ寄附行爲ニシテ既成ノ法人ニ寄附スルハ即チ遺贈

總 則 編

ニ外ナラス、故ニ前者ハ遺言ヲ以テスル寄附行爲トシテ遺贈ニ關スル規定ヲ準用スヘク、第四十一條後者ハ純然タル遺贈トシテ遺贈ノ規定ヲ適用スルモノトス。法人ノ遺産カ上述ノ方法ニ依リテ處分セラレザリシキハ如何、即チ本條第一項ノ歸屬權利者ナキハ第二項ノ處分ヲ爲スヘク、而シテ第二項ノ處分ナカリシキハ如何、第三項ハ此場合ニ於テハ之ヲ國庫ニ沒入スルコト爲シタリ、此場合タル元來設立者カ遺産ヲ何人ニ歸屬セシメント欲スルヤノ意思ヲ知ルニ由ナク、又設立者カ其財産ヲ供セントシタル目的ノ爲ニ處分スル能ハス、設立者ノ意思トシテ知り得ヘク且實行シ得ヘキハ唯公益ト云ヘル最モ廣キ一事ニ過ス、故ニ之ヲ國庫ニ沒入スルハ之ヲ一般ノ國用ニ供スル所以ニシテ設立者ノ公共心ニ背カサル所以ナリ、尤モ或國ノ法制ニ於テハ其法人ノ目的カ一地方ノ利益ニ關セシト全國ノ利益ニ關セシトヲ區別シ、前者ノ遺産ハ之ヲ其地方ノ金庫ニ沒入シ、後者ノ遺産ハ之ヲ國庫ニ沒入シ、且勉メテ其法人ノ目的ニ類似セル目的ニ使用スヘキ規定ヲ設ケタルモアリ、此ノ如キハ法人設立者ノ意思ニハ最モ能ク適合シ得ヘシト雖モ國庫若クハ地方庫ニ用途指定ノ費目ヲ増シ、或ハ煩雜ヲ招クノ

總 則 編

虞ナシトセス、故ニ寧ろ單ニ之ヲ國庫ニ沒入スルコトシ一般ノ國用ニ供スルノ設立者ノ意思ヲ失ハスシテ事實ノ簡便ヲ得ルニ若カス、故ニ無主財産ハ國庫ニ屬スルノ原則ニ依リ此ノ如ク最後ノ歸屬權利者ヲ以テ國庫ト定メタルナリ終リニ臨ンテ一言スヘキハ此法人ノ遺産ノ所有權カ歸屬權利者ニ移轉スル時期ノ事是ナリ、此遺産ヲ歸屬權利者ニ引渡スハ本條ノ首ニ解説シタル如ク清算事務ノ終末ニ於テスルモノニシテ而シテ法人ノ權利義務ハ其時ニテ決了セス、權利義務決了セザレハ歸屬權利者ニ歸屬スヘキ遺産ノ何物タルヲ及ヒ其數額モ亦確定セス、故ニ此權利義務ヲ決了シテ現實ノ引渡ヲ爲スマテハ所有權ヲ移轉セントスルモ亦能ハサルモノニシテ隨テ其移轉ハ其引渡ト相伴フモノト謂フヘシ

第七十三條 解散シタル法人ハ清算ノ目的ノ範圍内ニ於テハ其清算ノ結了ニ至ルマテ尙ホ存續スルモノト看做ス

本條ハ法人ノ資格存續ノ事ヲ定メタルモノナリ、法人ハ解散ニ因リテ消滅シ爾後其法人タル資格ナキモノタルハ言フ俟タス、然

總 則 編

ルニ法人ノ解散スルト同時ニ其一切ノ法律關係ハ決シテ消滅スルモノニ非ス、尙ホ許多ノ殘務アリテ之ヲ整理シ決了スルヲ要ス、此事務ヲ名ケテ之ヲ清算ト云ヒ、清算人ナル者ヲ設ケテ此事務ヲ執ラシム、而シテ法人ハ既ニ其資格ヲ失ヒタルニ因リ此清算人ハ法人ノ代理人タル資格ヲ有スルヲ得ス、法律ノ規定ニ依リ特ニ此事務ヲ執ル者ト謂フ可シ、是レ軍純ナル法理上ニ於テ當ツニ然ルヘキ所トス、然リト雖モ若シ此法理ヲ黑守スルキハ實際上清算事務ノ爲ニ種々ノ不便不都合ヲ生スルコト免レサルニ因リ法律ハ特ニ解散シタル法人ヲモ尙ホ法人タル資格ノ存續スルモノト看做シ、其結果トシテ清算人モ亦法人ノ代理人タル資格ヲ有セシムルヲ必要トス、是レ本條ノ特設アル所以ナリ

夫レ法人ハ其解散ニ因リテ直チニ消滅スルモノトセハ其住所モ亦同時ニ消滅スルヲ以テ其法人カ受クヘキ債務ノ辨濟モ其法人ノ住所第四百八ニ於テスルヲ得ス、又法人ノ普通裁判籍モ此ト同時ニ消滅スルヲ以テ清算事務ノ終結ニ至ルマテ屢起ルヘキ清算事項ニ係ル訴訟モ其法人ノ裁判籍民事訴訟法第十四條ニ於テスルヲ得ス、此等ノ事タル之ヲ法人ノ事務所タリシ場所ニ於テスルニ非サレハ實

總 則 編

際ノ不便甚タ大ナルニ、此ノ如ク其事務所ハ既ニ法人ノ住所タリ裁判籍タル能ハストセハ或ハ之ヲ清算人ノ住所ニ於テセサル可カラス、且夫レ社團法人ノ場合ニ在リテハ社員ハ其清算ニ付キ最モ利害ノ關係アルモノナレハ社員ノ總會ヲ開キテ直接ニ清算事務ヲ監督セシムルハ最モ適當ニシテ便宜ノ方法タルニ、法人既ニ消滅シタリトセハ社員ナルモノモ亦存在スヘキノ理ナク、社員既ニ存在セサレハ總會ヲ開カント欲スルモ亦能ハサルナリ、然ラハ則チ本條ノ必要ニシテ有益ナル亦甚タ明白ナリトス、況ヤ財團法人ノ如キ其法人既ニ消滅セリトセハ歸屬權利者ノ未タ確定セサル間ハ其財産ノ所有者ナク、清算人モ亦何人ノ代理人タルヤ明ニシ難キノ奇觀ヲ呈スルニ於テヲヤ

既ニ解散セル法人ヲ尙ホ存續スルモノト看做スノ主義ハ往時ヨリシテ認容セラレ、佛國商法ノ商事會社ニ於ケルカ如キ別ニ此事ヲ明言セサルモ暗ニ此主義ニ據リシハ學者ノ多ク認メシ所ナリ、我商法モ亦此ノ如ク其明言ナキニ止マリ此主義ニ據リシモノナルコトハ佛法ヨリモ一層明確ニシテ其第三百三十條ニ清算人ハ會社ヲ代理スト云ヘルカ如キ、第二百四十七條、第二百五十條、第二百五十一

條及ヒ第二百五十四條ニ總會ノ事ヲ言ヘルカ如ク皆之ニ外ナラス、然レモ此ノ如ク法人存續ノ事ヲ明言セスシテ單ニ其結果ノミヲ規定セシヨリ清算人ハ既ニ消滅シタル會社ヲ代理シ、又既ニ消滅シタル會社カ總會ヲ開クカ如キ奇觀ヲ生シ甚タ妄當ナラサルモノアリ、故ニ近世ノ法制ハ多ク此事ヲ明記スルニ至リ本條モ亦之ニ倣ヒタルモノナリ

既ニ此明記アレハ前述ノ事項ノ外清算人ノ行爲ハ總テ法人ノ代理人トシテノ行爲ト爲リ、其事甚タ明確ニシテ且簡易ナリ、其行爲ニ關スル種々ノ疑問モ皆之ニ依テ解釋スルコトヲ得ヘシ

第七十四條 法人カ解散シタルトキハ破産ノ場合ヲ除ク外理事其清算人ト爲ル但定款若クハ寄附行爲ニ別段ノ定アルトキ又ハ總會ニ於テ他人ヲ選任シタルトキハ此限ニ在ラス

屢述ヘシ如ク法人既ニ解散スレハ其殘務ヲ處理スルカ爲ニ所謂清算事務ナルモノアリ、然ルニ理事ハ法人ノ解散ニ伴ヒ當然其法人ノ代理人タル資格ヲ失フモノニシテ縱令前條ニ依リ法人ハ尙ホ存續スルモノト看做スモ理事ハ此ニ依リテ尙ホ其資格ヲ持續スヘキニ非ス、故ニ此清算事務ヲ處理スルニハ別ニ清算

總 則 編

總 則 編

人ナル者ヲ設ケテ之ニ任セサルヘカラス、即チ清算人ハ解散後尙ホ存續スル法人ノ代理人トシテ其事務ヲ決了スルモノナリ

然ラハ則チ清算人ハ何人ヲ以テ之ニ任スヘキヤ、本條ハ理事ヲ以テ之ニ充ツルコト爲シタリ、蓋シ恰モ法人ヲ其解散ニ拘ハラス尙ホ存續スルモノト看做スト同一ノ趣旨ニ依リ理事ノ其代理人タル資格ヲ尙ホ存續スルモノト看做シ、清算人ノ名ヲ以テ其事ヲ執ラシムルハ最モ自然ノ事態ニ適ス、殊ニ清算ノ事務タル其法人ノ殘務ヲ處理スルモノナレハ最モ其法人ノ從來ノ事實狀況ニ熟達シタル者ニ非サレハ清算人タルニ適セス、而シテ其最モ之ニ熟達シタル者ハ固ヨリ理事ニ若クモノアラサルヲ以テ實際上ニ於テモ亦最モ之ヲ便宜トスルナリ

舊法典ニ於テハ清算ハ總社員之ヲ爲シ、又ハ社員ノ一致ヲ以テ或社員若クハ第三者ヲ清算人ニ選任スルコトシ、財產取得編 又商法ニ於テモ社員之ヲ選任スルコトセリ、商法第二百二十九條及第二百三十二條然レモ此ノ如キハ財團法人ニハ全ク適用ス可カラサルノミナラス社團法人ニ在リテモ總社員之ヲ爲スハ社員ノ多數ナル場合ニハ甚タ不適當ノ制タリ、又社員カ之ヲ選任スルハ社員ノ欲亡ニ因ル解散ノ場

總 則 編

合ニハ亦適用スルヲ得ス、本條ノ理事ヲ以テスルノ簡ニシテ常ニ便ナルニ若カサルナリ

然リト雖モ清算人ノ選任ハ固ヨリ法人ノ自由ナルヲ以テ定款若クハ寄附行為ニ因リテ特ニ之ヲ定メタルハ、又ハ總會ニ於テ他人ヲ選任シタルハ當然之ニ從フヘク、本條理事ヲ以テスルノ規定ハ此等ノ定メナキ場合ニ供スル通則ニ過サルナリ、蓋シ清算事務ハ法人ノ事務ノ殘務ニ外ナラスト雖モ亦二者多少其趣ヲ異スル所アリ、隨テ理事ニ適任ナル者モ必シモ清算人ニ適任ナリトス可カラズ、故ニ法人ハ他人ヲ選任セントスルコアルヘク、其之ヲ許容スヘキヤ亦論ナキノミ

然ルニ定款若クハ寄附行為ニ別段ノ定ナク又總會ニ於テ他人ヲ選任スルノ意ナク理事ハ當然清算人ト爲ルヘキ場合ニ於テ理事タル者自ラ其任ヲ辭シ又ハ法人カ其理事ノ任ヲ解キ理事ヲ缺キタルハ如何スヘキヤ、他ナシ此場合ハ定款若クハ寄附行為ニ關シタル理事選任ノ方法ニ依リ更ニ理事ヲ選任シ其理事ヲ以テ清算人ト爲スヘシ、若シ夫レ此事モ亦行ハレサル場合ニ至リテハ則チ次

總 則 編

條ニ屬スル一場合トシテ其規定ニ從フヘキモノトス

尙ホ本條ハ破産ノ場合ヲ除外セリ、此除外ハ但書ノ場合ニモ及フモノニシテ破産ニ因リ解散セル場合ハ管ニ理事ヲ以テ清算人ト爲スヘカラサルノミナラズ定款若クハ寄附行為ニ於ケル別段ノ定ニ依リ又ハ總會ノ選定ニ依リ他人ヲ以テ清算人ト爲スコトモ之ヲ得ス、是レ此場合ハ破産法ノ規定ニ依リ法人ノ殘務ハ清算事務トシテ之ヲ處理セス、別ニ破産處分トシテ特別ノ處分ヲ爲シ、且其處分ハ裁判所カ其職權ヲ以テ自ラ破産管財人ヲ撰任シ以テ之ヲ取扱ハシムルモノナルニ因リ清算人ハ之ヲ置クノ必要全ク存セサルナリ

第七十五條 前條ノ規定ニ依リテ清算人タル者ナキトキ又ハ清算人ノ缺ケタル爲メ損害ヲ生スル虞アルトキハ裁判所ハ利害關係人若クハ檢事ノ請求ニ依リ又ハ職權ヲ以テ清算人ヲ選任スルコトヲ得

清算人ハ前條ノ規定ニ依リテ其選任ノ方法ヲ詳ニシタリト雖モ亦時トシテハ清算人タル者ナキコトアリ、又清算人ノ缺ケルコトアリ、例ヘハ理事カ清算人ト爲リタル後死亡シタルニ定款若クハ寄附行為ニ於テ之ニ關スル別段ノ規定ナク、且

總 則 編

總會ニ於テモ其選任ヲ爲サ、ル場合ノ如キ、其他清算人ノ死亡、辭任又ハ次條ニ依ル解任等ニ因リ清算人ノ定員ニ缺員ヲ生シ、又ハ全ク缺亡シタルモ、於テ法人ハ尙ホ存續スルモノト看做スヲ以テ其後任者ヲ選任シ得サルニ非サルモ財團法人ニ於テハ之ヲ選任スルノ人ナク、社團法人ニ於テモ社員ノ缺亡ニ因リ解散セシキハ亦之ヲ選任スルノ人ナク、遂ニ清算人ノ曠缺ヲ如何モスルヲ能ハス、而シテ此ノ如ク清算人既ニ缺亡スレバ、法人ノ財産ハ之ヲ管理シ處分スル者ナク、債權者、債務者及ヒ歸屬權利者ノ損害タル少シトセス、故ニ此場合ハ清算事務ヲ監督スルノ職權アル裁判所カ其清算人ヲ選任スルヲトセリ、尤モ此選任ハ或ハ利害關係人ノ請求ニ因リ、或ハ檢事ノ請求ニ因リ、又或ハ裁判所自己ノ職權ニ依リ之ヲ爲スコヲ得ルナリ

本條ハ恰モ理事ノ缺ケタル場合ニ裁判所カ假理事ヲ選任スル第五十六條ト同種ノ規定ニシテ唯該條ハ理事ノ後任者ハ法人自ラ之ヲ選任スヘキニ拘ハラス其選任ノ遲滯スル場合ノミナルモ、本條ハ之ニ異ナリ清算人ノ缺亡シテ後任者ノ選任ヲ得サル場合ヲ主タル目的トセリ、然レモ亦本條ハ該條ノ如ク法人カ自

總 則 編

ラ清算人ノ後任者ヲ選任スヘキモ其遲滯スヘキ場合ヲ併セ包含スルハ疑ハ容レズ、或ハ此事ニ付キ反對ノ説ヲ爲ス者アリ、曰ク該條ニハ「遲滯ノ爲メ」ノ一語アリテ法人カ自ラ後任者ヲ選任スルモ其事遲滯スル場合ナルヲ明ナルノミナラス裁判所ノ選任スルハ假理事ナルヲ以テ法人自ラ後任者ヲ選任スルマテノ間ヲ補フモノナルモ、本條ハ之ニ反シ「遲滯ノ爲メ」ト明言セス、又裁判所ノ選任スルハ眞ノ清算人ニシテ一時ノ假攝ニ非ス、故ニ法人自ラ清算人ノ後任者ヲ選任シ得ル場合ハ縱令其選任遲滯スルモ本條ニ依リ裁判所カ之ヲ選任スルヲ得ス、即チ此ノ如キ場合ハ本條ノ包含セサル所ナリト、是レ亦深ク思ハサルノ誤見ニ過ス、本條ハ實ニ「遲滯ノ爲メ」ノ語ナキモ「清算人ノ缺ケタル爲メ損害ヲ生スル虞アル」トアルハ遲滯ノ場合ヲ指稱スルモノニ非ストセハ其損害ヲ生スル虞アルト一語ハ全ク無用ノ冗文タラサルヲ得ス、何トナレハ清算人既ニ缺ケテ法人ハ其後任者ヲ選任スルヲ得サルハ縱令何等ノ損害ヲモ生セストスルモ苟モ清算事務ヲ抛擲セサル以上ハ必ス裁判所ヨリ之ヲ撰任セサル可カラスシテ「損害ヲ生スル虞アル」ト否トハ毫モ問フヲ要セス、法文ハ「清算人ノ缺ケタル

并「下記スルヲ以テ足レリトス、然ルニ尙ホ此ノ如ク「損害ヲ生スル虞アル」ヲ以テ一ノ要件ト爲セシハ後任者ハ法人自ラ之ヲ選任スルノ途アルモ其遲滯ノ爲メ損害ノ生スル虞アレハ特ニ裁判所ヨリ之ヲ選任スルヲ得トノ意ナルコトヲ知ルヘク、而シテ「遲滯ノ爲メ」一語ナキハ本條ハ第五十六條ト前後ノ文勢ヲ異ニシ文章上此語ヲ挿ミ難ク、且之ヲ挿マサルモ亦其意ヲ知リ得ヘキヲ以テナリ、然リ而シテ此場合ニ裁判所ノ選任スル清算人ハ第五十六條ノ如ク假攝ノモノニ非サルハ亦別ニ其理アリ、本條ノ所謂「清算人タル者ナキ」即チ「清算人歎亡シテ法人自ラ後任者ヲ選任スルノ途ナキ場合ニ付テハ裁判所カ本清算人ヲ任スルノ當然ナル」コト説明ヲ俟タス、又本問タル法人カ自ラ後任者ヲ選任シ得ル場合ニ付テハ唯其遲滯スヘキカ爲ニ法人ノ權利ヲ奪ヒ裁判所ヨリ清算人ヲ付與スト云フハ少シク奇異ノ感ナシトセス、然レモ「理事ト清算人トノ間ニ存スル差異ノ大ナルヲ知ラハ第五十六條カ之ヲ假理事トセシニ拘ハラヌ本條カ之ヲ本清算人トセシ」所以ヲ知ルニ難カラサルヘシ、元來理事ハ或範圍内ニ於テ廣大ノ代理權ヲ有シ、法人ノ事業ヲ計畫シ、方針ヲ左右シ、種々ノ施設變動ヲ爲シ得ルノミナラス

總 則 編

總 則 編

其任期モ亦通例甚々短カラス、故ニ此ノ如キ者ハ成ル可ク法人ノ自ラ選任スル所ニ任スルヲ要シ、裁判所ハ單ニ一時ノ急ニ應スルノ處置トシテ假理事ヲ選任スルニ過ス、然ルニ清算人ハ單ニ法人ノ殘務ヲ處理スルモノニシテ未決ノ權利義務ヲ決了シ財産ヲ引渡ス等殆ト所謂刀筆的事務ニ止マリ、且其任期ハ清算事務ノ結了ノ時ニ至リ自然ニ消滅スルモノニシテ決シテ永久ノモノニ非ス、故人自ラ之ヲ選任セントスルモ其事遲滯セルハ裁判所カ代リテ之ヲニ法選任シ事務結了マテ其任ヲ繼續セシムルモ別ニ法人ノ自由ヲ奪フ程ノ事實ニ非ス、殊ニ清算人ノ如キハ屢之ヲ更任スルハ不便不利タルノミナラス極言スレハ屢之ヲ更任スルノ時間ナク粉々ノ間ニ其事務ヲ結了スルコト亦尠カラサルヘシ、由是觀之本條ノ旨趣タル清算人ヲ得ル能ハサルハ勿論、一旦選任セシ清算人缺ケテ法人自ラ後任者ヲ選任シ得ヘキモ其事遲滯シテ損害ヲ生スヘキ場合ハ裁判所ヨリ清算人ヲ選任シ其結了ニ至ルマテ事務ヲ執ラシメ、法人カ其後ニ至リ自ラ選任セト欲スルモ亦能ハサルモノタルハ實ニ疑ヲ容レサルナリ

第七十六條 重要ナル事由アルトキハ裁判所ハ利害關係人若クハ檢事ノ請求ニ因リ又ハ

職權ヲ以テ清算人ヲ解任スルコトヲ得

清算人ハ法人ノ代理人ニシテ代理人ハ委任者ヨリ何時ニテモ之ヲ解任シ得ルヲ原則トスルモ清算人ハ此原則ニ依ルコト無ク本條ハ特ニ之ヲ重要ナル事由アルキニ限り裁判所ヨリ解任シ得ルノミト爲シタリ

總 則 編

〔重要ナル事由〕トハ清算人カ其職權ヲ濫用シテ私利ヲ營ミ若クハ其職務ヲ謹守セシテ安リニ財産ヲ賤售シ債權ヲ拋棄シ又ハ其職務ヲ曠廢シ安リニ拋擲シテ願ミサルカ如キ其職任ニ堪エサル重大ノ事實理由アル場合ヲ云フ而シテ實際ニ上或行爲若クハ事實因果シテ之ニ該當スルヤ否ハ全ク事實問題ニシテ豫メ其標準又ハ範圍ヲ論定スル能ハス要スルニ裁判所ノ職權ニ於テ隨意ニ之ヲ認定スルコトヲ得ルナリ

然リ而シテ裁判所カ此事由ニ因リ解任ヲ爲スハ利害關係人若クハ檢事ノ請求ニ因ルノミナラス自ラ職權ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得ヘシ蓋シ裁判所ハ法人ノ解散及ヒ清算ヲ監督スルノ權アルモノナレハナリ第八十二條參看

商法第一百三十一條ニ依レハ其命令ニ對シ即時抗告ヲ爲スコトヲ得トノ但書アリ本法草

總 則 編

案ニ於テモ亦同文ノ但書アリ第一草案第七十四條第二項故ニ裁判所カ解任ノ命令ヲ下セシキハ清算人ヨリ即時抗告ヲ爲スコトヲ得ヘク又利害關係人若クハ檢事ヨリ解任ノ請求ヲ爲セシニ裁判所其請求ヲ却下セシキハ其請求者ヨリ亦即時抗告ヲ爲スコトヲ得ヘシ然ルニ本條ハ遂ニ此但書ヲ削去シタルヲ以テ法文ナケレハ之ヲ爲スコトヲ得ス然レモ此事タル一方ハ清算人ノ名譽責任ニ他ノ一方ハ法人及ヒ其利害關係人ノ利害ニ重大ノ關係アルモノナレハ想フニ他日民事訴訟法ニ改正ヲ加ヘ以テ其抗告ヲ許スノ規定ヲ設ケラルヘシ本條カ之ヲ削去セシハ之ヲ手續法ニ讓ルノ意タルヲ信スルナリ

第七十七條 清算人ハ破産ノ場合ヲ除外解散後一週間内ニ其氏名、住所及ヒ解散ノ原因年月日ノ登記ヲ爲シ又何レノ場合ニ於テモ之ヲ主務官廳ニ届出ツルコトヲ要ス

清算人中ニ就職シタル清算人ハ就職後一週間内ニ其氏名、住所ノ登記ヲ爲シ且之ヲ主務官廳ニ届出ツルコトヲ要ス

清算人ハ其就職ノ劈頭第一ノ義務トシテ本條ノ登記及ヒ届出ヲ爲スコトヲ要ス、蓋シ法人ハ單ニ法律ノ擬制ニ依リテ存立スルモノナレハ其存立ノ有無ハ特ニ

正確ノ方法ニ因リテ公示スルニ非サレハ之ヲ確知セシムルヲ得ス、故ニ其設立ノ初ニ之ヲ登記スルカ如ク其解散ニ當リテモ亦登記ニ因リテ其解散セシム及ヒ之ニ關スル必要ノ事項ヲ公示スルヲ要ス、清算人若シ之ヲ怠レハ則チ第八十四條ノ制裁ヲ免レサルナリ

此登記ヲ爲スニ付キ破産ノ場合ヲ除外セサルハ此場合ニ於テハ破産法ニ依リ一層嚴密ノ公示方法アルヲ以テ本條ノ登記ヲ要セサルニ因ル、但タ本條「破産ノ場合ヲ除ク外」ノ一語ハ余ハ其無用ノ冗文ナランコトヲ疑フ、何トナレハ破産ノ場合ハ清算人ヲ置カサルモノ第七十條ナルヲ以テ既ニ「清算人ハ」ト云ヘハ破産ノ場合ヲ包含セサルコト自ラ明白ナルノ理ナレハナリ

主務官廳ニ届出ツルハ法人ノ設立既ニ其許可ニ依リ且設立後終始其監督ヲ受ケシモノナルヲ以テ今之ヲ解散セシニ當リテモ亦之ヲ届出ツヘキハ當然ノ事理タルナリ、而シテ此届出ハ前段ノ登記ト異ナリ破産ノ場合ト雖モ亦之ヲ爲スコトヲ要ス、法文「何レノ場合ニ於テモ」トアルハ前段破産ノ場合ヲ除ク外トアルニ對シ該場合ヲモ包含スルコトヲ示スモノナリ、尙ホ此届出ハ登記ト共ニ解散後一週

總 則 編

間内ニ於テスルヲ要スルヤ否ヤ、法文ニ依リテハ明確ノ判斷ヲ爲スニ困シムモ理論上ヨリ之ヲ推スニ必シモ此期間ヲ届出ニモ適用スルニ非サルヘシ、何トナレハ官廳ノ届出ハ登記ノ如ク第三者ノ利害ニ關係スルモノニ非サルヲ以テ強ヒテ一定ノ期間ニ依リ之ヲ促スノ必要ナキノミナラス縱令此期間ニ從ハシムルノ意ナリトスルモ登記ノ如キ制裁ナキニ因リ其實效アラサレハナリ、但果シテ然リトスルモ此届出ハ其事ノ性質上固ヨリ勉メテ之ヲ速ニスヘキハ亦言ヲ竣タサルナリ

此届出ニ付テハ更ニ一問題アリ、破産ノ場合ニ於テハ何人カ此届出ヲ爲スヘキヤノ點是ナリ、破産ノ場合ト雖モ此届出ヲ爲スヘキハ前述ノ如ク疑ヲ容ルヘキニ非ス、而シテ本條ノ法文ニ依レハ此届出ハ總テ清算人ノ義務トシテ規定セシモノナルモ破算ノ場合ハ固ヨリ清算人ナキモノニシテ本條ハ毫モ此事ニ付キ別段ニ示ス所ナシ、然ラハ則チ何人カ果シテ之ヲ爲スヘキ乎、某學士ハ此問題ニ答ヘテ此義務ヲ負フ者ハ法人ノ理事ナリト明言シ、而シテ一モ其理由ヲ示サス法典一録二號第一故ニ其趣旨ノ如何ヲ知ルヲ得スト雖モ余ハ之ニ首服スル能ハス、蓋

總 則 編

總 則 編

シ法人既ニ解散スレハ此ト同時ニ理事ハ其資格ヲ失フモノニシテ解散後ニ理事ナルモノアルノ理ナク且本法ハ此理ニ依リ商法カ本條ノ登記ト届出トヲ併セテ理事(即チ取締役)ノ義務ト爲セシヲ改メ商法第二百三十四條清算人ノ義務ト爲セシモノナレハ本法ニ於テハ明ニ解散後ニ理事アルヲ認めサルナリ然ルニ本問ノ場合ノミニ限り如何ソ明文モ無キニ之ヲ理事ノ義務ナリト輕々ニ斷言スルヲ得ンヤ果シテ然ラハ既ニ理事ニ非ス又清算人アルヲ得ス已ナクンハ夫レ破産管財人ナル歟本條カ單ニ清算人ト記シ而シテ破産ノ場合ニハ何人タルヲ言ハザリシヲ以テスレハ尙ホ此精神ニ依リテ推究シ普通ノ場合ニ於ケル清算人ノ地位職務ハ破産ノ場合ニ於テハ破産管財人カ全ク之ニ代フルモノナルニ因リ此届出ノ義務モ又破産管財人カ之ヲ負フモノトスルハ余ハ其最モ適當ノ論斷タルヲ信スルナリ

第二項ノ「清算中ニ就職シタル清算人」トハ解散後始テ任セラレシ清算人ニ非スシテ其清算人カ死亡辭任又ハ解任シタル後ヲ承ケテ就職シタル者ヲ主ハラ指稱スルモノトス故ニ此清算人ハ最初ノ清算人ノ如ク解散ノ原因年月日ハ之ヲ

總 則 編

登記シ又ハ届出ツルノ義務ナキモ自己ノ氏名住所ハ之ヲ登記シ且届出テサルヘカラス是レ其氏名住所ノミ最初ノ清算人ノ登記及ヒ届出ト變更シタルモノナレハナリ此場合ノ登記モ亦一週間内ニ於テスヘキモ其起算點ハ固ヨリ第一項ト異ナリ其就職ノ時ト爲シ此時ヨリ起算シテ一週間内ニ之ヲ爲サレハ亦第八十四條ノ制裁ヲ免レサルナリ

最後ニ本條全体ノ適用ニ關スル一問題ヲ附述セン
法人解散後清算人タルヘキ者ナク又ハ清算人ノ缺ケタルニ因リ裁判所之ヲ選任スル場合第七十五條ニハ實際上急ニ茲ニ至ラスシテ其選任ノ解散後一週間ヲ過クルコト無キヲ保セス此場合ニ於テハ其選任ヲ受ケタル清算人ハ受任ノ當時既ニ解散後一週間ヲ過シモノナレハ固ヨリ本條第一項ノ期間ニ從フ能ハス且此レカ爲ニ第八十四條ノ制裁ヲ受クルコト無キハ多言ヲ要セサルモ此場合ニハ如何ナル期間ニ登記スヘキモノト爲スヤ抑亦何等ノ期間ニモ從ハサルモノトスル歟是レ實際ニ屢生スヘキ問題ナリ

此問題ニ關シテモ亦前記某學士ノ解答アリ此解答ハ略其當ヲ得タルヲ覺フ即

總 則 編

チ此場合ハ本條第二項ニ依リ其就職後一週間内ニ登記ヲ爲セハ可ナリト爲ス
 モノニシテ其趣旨ニ曰ク「本條第三項ハ解散ノ原因年月日ヲ登記スヘキコトヲ規
 定セサルカ故ニ法人ノ解散ニ際シテ就職シタル清算人カ解任又ハ其他ノ事由
 ニ因リテ其資格ヲ失ヒタル爲メ更ニ他ノ清算人ヲ選任シタル場合ヲ主トシテ
 指稱スルモノナリト雖モ法人ノ解散スル時ハ直チニ其清算時期ニ移ルモノナ
 ルヲ以テ實際清算ニ着手シタルト否トヲ問ハス法人解散ノ時清算ノ結了ニ至
 ルマテ總テ之ヲ「清算中」ト云フ可ク隨テ本問ノ解散後一週間ヲ經テ就職シタル
 清算人モ亦本條第二項ノ所謂清算中ニ就職シタル清算人」ト云フヲ得ヘシ故ニ
 第二項ニ依リテ其就職後一週間内ニ登記ノ手續ヲ爲スコトヲ得ヘキナリ尤モ此
 場合ニ於テハ尙ホ解散ノ原因年月日ノ登記ナキカ爲メ清算人ハ其氏名住所ノ
 ミチラス解散ノ原因年月日ヲモ併セ登記セサル可カラス之ヲ要スルニ清算人
 カ解散後一週間ヲ過キ始テ就職シタルキハ本條第一項及ヒ第二項ノ規定ニ依
 リテ登記ヲ爲スヘキモノト謂フヘシ本條ニ特ニ本問ノ場合ヲ規定セサリシハ
 本法ノ精神ニ於テハ總テ一週間以内ニ清算人ノ選任ヲ爲サシメント欲セシニ

總 則 編

因ルナリト法典質疑錄第三號 第一〇六頁參看所論多少ノ曲解ヲ免レサルモ實際上亦此ノ如ク
 論定セサルヲ得サルヘシ

第七十八條 清算人ノ職務左ノ如シ

- 一 現務ノ結了
- 二 債權ノ取立及ヒ債務ノ辨濟
- 三 殘餘財産ノ引渡

清算人ハ前項ノ職務ヲ行フ爲メニ必要ナル一切ノ行爲ヲ爲スコトヲ得

清算人ハ法人ノ最後ノ事務ヲ終了スルモノナレハ一切ノ關係ヲ處理シテ後日
 ニ殘存スルコト勿ラシムルヲ要ス故ニ本條ハ三種ノ事項ヲ列舉シテ其職務ヲ示
 シタリ其第一號ハ明瞭ナルヲ以テ之ヲ省キ第二號以下ニ付キ左ニ之ヲ説明セ
 ン

第二債權ノ取立及ヒ債務ノ辨濟 法人ノ債權ノ未タ辨濟ヲ受ケサルモノハ
 之ヲ要求シ法人ノ負債ハ之ヲ辨償シ借用物ハ之ヲ返還スル等總テノ義務ヲ履
 行シ第三者ニ對スル法律關係ヲ結了スルモノナリ但此債務ノ辨濟ヲ爲スニ付

總 則 編

テハ次條ノ手續ヲ爲スコトヲ要ス然リ而シテ法人解散ノ時ニ於テ未タ辨濟期限ニ至ラサル法人ノ債務又ハ要求期限ニ達セサル法人ノ債權ハ之ヲ如何ニ處分スヘキヤ此場合ニ於テ之ニ處スルノ法ハ唯二途アルノミ即チ双方協議シテ相當ノ割引ヲ爲シ以テ之ヲ支拂ヒ若クハ要求シ又ハ其正當期日ヲ待テ前約ノ通り支拂ヒ若クハ要求スルニ在リ此二法中其一ヲ選擇スルハ清算人ノ權内ニ在ルモノトス何トナレハ清算人ノ權限ハ本條第二項ニ依リテ甚タ廣汎ニ密々代理人トシテ管理行爲ヲ爲スニ止マラス尙ホ且財產ヲ處分スルノ權ヲモ有スルモノナレハナリ

第三殘餘財產ノ引渡 法人ノ財產ハ前二號ノ處置ヲ了シテ尙ホ殘餘アレハ之ヲ歸屬權利者ニ歸屬セシメ第七十二條ニ依リテ其定マリタル歸屬權利者ニ之ヲ引渡スヘキモノトス即チ該條第二項ノ場合ノ如キハ理事カ解散ノ當時ニ其處分ヲ豫定シ而シテ清算人ハ清算事務ノ終末ニ至リ其豫定ニ從ヒテ引渡ヲ爲スモノナリ

清算人ノ職務ハ實際種々アルモ要スルニ此三種ノ範圍ヲ出テス其他外國ノ法

總 則 編

典ニ於テハ往々換價處分ヲ以テ必要ナル清算事務ノ一ト爲スモノアリ我商法第十條三ノ如キモ亦然リ抑換價處分トハ法人ノ一切ノ財產ヲ賣却シテ金錢ニ換ユルノ謂ヒニシテ債務ノ辨濟及ヒ殘餘財產ノ分配ニ供スルモノナリ蓋シ債務ノ辨濟ノ爲ニハ通例此處分ヲ要スルコト多カルヘク若シ果シテ然ラハ清算人ハ本條第二項ニ依リ之ヲ爲スコトヲ得ヘシ然レモ之ヲ以テ清算人ノ必要ナル職務ト爲スハ本條ノ執ラサル所ナリ何トナレハ商事會社其他營利的法人ニ在リテハ金錢上ノ利益ヲ目的トスルヲ常トシ隨テ殘餘財產ノ分配モ亦金錢ヲ以テスヘキコト其多キニ居ルト雖モ公益的法人ハ第七十二條第一項ニ依ル歸屬權利者ニ殘餘財產ヲ歸屬セシムルコト雖モ必シモ多數ノ社員ニ分配スルニ非サルヲ以テ其財產ノ現狀ノマニテ引渡スコトヲ得ヘク殊ニ該條第二項ニ依リ類似ノ目的ノ爲ニ處分スルコトハ亦其現狀ノマニテ寄附スルヲ常トシ第三項ニ依リ國庫ニ渡スルモ亦然ルヲ以テ換價ヲ必要ノ處分ト爲スノ理ナケレハナリ
清算人ノ職務ハ以上陳述セル所ノ如シ故ニ其職權モ亦之ニ伴ヒ其職務ヲ行フニ必要ナル行爲ハ總テ之ヲ爲シ得ルヲ以テ其範圍ト爲スハ當然ノ論理トス是

總 則 編

ヲ以テ或行爲ヲ爲スノ權限アルヤ否ヲ知ラント欲セハ其行爲カ右ノ職務ヲ行
 フニ必要ナルヤ否ヲ判定スルヲ要シ、苟モ必要ナリトセハ如何ナル行爲ト雖モ
 之ヲ爲シ得ヘク、隨テ從來ノ業務ヲ保續シ又ハ新ニ取引ヲ爲シ、其他和解契約仲
 裁契約ヲ爲シ訴訟行爲ヲ爲スカ如キ皆其權内ニ在リ、而シテ其重要ナル行爲ヲ爲
 サンカ爲メニ總會ヲ招集シテ其議決ヲ求ムルカ如キハ亦本條ニ依リテ之ヲ爲
 シ得ルモノトス、是レ即チ第七十三條ノ結果ニ因リテ然ルナリ

抑、清算人ノ權限タルヤ社團法人ニ在リテハ社員カ之ヲ制限スルコトヲ得ルヤ、商
 法ニ於テハ明文^{第百三十一條}ヲ以テ之ヲ制限スルコトヲ得スト爲セリ、然ルニ本法ハ何
 等ノ法文ナシ、如何ニ之ヲ論定シテ可ナルヤ、亦商法ト同シク其制限ヲ得サルモ
 ノトシテ可ナラン歟、何トナレハ本法ハ本條ヲ以テ清算人ノ權限ハ此ノ如シト
 一定シ、別ニ何等ノ法文ヲモ置カサルハ之ヲ一定不變ノモノト爲スニ外ナラサ
 レハナリ

是故ニ社員ハ如何ナル場合ニ於テモ之ヲ制限スルコトヲ得ス、縱令之ヲ制限スル
 モ亦無効ニシテ第三者ニ對シ之ヲ主張スルコトヲ得ス、即チ清算人カ其制限ヲ超

總 則 編

ヘテ本條ノ職權ヲ行フモ社員ハ其制限超越ヲ理由トシテ相手方タル第三者ニ
 對シ其行爲ノ無効ヲ主張スルコトヲ得サルナリ

然ラハ則チ其制限ノ無効ハ絕對的ナリヤ、將タ相對的ナリヤ、換言スレハ其制限
 ハ單ニ第三者ニ對シテノミ無効ナル歟、將タ社員間ニ於テモ無効ナル歟、是レ蓋
 シ相對的無効ニシテ社員相互ト清算人トノ間ニ於テハ隨意ニ制限スルコトヲ得
 ヘク、隨テ清算人カ其制限ヲ超ヘテ社員ニ損害ヲ蒙ラシメタルハ此レカ賠償
 ヲ請求スルコトヲ得ヘキハ論ヲ俟タサルナリ

第七十九條 清算人ハ其就職ノ日ヨリ二个月内ニ少クトモ三回ノ公告ヲ以テ債權者ニ對
 シ一定ノ期間内ニ其請求ノ申出ヲ爲スヘキ旨ヲ催告スルコトヲ要ス但し其期間ハ二个月
 ヲ下ルコトヲ得ス

前項ノ公告ニハ債權者カ期間内ニ申出ヲ爲ササルトキハ其債權ハ清算ヨリ除外セラル
 ヘキ旨ヲ附記スルコトヲ要ス但し清算人ハ知レタル債權者ヲ除外スルコトヲ得ス

清算人ハ知レタル債權者ニハ各別ニ其申出ヲ催告スルコトヲ要ス

本條ハ清算人ヲシテ法人ニ對スル債權者ニ其請求ヲ申出ツヘキコトヲ催告スル

公告ヲ爲スヘキ義務ヲ命シタリ、然レモ清算人ハ先ツ法人ノ帳簿並ニ財産等ヲ調査シ豫メ其貸方借方等ヲ詳ニスルノ必要アルヲ以テ本條ハ其猶豫ヲ與ヘテ二个月内ニ之ヲ爲スヘキトセリ、故ニ其就職ノ日ヨリ起算シテ二个月内ニ此公告ヲ爲シ、且本條ノ回数即チ三回ノ公告ハ從テ之ヲ其二个月内ニ了スルヲ要ス

總 則 編

公告ノ方法ハ本條之ヲ定メス、故ニ清算人ハ隨意ノ方法ヲ用ユルヲ得ヘキモ之ヲ新聞紙ニ掲載スル等總テ可及的普及シ易キ方法ヲ選フヲ要ス、而シテ此公告ヲ三回以上爲スヘキトセシハ債權者中若シ此公告アリシト知ラスシテ申出ヲ爲サス遂ニ其權利ヲ失フ者アラシク慮カリ數回之ヲ反覆セシムルニ在リ、此趣旨ヨリシテ難說ヲ爲ス者アリ、曰ク此三回トハ新聞紙ニ二日三日連掲スルモ是レ唯一回タルモノニシテ必ス間ヲ隔テ端ヲ改メ三度ノ公告ヲ爲スヲ要スト、法意果シテ然ル乎、余輩ハ信ス讀テ字ノ如ク三回ハ三回ニシテ日刊新聞紙ニ三日間掲載スレハ即チ三回ノ公告ヲ爲シタルモノナルヲ、但タ實際ニ於テ連日掲載センヨリハ日ヲ隔テ、掲載スルノ普及ニ便ナルヲアラン、是レ全ク清算

總 則 編

人ノ隨意ニシテ必要ノ方法ト云フニ非サルナリ、然リ而シテ此公告ニハ其請求ノ申出ヲ爲スニ付テ一定ノ期間ヲ設クルヲ要ス、則チ公告ヲ爲シテ即時ニ申出テシメントスルハ不當ナルヲ以テ相當ノ猶豫期間ヲ設ケ其期間内ニ申出テシムルナリ、其期間ノ長短ハ債權者ノ多少、從來取引先ノ遠近關係ノ範圍等實際ノ事情ニ依リ清算人ニ於テ債權者ノ申出ヲ爲スニ差支ナカルヘキ期間ヲ量定シ、適宜ニ之ヲ定ムルヲ得ヘク、或ハ七十日ト爲シ、或ハ百日ト爲ス等一ニ其隨意タリ、但タ二个月以下ノ期間ト爲スヲ得ス、是レ此期間ヲ與フルノ短促ニ失スルハ殆ト其實效ナキニ至ルヲ以テ本條ハ其最短期ヲ定メ必ス其以上ノ期間ト爲スヲ要スルモノナリ、又此公告ニハ若シ債權者カ右ノ期間内ニ其申出ヲ爲サ、リシハ其債權ヲ清算ヨリ除斥スル旨ノ附記ヲ爲サ、ル可カラス、是レ債權者ノ注意ヲ喚起センカ爲ナリ、既ニ三回以上ノ公告ヲ爲シ以テ債權者ヲシテ万之ヲ知ラサルノ憂ナカラシメ、且其申出ノ期間ハ二个月以上アリテ申出ヲ爲スノ時間ニ十分ノ餘裕ヲ與ヘタルニモ拘ハラス債權者カ其申出ヲ爲サ、リシハ最早債權者チキモノ

總 則 編

ト看做シ、法人ノ債務ト現財産トヲ比較シテ清算ノ確定ヲ爲スベク、此期間ニ申出ヲ爲サ、リシ債權者ハ唯次條ノ辨濟ヲ受クルコトヲ得ルノミ、若シ夫レ此ノ如ク爲スニ非サレハ清算人ノ定メシ期間ハ其效用ナクシテ清算事務ノ徒ラニ延滞スルニ至ランヲ恐ル、是レ此規定アル所以ナリ

然ルニ此期間ヲ定メテ債權ノ申出ヲ爲サシムル所以ハ未タ知レサル債權者ノ在ルアランヲ恐ル、ノ故ナルヲ以テ其既ニ知レタル債權者ハ假令未タ其申出アラスト雖モ清算人ハ之ヲ清算ヨリ除斥スルコトヲ得ス、啻ニ當然之ヲ除斥スルヲ得サルノミナラス其知レタル債權者ニ對シテハ右ノ公告ニ關セズ、特ニ各別ニ其申出ヲ催告スルコトヲ要スルナリ

本條規定ノ趣旨ハ上述略之ヲ盡クセリ、然ルニ此規定ニ關シテ一ノ注意スヘキモノアリ、清算人ハ右公告ニ定メタル期間ノ滿了前ニ於テ債權者ニ支拂ヲ爲シ始ムルコトヲ得ルヤ否ノ問題はナリ、此事タル商法ニ於テハ明文第二百四十四條ヲ以テ之ヲ規定シ、期間滿了ニ至ラサレハ支拂ヲ始ムルコトヲ得スト爲セシモ本法ニハ此ノ如キ明文ナシ、然ルニ論者或ハ本法ニ付テモ本條ノ推及論法上ヨリ尙ホ商法

總 則 編

ノ如クナラサルヲ得スト爲ス者アリ、曰ク元來本條ニ依リテ債權申出ノ期間ヲ公告シタルルルハ期間滿了ニ至ルマテハ如何ナル債權者ノ現出スルアランモ知ル可カラズ、然ルニ其滿了ヲ待タズシテ債權者ニ對シ支拂ヲ爲スアラハ其後ニ申出ヲ爲セシ債權者ハ爲メニ損害ヲ被ルノ虞ナシトセズ、何トナレハ法人ノ財産夥多ニシテ總テノ債權ヲ償フニ足ルルハ則チ可ナルモ、若シ其不足ナルニ於テハ第八十一條ニ依リ破産宣告ヲ請求シ、破産手續ニ依リテ各債權者ニ對シ其債權ノ額ニ比例シテ平等ニ分配ヲ爲サ、ル可カラサルニ勿卒一二ノ債權者ノミニ支拂ヲ爲シ了セハ他ノ債權者ハ一人ニテ全ク其損失ヲ負擔セサル可カラサルニ至ル、尤モ此場合ニ於テハ第八十一條第三項ニ依リ其支拂ヒタルモノヲ取戻シ得ルト雖モ此取戻權ハ往々空名ニ止マリ、實際之ヲ返還シ能ハサルニ至ルモノ尙ホ之ニ反對シテ辨濟期限ノ既ニ至リシ債權ニ對シテハ此期間滿了前ト雖モ固ヨリ之ヲ支拂フコトヲ得ヘキノミナラス義務トシテ之ヲ支拂ハサル可カラスト信ス、元來法人ノ解散ハ期限ノ利益ヲ失フモノニシテ此事ハ第三百三十

總 則 編

七條ノ明示セサル所ナリト雖モ法人ハ解散ニ因リテ死亡シ、而モ相續人ヲ有セサルモノナルヲ以テ此レカ爲ニ期限ノ利益ヲ失フハ當然ニ屬シ、該條ノ之ヲ明示セザリシハ故テ之ヲ明示スルノ必要ナキニ因ルノミ、而シテ此利益ヲ失フハ何時ニ在リヤト云フニ清算中ハ法人尙ホ存續スルモノト看做スモノナレハ本條催告期間ノ滿了ノ時ヲ以テ之ヲ失フコトシ、隨テ其辨濟期限カ此滿了以後ニ在ルモノハ此滿了ノ時ニ於テ一併ニ之ヲ支拂フヲ當然トス、故ニ本問ノ要點ハ一ニ辨濟期限ノ此滿了以前ニ在ルモノニ關ス、而シテ此滿了以前ニ辨濟期限ノ既ニ至リシモノハ其至ルニ從ヒテ皆即時ニ之ヲ支拂ハサルヲ得ス、蓋シ辨濟期限ノ催告期間滿了後ニ在ル債權ハ滿了ノ時ヲ俟テ總テ同時ニ之ヲ支拂フモ債權者ノ爲メ利アリテ害スル所ナシ、何トナレハ此債權者ハ此ノ如クスルモ猶ホ其契約ノ期限前ニ皆其支拂ヲ受クルヲ得レハナリ、然レモ滿了前ニ期限ノ既ニ至リシ債權ニ付テハ一日其支拂ヲ遲延セハ一日其債權者ヲ害スルヲ以テ若シ其滿了ノ時マテ此等ノ支拂ヲ爲シ得ストセハ是レ此債權者ヲ害シテ他ノ債權者ヲ保護スルモノナリ、法律上宜シク爲スヘキ所ニ非ス、若シ夫レ清算ヲ以テ破

總 則 編

産ナリトセハ總債權者全体ノ保護ノ爲メ其支拂ヲ延期スルモ亦已ヲ得スト雖モ清算ハ固ヨリ破産ニ非サルヲ以テ此レカ爲メ不當ニ一債權者ヲ害スルヲ得ス、左ノ一例ヲ見ハ思半ハニ過クルモノアラン、茲ニ一ノ法人アリ或人ニ對シテ數万圓ノ債務ヲ負ヒ其辨濟期限ノ既ニ數日ニ迫リシハニ際シ突然解散ヲ議決シテ清算人ヲ任シ債權申出ノ催告ヲ爲サシメ非常ニ其申出期間ヲ長クシテ一今年(此期間ハ本條ニ最長限ヲ設ケス)ト爲シタルアリト假定セヨ、此場合ニ彼ノ延期說ヲ採テ其期間滿了前、即チ一今年間ハ支拂ヲ爲スヲ得ストセハ債權者ハ期限ノ既ニ到着セシト雖モ之ヲ請求スルヲ得スシテ手ヲ束ネ尙ホ一今年ノ滿了ヲ待タサル可カラス、其不利果シテ如何ソヤ、期限ノ既ニ至リシ支拂ヲモ併セテ爲スヲ得ストセハ此ノ如キ奸策ハ實ニ易々タルヘシ、故ニ期限ノ至リシモノト否トハ法理上當然之ヲ區別セサル可カラス、況ヤ第八十一條第三項ノ如キ數債權者中ノ一二ニ對シ早ク支拂ヲ爲スノ場合アルヲ認メタルハ亦以テ好證左ト爲スヘキニ於テヤ

於是乎論者更ニ言ヲ爲シテ曰ク此論タル固ヨリ一理ナシトセス、然リト雖モ本

問ノ場合ハ獨リ普通ノ理論ノミニ依ル可カラス、其設例ニ至リテモ亦極端ニ馳セテ殆ト稀有ノ場合ニ屬シ、以テ其論據ト爲スハ甚タ非ナリ、清算ノ破産ニ非サルハ實ニ子ノ言ノ如シト雖モ然レモ清算ハ頗ル破産ノ場合ニ類肖スルモノアルハ亦必ス之ヲ認メサル可カラス、故ニ破産ノ例規ヲ援テ直チニ本問ノ場合ニ適用セントスルハ固ヨリ割切ナラスト雖モ平等ニ債權者ヲ保護スルノ精神ハ則チ之ヲ應用セサル可カラス、元來法人カータヒ解散スレハ其資産ハ四分五散全ク一物ヲモ剩サ、ルニ至ルノミナラス將來永ク生殖スルヲ無キヲ以テ其清算ノ場合ニ於ケル債權者ノ保護ニ付テハ之ヲ常人ノ破産ニ比シテ寧ろ深ク意ヲ致サ、ル可カラス、然ルニ數個ノ債務ニ付キ其辨濟期限ノ至ル毎ニ此レカ支拂ヲ爲スモノトスレハ期限ヲ後ニ有セル債權者ノ不幸實ニ想見スヘシ、故ニ公平ニ各債權者ヲ保護セント欲セハ縱令其期限ノ既ニ至リシモノト雖モ之ヲ延シテ本條申出期間ノ滿了ヲ待チ各債權者ノ員數金額盡ク明確ナルニ及ヒ、然ル後或ハ直チニ或ハ第八十一條ニ依リ平等ニ其支拂ヲ爲サ、ル可カラス、若シ夫レ之ニ反シテ論者ノ說ニ從ヘハ本條ノ規定ハ却テ債權者ヲ陷ル、モノト爲ラ

總 則 編

總 則 編

ン、何トナレハ債權者ハ本條ニ依リ清算人ノ定メシ期間ノ滿了前ナラハ何時ニ申出ツルモ可ナルヘク、且其期間ヲ過クルニ非サレハ清算ヨリ除斥セラル、ト無シト信スルニ清算人ハ辨濟期限ノ既ニ至リシ債權ハ其申出次第ニ支拂ヲ得ハ其申出期間未タ滿了セス、他ノ債權者ハ未タ申出ヲ爲サ、ルニ法人ノ財産ハ早ク既ニ竭盡シ、他ノ債權者ハ事實上清算ヨリ除斥セラレ、シト同一ノ結果ニ歸スヘク、此時ニ及ヒテ第八十一條ノ手續ヲ爲シ且該第三項ニ依リ取戻ヲ爲サントスルモ一旦支拂ヲ受ケタル債權者カ既ニ之ヲ費消シテ資力ナキハ取戻モ其實效ナク、他ノ債權者ハ遂ニ損害ニ終ラサルヲ得サレハ、ナリ、子カ該項ヲ引證シテ先ツ一二ノ債權者ニ支拂ヲ爲ス場合アルコトヲ法律ノ認メシモノナリト云フハ是レ亦至大ノ誤見ニシテ法ハ總テ其必行ヲ期シ難キヨリ其背法者ニ付キテ或ハ救正法ヲ設ケ、或ハ制裁ヲ設クルハ法律ノ常事ニ屬シ、該項ノ如キ亦救正法ノ一トシテ先ツ一二ノ債權者ニ支拂ヲ爲スコトヲ得サルニ若シ之ヲ爲シタルハ則チ取戻スヲ得ト云フモノナリ、適以テ余ノ說ヲ證スルニ足ル、於是乎余ハ前記商法ノ如キ明文ナキニ拘ハラヌ本法ニ於テモ亦本條ノ結果トシテ本條僅

告ノ期間中ハ辨濟期限ノ既ニ至リシモノト否トニ論大ク總テノ債權者ニ對シテ支拂ヲ爲ス可カラサルハ復々疑ヲ容レサルナリト
 嗚呼何ソ論者ノ誤レルヤ若シ本條ノ法意ヲ以テ論者ノ言ノ如ク催告期間ノ滿了マテハ總テノ支拂ヲ禁スルモノトセハ其滿了以前ニ爲シタル支拂ハ不法ノ支拂ニシテ不法ノ支拂ハ無効タルヘキヲ以テ當然之ヲ取戻シ得ヘク第八十一條第三項ノ規定ヲ俟ツト無シ然ラハ則チ論者ノ言ハ偶々以テ該項ヲ無用ノ冗文ト爲スニ至ルモノニシテ世豈此ノ如キ無用ノ救正法ナルモノアラシヤ然ルニ翻リテ余ノ說ニ依レハ催告期間滿了前ニ於テモ期限ノ既ニ至リシ債權ニ對シテハ其申出次第ニ隨時ニ支拂ヲ爲ス可ク此レカ爲メ半途ニシテ債務完済ニ不足ナルコト分明ナルニ至リタルハ直チニ破産宣告ヲ請求シ隨テ其既ニ債權者ニ支拂ヒタルモノヲモ取戻スコトヲ得ト云フヘク此ノ如クシテ該項ハ始テ活如タル生命ヲ有スルノ規定タラン此點ヨリ之ヲ觀ルモ論者ノ言ハ到底不妥ヲ免レヌ殊ニ期限ハ債權者カ契約ニ依リ既ニ取得セシ明確ノ權利ナルヲ以テ苟モ之ヲ奪ハントセハ法文ノ明示ナカル可カラス然ルニ論者ノ如ク間接迂遠ナル

總 則 編

總 則 編

推及論法ニ依リ此明確ナル權利ヲ奪ハントス豈夫レ至當ノ解釋ナランヤ單ニ一債權者ヲ害シテ他債權者ヲ保護セントスル既ニ不可ナリ況ヤ期限ノ既ニ至レル債權者ヲ害シテ期限ノ未タ至ラサル債權者ヲ保護セントスルハ偏頗モ亦太甚シ是レ余カ遂ニ余ノ論ヲ固執セサルヲ得サル所以ナリ
 尙ホ清算ニ關スル一切ノ費用ハ何時ニテモ隨時ニ之ヲ支拂フコトヲ得ルノミナラス其費用ノ債權者ハ當然先取特權ヲ以テ第一ニ其支拂ヲ請求スルコトヲ得ルモノトス是レ清算費用ハ法人ノ各債權者ノ共同利益ヲ爲シタル費用ナレハナリ
 第三百六條及
 第三百七條

第八十條 前條ノ期間後ニ申出テタル債權者ハ法人ノ債務完済ノ後未タ歸屬權利者ニ引渡ササル財産ニ對シテノミ請求ヲ爲スコトヲ得

本條ハ申出ヲ怠リシ債權者ノ權利ヲ定メタルモノナリ
 清算人カ前條ニ依リ既ニ債權申出ノ期間ヲ公告セシキハ債權者ハ其期間ニ申出テサル可カラス況ヤ前條第二項ノ附記アリシニ尙ホ其申出ヲ怠ルニ於テハ彼レハ固ヨリ清算ヨリ除外セラルコトヲ甘受セサル可カラス故ニ此債權者ハ

總 則 編

假令眞ノ債權者ニ相違ナキモ全ク過失ナキ他ノ債權者ニ比スレハ其間自ラ區別ナキ能ハス。是レ此債權者ハ法人カ其債務ヲ完済シタル後其殘餘ノ財産ニシテ實際未タ歸屬權利者ニ引渡サ、ルモノニ對シテノミ辨償ノ請求ヲ爲シ得ルノ權利ヲ有スルモノト規定シタル所以ナリ。蓋シ期限ニ後レテ申出ヲ爲シタル者ハ其懈怠ノ責固ヨリ免カルヘカラスト雖モ唯其期限ニ後レタルノ故ヲ以テ全ク其權利ヲ失ハシムルハ頗ル苛酷ニ失スルノミナラス法人ハ殊ニ之ヲ口實トシテ其義務ヲ免カルヘキノ理ナキニ因ル

編 則

由是觀之法人若シ其債務ヲ完済シテ全ク殘餘財産ナキニ至リタル歟又ハ事實其殘餘財産ヲ全ク歸屬權利者ニ引渡シタル後ニ於テハ期間後ニ申出テタル債權者ハ最早其債權ノ全部ヲ烏有ニ附シテ自ラ損失ヲ負擔セサル可カラサルナリ
本條ニ關スル一問アリ期間ニ後ル、僅々一二日法人債務ノ清算總カニ成リテ未タ一ノ辨償ヲ爲サ、ルニ新ニ申出ヲ爲シタル債權者ト雖モ尙ホ他ノ債權者(期間中ニ申出テタル者)ト共ニ辨償ヲ受クルコトヲ得サルヤ否ト之ヲ受クルコトヲ

總 則 編

得ヘシト爲ス者ハ曰ク催告ノ期間ニ申出ヲ爲サ、リシハ實ニ彼レノ怠慢タルニ相違ナシト雖モ唯此怠慢ノ爲ニ他ノ債權者ト同等ニ並立スルコトヲ得スト爲サハ彼レハ他ノ債權者ニ辨償シタル殘餘ニ對スル外、請求ヲ爲スヲ得ス。況ヤ既ニ歸屬權利者ニ引渡ヲ爲シタルニ於テハ彼ハ一モ得ル所ナクシテ已マサル可カラス。是レ二重ノ制裁ヲ受クルモノニシテ其損害タル亦太甚シ。豈其罪小ニシテ其罰重キモノニ非スヤ。唯夫レ期間ニ後レシ至小ノ怠慢ノ爲ニ債權ヲシテ其實ナキニ至ラシムレハ之ヲ奇酷ト云ハスシテ何ソヤ。尤モ清算人カ既ニ他ノ債權者ニ對シテ現實ニ支拂ヲ爲シ了リシ後ニ申出テタルハ固ヨリ之ヲ取戻サシムヘキニ非ス。假令彼レ損失ヲ蒙ルモ已ヲ得スト雖モ本問ノ如ク單ニ帳簿上ノ計算ヲ爲シタルニ止マリテ未タ現實ノ支拂ヲ爲サ、ル場合ニ於テハ彼レ尙ホ他ノ債權者ト同等ニ請求ヲ爲シ得サル可カラス。何トナレハ此期間タルヤ畢竟清算事務ノ進捗ヲ謀リシニ過サレハ本問ノ場合ノ如キ之ヲ同等ニ置クモ其事務ヲ妨クルノ害ハ甚タ僅小ニシテ總カニ計算ヲ改ムルノ手數ヲ加フルノミニ止マレハナリト

余ハ此說ニ反對ノ決定ヲ執ラサルヲ得ス、若シ情實ニ依テ斟酌スルハ彼レノ爲ニ酷ナルハ實ニ論者ノ言ノ如シト雖モ是レ亦已ヲ得サルノ結果ノミ、抑々本條法人ノ債務完済ノ後トノ法文ハ單ニ其時期ヲ示セルモノニ非スシテ計算上ヨリ法人ノ債務ヲ完済セル殘餘ニ非サレハ期間後ニ申出テタル債權者ハ法人ノ財産ニ對シテ請求ノ權ナキヲ明示シタルナリ、而シテ法人ノ債務完済トハ必シモ現實ニ支拂ヲ爲シ了リタルヲ云フニ非ス、各債務ヲ完済スヘキ金額ヲ引去リシ後即チ計算上之ヲ完済スヘキ殘餘ニ非サレハ請求ヲ爲スヲ得サルモノナリ、且夫レ法文明ニ三期間後ニ申出テタルト記シアレハ期間ヲ後ル、二三日ナルモ將タ僅々一二日ナルモ決シテ其遲速ノ區別アラサルナリ、法律ノ明文ヨリ立論スレハ既ニ此ノ如シ、更ニ其精神ヨリ之ヲ論スルモ亦然ラサルヲ得サルモノアリテ存ス、元來法人ノ清算ハ恰モ破産ノ場合ニ於ケルカ如ク嚴正ニ事務ノ處分ヲ行ハサルヘカラス、且此期間ハ十分ノ猶豫ヲ以テ債權者ノ申出ヲ催告シタルモノナレハ其期間ノ滿了スルヤ他ニ一ノ債權者ナキモノト認定シテ不可ナシ故ニ其申出ヲ怠リシ債權者ハ固ヨリ其怠慢ノ制裁ヲ免カル可キニ非ス、殊ニ其

總 則 編

總 則 編

公告ニハ債權者カ期間内ニ申出ヲ爲サ、ルハ其債權ヲ清算ヨリ除斥スル旨ノ附記アリシヲ以テ其除斥ハ彼レ固ヨリ之ヲ甘受セサル可カラス、然ルニ本條カ或場合ニ其辨償ノ請求ヲ爲スヲ許セシハ彼レノ爲メ寧ロ恩惠タルモノニシテ決シテ之ヲ酷ト云フノ理アラス、且夫レ此期間タル清算事務進捗ノ爲ニ定メタルモノナレハ之ヲシテ確然其効力アラシメサル可カラス、然ルニ若シ論者ノ言ニ從ハン歟、期間内ニ申出テタル數債權者中僅ニ一人ノミ未タ現實ノ支拂ヲ了セサル時ニ當リ新債權者ノ申出(期間後ノ)アラハ茲ニ其計算ヲ一變スヘク、而シテ此新債權者ニ對シ未タ現實ノ支拂ヲ了セシテ又一ノ新債權者ノ申出アラハ更ニ其計算ヲ再變スヘク、三變四變殆ト際涯ナクシテ論理ノ窮極スル所遂ニ悉ク他ノ債權者ニ現實ニ支拂ヲ爲シ了リタル後ト雖モ尙ホ之ヲ取戻サシム可クシテ論者ノ言ハ唯ニ五十歩百歩ノ識ヲ免カレサルノミナラス期間ノ効力ヲモ全ク沒了スルニ至ルヲ免レサラントス、故ニ余ハ何レノ點ヨリ之ヲ觀ルモ既ニ期間ニ後レテ申出テタル債權者ハ他ノ債權者ニ現實ニ完済シ若クハ當ニ完済スヘキ金額ノ殘餘ニ對スルニ非サレハ其辨償ヲ請求スルヲ得サルモノト信

シテ疑ハサルナリ

總 則 編

論者乃チ更ニ一問ヲ起シテ曰ク本條未タ歸屬權利者ニ引渡サ、ル財產トアリ、前問題ノ場合ニシテ既ニ他ノ債權者ニ對シ現實ニ爲シタル完済ト計。算。上。ノ完済トヲ問ハストセハ此場合モ亦同一ノ論法ヲ以テ現實ノ引渡ヲ爲セシキト引渡ノ計算ノミヲ爲セシキトニ區別ナシト斷定セサル可カラス、即チ歸屬權利者ニ爲スヘキ引渡ノ計算案既ニ成リシキハ他ニ法人ノ財產ヲ發見スルニ非サレ期間後ニ申出テタル債權者ハ最早辨償ヲ請求シ得サルヘシト其レ然リ豈其レ然ランヤ、此場合ハ前問題ト異ナリテ此レカ區別ヲ爲シ現實ノ引渡ノミニ限ルモノト解セサル可カラス、何トナレハ縱令計算既ニ成ルモ之ヲ「引渡」ト云フヲ得サレハナリ、抑、歸屬權利者ハ法人ノ一切ノ債權者ニ完済シタル殘餘財產ノミヲ取得スルモノニシテ他ノ債權者ヲ害シテ自ラ富マスノ理ナシ、唯現實ニ歸屬權利者ニ引渡ヲ爲シ了リタルキハ之ヲ取戻スニ幾干ノ手數ヲ煩ハシ且歸屬利者ノ迷惑タル尠ナラス、即チ期間ノ效力ヲ推シ且清算事務ノ屢遷延スル弊ヲ防カント欲シテ特ニ此規定ヲ爲シタルナリ、然ルニ單ニ計算ヲ爲

總 則 編

セシノミノ場合ノ如キハ毫モ此愛アルヲ無シ、何ソ此例外法タル特別ノ規定ヲ適施スルヲ要センヤ、故ニ此場合ハ債權者固ヨリ之ヲ請求シ得サル可カラズ、只此ニ注意ス可キハ現實ノ引渡トハ歸屬權利者ノ數人アルキ其總員ニ引渡シ了ルヲ云フ乎、將タ其一人ニ對シテ引渡ヲ爲セハ則チ可ナル乎、又殘餘財產ノ全部ヲ引渡シ了ルヲ云フ乎、將タ其一部ヲ引渡セハ則チ可ナル乎ト、然レモ尠モ未タ現實ノ引渡ヲ爲サ、ルモノアレハ其人員ノ如何ト部分ノ多少トヲ問ハス其殘部ハ總テ之ヲ債權者ニ支拂フ可キモノトス、是レ法文ノ嚴正ナル解釋上必ス然ル所ニシテ法理上亦然ラサルヲ得サルナリ

第八十一條 清算中ニ法人ノ資産カ其債務ヲ完済スルニ不足ナルコト分明ナルニ至リタルトキハ清算人ハ直チニ破産宣告ノ請求ヲ爲シテ其旨ヲ公告スルコトヲ要ス
清算人ハ破産管財人ニ其事務ヲ引渡シタルトキハ其任ヲ終ハリタルモノトス
本條ノ場合ニ於テ既ニ債權者ニ支拂ヒ又ハ歸屬權利者ニ引渡シタルモノアルトキハ破産管財人ハ之ヲ取戻スコトヲ得

本條ハ法人ノ財產カ債務ノ完済ニ不足ナル場合ニ於テ清算人ノ爲スヘキ手續

ヲ定メタルモノナリ

凡ソ債務者ニシテ其債務ヲ完済スル能ハサルハ其人ノ商人ナルト非商人ナルトヲ問ハス又其債務ノ原因ノ商事ナルト非商事ナルトヲ問ハス皆破産處分ヲ受ケサル可カラサルハ本法ノ新ニ採リシ主義ニシテ法人モ亦此主義ニ依リ其營利的ナルト公益的ナルトヲ問ハス皆破産處分ヲ受ク可ク此レカ爲ニ法人ノ解散スルコアルハ前既ニ説キシ所ノ如シ然ルニ其解散原因ハ破産ニ因ラスシテ他ノ事由ニ出ツルモ解散後清算ヲ爲スニ當リテ其解散シタル法人ノ財産カ其總債務ヲ完済スルニ足ラサルコトヲ發見シタルハ亦破産處分ヲ受ケサル可カラス即チ解散シタル法人モ亦法人タル資格ヲ存続スルモノナルニ因リ尙ホ法人トシテ破産處分ヲ受クヘキモノトス蓋シ法人ノ財産カ其總債務ヲ完済スルニ足ラサルハ各債權者ハ其債權ノ全額ノ辨濟ヲ受クルコトヲ得サルニ因リ法人ノ財産ハ其各債權者ニ對シテ最モ公平ニ分配セサル可カラス然ルニ清算手續ハ勉メテ簡便輕易ヲ旨トシ此目的ニ副フニ足ラサルヲ以テ特ニ此目的ノ爲メニ定メタル嚴正ニシテ綿密ナル破産手續ニ依ルヲ當然ト爲スナリ

總 則 編

總 則 編

是故ニ清算人ハ其清算事務ノ執行中ニ於テ法人ノ財産カ其總債務ヲ完済スルニ不足ナルコトヲ發見シタルハ直チニ裁判所ノ對シテ破産宣告ノ請求ヲ爲シ且其旨ヲ公告スルヲ要ス元來破産宣告アルヤ裁判所ハ自ラ其旨ヲ公告スルモノニシテ清算人ノ破産宣告請求ノ結果ハ當然此裁判所ノ公告アルニ至ルモノナルヲ以テ本條ノ公告ハ清算人自ラ之ヲ爲スモノニ非サルニ似タリ加之ナラス若シ清算人自ラ之ヲ爲スニ於テハ二重ノ公告アルニ至ルト雖モ然レモ本條ノ法文ハ明ニ清算人ニ此義務ヲ命シタルモノニシテ清算人ハ裁判所ニ請求ヲ爲スト同時ニ即チ裁判所カ宣告ヲ爲シ公告ヲ爲スニ先タチ自ラ此公告ヲ爲スヘキモノトス是レ清算人ノ此公告ハ單ニ財産ノ不足ニシテ破産宣告ヲ請求セシコトヲ公告スルニ止マリ裁判所ノ爲ス公告ノ如ク明細詳細ナルモノニ非スシテ二者必シモ相重複セサルノミナラス一日モ早ク此公告ヲ爲サシメ以テ債權者其他ノ利害關係人ニ其事ヲ知ラシメント欲シ以テ之ヲ命シタルモノナリ清算人若シ此破産宣告ノ請求ヲ爲スコトヲ怠リ又ハ此公告ヲ爲スコトヲ怠リ若クハ不正ノ公告ヲ爲シタルハ第八十四條ノ制裁ヲ蒙フルナリ但破産宣告ノ請

求ヲ爲スコトヲ怠リシハ當然其公告ヲ爲サ、ルヲ以テ二重ノ制裁ヲ受クヘキ
 ヤ否ハ一ノ疑問タリ、請フ第八十四條ニ於テ之ヲ論述セム
 又清算人カ此ニ反シ果シテ右第一項ニ依リ破産宣告ノ請求ヲ爲シタルハ裁
 判所ハ其宣告ヲ爲シテ破産手續ヲ開始スヘク、此場合ハ破産法ニ依リ裁判所ハ
 破産管財人之ヲ選任シテ破産手續ヲ執行セシムルモノナルヲ以テ清算人ハ最
 早無用ノ人タルノミナラス若シ尙ホ之ヲ存置スレハ徒ラニ權限ノ疑議ヲ來ス
 ノ弊アルニ過キス、故ニ破産管財人ノ選任既ニ定マリタルハ清算人ハ之ニ其
 事務ヲ引渡シ以テ其任ヲ終ルモノトス

總 則 編

第三項ハ第七十九條ノ規定ト相關聯スルモノニシテ既ニ該條ニ於テ詳論セル
 如ク清算人ハ總債權者ノ申出ヲ待ツコト無ク期限ノ既ニ至リシ債權者ニ對シテ
 ハ其申出次第、隨時ニ支拂ヲ爲ス可キヲ以テ法人ノ財産カ其總債務ヲ完済スル
 ニ足ルヤ否ヲ知ル能ハサルノ時ニ於テ既ニ若干ノ債權者ニ對シテ支拂ヲ爲ス
 コアリ、故ニ後日ニ至リ幸ニシテ其財産カ其總債務ヲ完済スルニ足ルハ則チ
 可ナルモ本條ノ如ク完済ニ不足ナルハ則チ其前ノ支拂ヲ取戻スコトヲ得、歸屬

權利者ニ對シテハ殊ニ然リトス、蓋シ財産カ債務ノ完済ニ不足ナルハ破産法
 ニ依リテ總債權者カ平等ニ辨済ヲ受クヘキモノニシテ早ク支拂ヲ受ケタル債
 權者ノミ特別ノ利益ヲ受クルノ理ナシ、殊ニ歸屬權利者ハ債務完済後ノ殘餘財
 産ノミヲ受クル權利アルニ止マリ一般債權者ヲ害シテ自ラ利益スルノ理アラ
 サレハナリ

總 則 編

破産管財人カ清算人ノ既ニ債權者ニ支拂ヒ又ハ歸屬權利者ニ引渡シタルモノ
 ヲ取戻スノ權アルヤ此ノ如シ、然ルニ此取戻ヲ行フモ其債權者又ハ歸屬權利者
 既ニ之ヲ費消シテ他ニ資産ナク取戻ニ應スル能ハサルハ他ノ債權者ハ此ニ
 因リテ損害ヲ被フルモ是レ已ヲ得サルノ結果ニシテ清算人ヲシテ此レカ賠償
 ノ責ニ任セシムルコトヲ得ス、何トナレハ清算人カ早ク其支拂ヲ爲シタルハ期限
 ノ既ニ至リシ債權者ニ對スル必須ノ義務ヲ履行シタルモノニシテ毫モ過失ナ
 キ正當ノ行爲タルコト前ニ詳論セシ所ノ如クナレハナリ

尙ホ本條ニ付テ注意スヘキハ前條ノ場合ニ本條ヲ適用セサルコト是ナリ、蓋シ第
 七十九條ノ催告期間既ニ滿了シテ法人ノ債務ヲ完済セシ後ニ至リ數人ノ債權

者、同時ニ申出ヲ爲シ、現存ノ財産ヲ以テ其申出ノ債權額ヲ完済スルニ足ラザル
 片ハ此申出ヲ怠リシ債權者ニ對シテモ亦公平ニ配當スヘキハ論ヲ竣タスト雖
 モ、破産宣告ノ請求ハ之ヲ爲スコトヲ要セス、何トナレハ此場合ニ於ケル債權者ハ
 縱令現存財産カ其債權額ニ足ラサルモ其現ニ請求シ得ル權利ハ其現存財産ノ
 ミニ止マルヲ以テ之ヲ破産ノ原因ト爲スコトヲ得サレハナリ、然リ而シテ此場合ニ
 期間内ニ申出テタル債權者ニ對シ支拂ヒタルモノ及ヒ歸屬權利者ニ引渡シタ
 ルモノハ皆適法ノ行爲ナルヲ以テ本條第三項ニ依リ之ヲ取戻スコトヲ得ス、唯其
 現存ノ財産ヲ分配スルニ止ルナリ

第八十二條 法人ノ解散及清算ハ裁判所ノ監督ニ屬ス

裁判所ハ何時ニテモ職權ヲ以テ前項ノ監督ニ必要ナル検査ヲ爲スコトヲ得

法人ノ業務ハ概シテ公益ニ關スルヲ以テ専ラ行政官廳タル主務官廳ノ監督ヲ
 受ク、第六十條然ルニ法人既ニ解散スレハ其業務ハ茲ニ停止シ單ニ其殘務ノ處理
 トシテ清算事務アルニ過ス、而シテ清算事務ハ専ラ私權ニ關スルモノニシテ司法
 上ノ監督ヲ要スルヨリ此監督權ヲ裁判所ニ與ヘ、裁判所ヲシテ其解散ノ實況及

總 則 編

ヒ解散後清算人ノ執務ノ實況ヲ監督セシメ以テ不當ノ所爲、不正ノ計算等ヲ豫
 防シ以テ債權者及ヒ歸屬權利者ノ私權ヲ保護スルモノナリ
 裁判所既ニ監督ノ權アリ隨テ其權ヲ實行スルニ必要ナル検査ヲ行フノ權アリ、
 一切ノ書類、財産、金匱等ヲ検査シ、又清算人ニ對シテ説明ヲ爲サシムルコトヲ得
 シ、而シテ若シ清算人カ此検査ヲ妨ケタル片ハ第八十四條第三號ノ制裁ヲ免レサル
 ナリ

蓋シ此監督ハ裁判所ノ職權タルト同時ニ又其職務タリ、裁判所ハ常ニ之ヲ行ヘ
 敢テ怠ラザランコトヲ要ス、是レ私權ノ保護ノ爲メ必要ノ事項タルヲ以テナリ、然
 レハ検査ハ必シモ常ニ之ヲ行フ可キニ非ス、裁判所ノ意見ニ因リ其監督ヲ行フ
 ノ必要ヲ認メタル片之ヲ行フヘシ、何トナレハ如何ニ私權保護ノ任ニ當ル裁判
 所ト雖モ其必要ナキ場合ニマテ妄リニ人民ノ私事ニ干涉スルハ決シテ法律ノ
 望ム所ニ非サレハナリ

第八十三條 清算カ結了シタルトキハ清算人ハ之ヲ主務官廳ニ届出ツルコトヲ要ス

清算人カ法人ノ現務ヲ結了シ法人ノ債權ヲ取立テ清算ノ費用及ヒ法人ノ債務

總 則 編

ヲ完済シ其殘餘ノ財産ヲ歸屬權利者ニ引渡シタルハ清算事務茲ニ結了ス此
 場合ニ於テハ清算人ハ其清算事務ノ結了シタルヲ主務官廳ニ届出ツルノ義
 務アリ元來法人ハ其設立ニ付キ主務官廳ノ許可ヲ受ケ爾來常ニ其監督ヲ受ケ
 來リシモノナレハ其解散ノ時ニ當リテモ亦之ヲ届出ツヘク第七十條而シテ法人ハ
 其解散ノ時ニ於テ全ク消滅スルニ非ス爾後尙ホ清算中モ法人トシテ存續シ清
 算ノ結了ニ至リ始テ全ク消滅スルモノ第七十條ナレハ此場合ニ於テ更ニ之ヲ届
 出ツルハ克ク其終ヲ全フスルモノトス是レ本條ノ規定アル所以ナリ
 然ルニ破産ノ場合ニ於テハ本條ヲ適用スルキヤ否ヤ若シ之ヲ適用スヘシトセ
 ハ其適用ハ如何余ハ破産ノ場合ニ於テモ亦之ヲ適用スヘシト信ス即チ法人カ
 破産ニ因リテ解散シ直チニ破産手續ヲ開始セシキト其他ノ原因ニ因リテ解散
 シ清算中ニ破産手續ヲ開始セシキ第八十條ト問ハス破産手續ハ總テ普通ノ場
 合ニ於ケル清算事務ニ代ルモノニシテ隨テ破産管財人ハ清算人ニ代ルモノナ
 レハ破産手續ノ全ク結了セシキニ於テ破産管財人ハ本條ニ依リ之ヲ主務官廳
 ニ届出ツルノ義務アルヤ知ル可キナリ難者曰ク本條法文上ヨリ之ヲ觀ルニ本

總 則 編

條ハ「清算カ結了シタルキ」ト云ヒテ「破産手續カ結了シタルキ」ニ言及セス又清算
 人ト云ヒテ「破産管財人」ニ言及セス加之破産ノ場合ハ全ク裁判所ノ監督ニ屬シ
 主務官廳ニ關係ナキヨリ見ルモ届出ノ義務ナキヲ知ルヘシト是レ皮相ノ見ノ
 ミ本條法文ハ別ニ之ヲ明記セサルモ前述ノ如ク破産手續ハ清算ニ代リ破産管
 財人カ之ヲ届出ツヘキト本條適用ノ當ニ然ルヘキモノト謂ハサルヲ得ス且ヤ
 解散後主務官廳ノ監督ヲ受ケサルハ實ニ破産ノ場合ノミナラス他ノ場合ト雖
 モ清算ヘ總テ裁判所ノ監督ニ屬スルヲ前條ニ依リ明ナルニ尙ホ其結了ヲ主務
 官廳ニ届出ツルヲ以テスレハ破産ノ場合ニノミ届出ノ理由ナシト言クノ理ア
 ラサルナリ故ニ曰ク破産管財人モ亦此義務アリト

第四節 罰則

私法上ノ制裁ハ元來其規定ニ背反セシ行爲ヲ無効トシ若クハ之ニ因リテ生シ
 タル損害ヲ賠償セシムルニ由マルヲ常トス本法モ亦私法ノ一ナシハ固ヨリ以
 テ此制裁ニ止マルト雖モ特リ本章法人ノ規定ニ關シテハ此ノ如キ緩慢ナル制

裁ヲ以テ足レリトセス、特ニ罰則ヲ設ケ過料ノ制裁ヲ與フルト爲セリ、是レ法人ハ一個ノ自然人ト異ナリテ其行爲ハ概シテ公益ニ關係シ他人ニ對スル關係ノ重且大ナルモノアルヲ以テ本章ノ規定ハ必ス之ヲ施行シテ十分ニ遵守セシメサル可カラス、然ルニ若シ之ヲ遵守セサル者アルニ於テハ翹タニ其行爲ヲ無效トシ且損害ヲ賠償セシムルモ以テ其弊ヲ豫防スルノ保障ト爲スニ足ラスシテ一層嚴重ナル制裁ヲ與ヘサル可カラサルノ必要アルニ因ル

第八十四條 法人ノ理事、監事又ハ清算人ハ左ノ場合ニ於テハ五圓以上二百圓以下ノ過料ニ處セラル

總 則 編

一 本章ニ定メタル登記ヲ爲スコトヲ怠リタルトキ

二 第五十一條ノ規定ニ反シ又ハ財産目錄若クハ社員名簿不正ノ記載ヲ爲シタルトキ

三 第六十七條又ハ第八十二條ノ場合ニ於テ主務官廳又ハ裁判所ノ検査ヲ妨ケタルトキ

四 官廳又ハ總會ニ對シ不實ノ申立ヲ爲シ又ハ事實ヲ隱蔽シタルトキ

五 第七十條又ハ第八十一條ノ規定ニ反シ破産宣告ノ請求ヲ爲スコトヲ怠リタルトキ

六 第七十九條又ハ第八十一條ニ定メタル公告ヲ爲スコトヲ怠リ又ハ不正ノ公告ヲ爲シタルトキ

總 則 編

抑、此罰則タルヤ前述ノ如ク私法上特殊ノ制裁タルヲ以テ本章ノ規定ニ反シタル總テノ行爲ニ之ヲ科スルニ非ス、唯其特ニ重大ナルモノニ限レリ、故ニ本條ハ其行爲ヲ規定シテ六種ト爲シ、此六種ノ匪行ヲ過料ニ處スルト爲シタリ、然リ而シテ此制裁ヲ受クル者ハ法文之ヲ「理事、監事又ハ清算人」ト一並ニ記シ去リシヲ以テ此等ノ者皆之ヲ受クルニ似タレ、固ヨリ然ルニ非ス、理事ハ第一號乃至第五號ノ匪行ヲ爲スコトアリ、監事ハ單ニ第四號ノ匪行ニ止マリ、又清算人ハ第三號乃至第六號ノ匪行ヲ爲スヘク、各々其匪行ヲ爲セシ人ノミ制裁ヲ受クルヤ言フ、誤タサルナリ

今便宜上先ツ各號ノ匪行ニ付テ説述シ、最後ニ制裁ニ付テ説述スル所アラム
第一號 法人ノ設立及ヒ其解散等ハ登記ニ依リ之ヲ公示セサル可カラス、而シテ

其登記ヲ怠レハ他人ヲ誤マルト亦少カラス、尤モ設立ノ登記及ヒ登記事項變更ノ登記ノ如キハ其登記ヲ爲スマテハ其設立又ハ變更ノ效力ナキヲ以テ縱令登記ヲ爲サ、ルモ他人ヲ害スルコト無キニ似タリ、然レモ既ニ設立又ハ變更ノ事實アレハ他人ハ自ラ其ノ設立又ハ變更ヲ信スルニ登記ナキカ爲メ其效力ナシトセハ却テ之ヲ害スルニ至ルヘシ、要スルニ廣ク他人ヲ誤ルノ責ヲ免レサレハ之ニ制裁ヲ與フルナリ、而シテ本號其他本條ニ於ケル「怠リタル」トハ單ニ「懈怠」ノ意ヲ云フニ非ス、或爲スヘキ行爲ヲ爲サ、ルヲ稱スルモノニシテ故意ト過失トヲ論セス本章ニ依リ義務トシテ爲スヘキ登記其他ノコトヲ適法ノ時期ニ爲サ、ルモノヲ總稱スルナリ

總 則 編

第二號 法人ハ財團法人ト社團法人トヲ問ハス財産目錄ヲ作りテ之ヲ備ヘ置クノ義務アリ、又社團法人ニ在テハ社員名簿ヲ備フルノ義務アリ、是レ財團法人ニ於ケル財産、社團法人ニ於ケル社員ハ共ニ其法人ヲ組成スルモノニシテ其現況ノ如何ヲ分明ナラシムルハ固ヨリ必要ナルノミナラス社團法人ニ於ケル財産モ亦其法人ノ事業ヲ行フ基礎タルモノナレハ亦之ヲ分明ニスルノ必要アリ、

總 則 編

故ニ第五十一條ハ此義務ヲ命ジタルモノニシテ法人ノ理事ガ若シ此義務ニ反シテ之ヲ備ヘス又ハ之ニ不正ノ記載ヲ爲シタルハ當然此レカ制裁ナカルヘカラス、而シテ財産目錄若クハ社員名簿ヲ初ヨリ作ラサリシハ勿論財産目錄ハ毎年之ヲ作ルヘキモノナルニ之ヲ作ラスシテ舊目錄ヲ備ヘシハモ亦其宜シク備フヘキモノヲ備ヘサルニ因リ本號「財産目錄……」ヲ備ヘス「ト云ヘル法文ニ包含スヘク、又社員名簿ハ社員ノ變更アル毎ニ之ヲ訂正スヘキモノナルニ殊更ニ之ヲ訂正セサルハ本號「不正ノ記載」ト云ヘル法文ニ包含スヘク、皆其制裁ヲ免レサルモノナリ、蓋シ「不正ノ記載」トハ總テ故意ヲ以テ事實ニ適合セサル記載ヲ爲シタルモノヲ云ヒ、不正ノ意思惡意アリシコトヲ要ス、故ニ前號ト異ナリテ單ニ其過誤失錯ニ出テタルモノハ此制裁ヲ受ケス、是レ第六號規定ノ行文ニ依リテ自ラ其然ルヲ推知シ得ヘキナリ

第三號 本號ハ二種ノ場合ヲ併セ規定セリ、即チ理事カ第六十七條ニ依リテ主務官廳ノ行フ検査ヲ妨ケタル場合、及ヒ清算人カ第八十二條ニ依リテ裁判所ノ行フ検査ヲ妨ケタル場合ニ於テ其理事又ハ清算人ニ本條ノ制裁ヲ與フルナリ

總 則 編

第四號 本號ノ匪行ハ審ニ主務官廳ニ對シテ之ヲ行フコアルノミナラス裁判所ニ對シテモ亦之ヲ行フコアルヘシ此二者共ニ同一ニ制裁スヘキハ言フ俟タサルナリ唯單ニ「官廳」ノ字面ヨリスレハ本法ノ慣行ニ依リ或ハ裁判所ヲ包含セサルモノ、如シト雖モ政府委員ノ衆議院特別委員會ニ於ケル明言ニ依リ立法者ノ意モ亦之ヲ包含スルニ在ルヲ確知スルヲ得ヘキナリ要スルニ官廳トハ監督官廳ノ謂ニシテ主務官廳又ハ裁判所カ其監督權ニ依リテ訊問等ヲ爲スニ當リ理事又ハ清算人カ本號ノ匪行ヲ爲セシルハ共ニ制裁ヲ免レサルナリ又總會ニ對シテモ理事監事又ハ清算人等ノ此匪行ヲ爲スコアルヘク共ニ此制裁アルヤ亦論ナキナリ

蓋シ官廳又ハ總會ニ對シテ不實ノ申立ヲ爲セハ官廳又ハ總會ハ此レカ爲ニ誤マラルヘク社會公衆ニ於テモ亦其官廳又ハ總會ニ爲シタル申立ハ之ヲ信用スルノ一層ノ深キヲ加フルヲ以テ此レカ爲ニ誤マラルヘク殊ニ大ナルヘシ事實ヲ隱蔽セルキモ亦同シ然レモ本號ヲ適用スルニ付テハ最モ注意ヲ要スルモノアリ即チ本號ノ匪行ハ三個ノ條件ヲ備フルヲ要シ尙モ其一ヲ缺クニ於テハ之

ヲ適用スルヲ得ス左ノ條件即チ是ナリ

第一 故意アルコト

第二 事實ニ違フコト

第三 損害ヲ與フヘキモノナルコト

故意ヲ要スルハ法文上自ラ之ヲ推知シ得ヘク又其事實ニ違フヲ要スルハ言フ埃タス然レモ是レ亦注意スヘキモノアリ他ナシ當事者ハ不正ノ意アリテ不實ノ申立ヲ爲セシモ其誤信アリシ爲メ却テ事實ニ適合セシ場合ハ本條ノ制裁ナキコト是ナリ之ヲ例セハ法人財産ノ規額五万圓ナルニ清算人之ヲ六万圓アツト誤信シ債權者ヲ害スルノ意ヲ以テ特ニ之ヲ六万圓ト申立テタル場合ノ如シ是レ其事實ニ偶合セシカ爲メ他人ニ損害ヲ與ヘサルニ至リタレハナリ即チ縱令不實ノ申立ヲ爲シ又ハ事實ヲ隱蔽スルモ何人ニモ損害ヲ與フヘキモノニ非ザリシキハ之ヲ匪行トスルヲ得ス故ニ必ス此條件ヲ要スルモ現實ニ損害ヲ與フルヲ要セス唯其與ヘ得ヘキモノナレハ則チ可ナルナリ

第五號 理事ハ第七十條ノ場合ニ清算人ハ第八十一條ノ場合ニ共ニ破産宣告

總 則 編

ノ請求ヲ爲スノ義務アリ、若シ此義務ヲ怠レハ則チ此制裁アルナリ
 第六號 本號ハ二個ノ場合共ニ清算人ノ匪行ニ屬ス、而シテ本號ト前號トノ關係
 ニ付テハ一問アリ、即チ清算人カ第八十一條ノ場合ニ破産宣告ノ請求ヲ爲セシ
 モ其公告ノミヲ怠リシハ固ヨリ本號ノ匪行トシテ制裁ヲ受クヘキモ破産宣
 告ノ請求ヲ爲スヲ怠リ隨テ其宣告ヲ怠リシハ如何、前號ト本號ト二個ノ匪
 行アリシモノトシテ二重ニ制裁ヲ併科スヘキヤ否ヤ、蓋シ破産宣告ノ請求ト公
 告トハ因ヨリ二事ナリト雖モ後者ハ前者ノ結果ニシテ前者ヲ爲スモ後者ヲ怠
 ルコトハ抄ナシトセス、之ニ反シ前者ヲ怠リテ後者ノミヲ爲スハ絶無ノ事タ
 ラサルヲ得ス、即チ前者ヲ怠レハ後者モ亦之ヲ怠タルハ當然ノ結果ナルヲ以テ
 此場合ニハ二個ノ匪行アリト云フヲ得ス、隨テ本號ト前號ト併發スレハ本號ノ
 匪行ハ當然前號ノ匪行ニ吸收セラレ、單ニ前號ノ一匪行トシテ一ノ制裁ヲ科ス
 ルヲ正當ナリト信ス

本條六號ノ匪行ノ何タルハ略シ、此ノ如シ、而シテ之ニ科スヘキ制裁ハ五圓以上二百
 圓以下ノ過科ニシテ其範圍最モ廣シ、商法ニ於テハ各種ノ匪行ニ付キ各種ノ制

總 則 編

裁ヲ設ケ詳密ニ之ヲ定メシモ本法ハ之ニ反シ匪行ヲ一括シテ本條ニ列擧シ此
 ノ如ク最モ廣キ範圍ノ制裁ヲ掲クルニ過ス、是レ法律ニ於テ豫メ拘子定規的ニ
 之ヲ定メンヨリハ之ヲ裁判官ニ一任シ能ク匪行ノ大小輕重ニ依リ其事情ニ適
 應シテ適宜ニ制裁ヲ定メシメントノ意ニ出ツ、故ニ裁判官ハ此ニ依テ其職權ノ
 甚タ大ナルト共ニ其責任モ亦甚タ重キヲ加フ、慎マサル可ケンヤ
 然リ而シテ過科トハ何ソヤ、是レ固ヨリ私法上普通ノ制裁ニ非サルハ前述ノ如ク
 ナルモ亦刑法上ノ科料若クハ罰金ノ如キ刑罰ニ非スシテ尙ホ私法上ノ一種特
 別ナル制裁ニ外ナラス、故ニ本條ノ規定ハ決シテ刑法ノ領域ヲ侵セシモノニ非
 ス、隨テ本條ノ匪行カ刑法ノ犯罪タルハ一面ニハ本條ノ過科ヲ科シ一面ニハ
 刑法ノ刑罰ヲ科スヘク、兩者並ヒ行ハレテ相戾ラス、例ヘハ本條第二號ノ匪行カ
 刑法ノ文書偽造若クハ詐欺取財タリシハ又ハ第三號ノ匪行カ刑法ノ官吏ノ職
 務ヲ妨害スル罪タリシハノ如キ其一行爲ニ對シテ二法各自ニ其制裁ヲ科スヘ
 キナリ

又過科ハ此ノ如ク刑罰ニ非サルニ因リ過科ニ關スル一切ノ處分及ヒ手續ハ特